
FORTUNE ARTERIAL ~ 支倉孝平は転生者にして聖王 ~

黒彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FORTUNE ARTERIAL 支倉孝平は転生者にして聖王

【Nコード】

N0748Q

【作者名】

黒彗星

【あらすじ】

俺こと浅木正嗣は交通事故で死んでしまった。だけど、気が付いたら虹色の空間に居て、目の前には何故か聖王の証を持った高町なのはが居た。その聖王なのは俺を好きな場所に転生させてくれると言ってくれた。そして、俺が選んだのはFAの主人公の支倉孝平だった。どうして、孝平を選んだかって？この作品が好きだからに決まっているぜっ!!!

と言っわけで、FORTUNE ARTERIAL 支倉孝平は転

生者にして聖王へ始まるぜっ！！

注意1：この作品はFA、とらは3、なのは、色々のクロス物です。

注意2：魔法少女リリカルなのは、聖王と魔装機神への設定が含まれています。

注意3：この作品は不定期更新です。

注意4：この作品の作者は文才0です。

それでも良いと言う方はどうぞ。

プロローグ

3月25日、ある青年が横断歩道を歩いていたら、信号無視をした車に引かれた。その車はそのまま走ると、信号待ちをしていた別の車にぶつかった。両運転手は重症で、横断道路を歩いていた青年は即死であった。事故の原因は、居眠り運転だった。

救急車や警察が着いて、運転手2人は救急車に運ばれ、青年は死亡が確認されたので、警察によって身元を確認された。すると、その青年については財布にあつた自動二輪の免許書で直ぐに判明した。彼の名は浅木正嗣。ある大手の会社の御曹司で、趣味のゲームや漫画等を買に行つた帰りの途中だった所を車に引かれたのだらうと推測された。その証拠として、彼の持っていた袋の中には、今日発売したゲームを筆頭に、様々なゲームや漫画等が入っていた。その後、彼の遺体は直ぐに遺族に引き取られ、壮大な葬式が行われた。そして、警察はその間に意識が回復した運転手2人に事情聴取した。その結果、青年を引いた運転手、浅間春樹（25歳）が逮捕された。

3

場所：虹色の空間

視点：浅木正嗣

俺は目を覚まし

「ん、此処は？」

と意識が朦朧となりながらも言い、周りを見渡した。しかしそこは、虹色の空間で何も無かった。その事を不思議に思い、俺はさっきまで合つた事を思い出そうとしていた。

（確か、今日は予約していたゲームの発売日で、序に色々買ったんだつたよな？それでその後・・・）

「あつ！！」

と全てを思い出して声を上げてから

「そうだよ。何で俺こんな所にいるんだよ？俺、死んだはずだろ？何で生きてるんだよ！！」

と言うとそこへ

「少し違うよ。」

と言う声は何処からか聞こえる。俺はその声に驚きつつも

「だ、誰だ！！」

と叫んだ。すると一人の少女が現れて

「私は、高町なのは。これでも神の一人です。」

と言う。俺は、そんな胡散臭いと思いつつも、そのなのはって子の顔を見る。すると、アニメ等で見た高町なのはの顔立ちに何故か聖王の証である翠と紅の瞳をしていた。俺はそれを見た時、確かに神だな。となんとなく心の中で納得してしまっていた。なぜなら、聖王というのは魔法少女リリカルなのはシリーズに登場する王族で、長きに渡る古代ベルカ戦争を停めたと言う偉業で神として崇められている人物だからだ。しかし、今はそんな事を気にしている場合ではなく、どうして死んだはずの俺が此処にいるのかと聞く為に

「どうして死んだはずの俺が此処にいる！？」

と聖王の証を持ったなのは（此処からは聖王なのは）に聞く。すると「貴方は確かに肉体は滅んだよ。だけど、なぜか魂は此処に流れ着いてきてしまったの。そして、私に仕事の1つには、そういった人達を転生させると言う役目が含まれているの。ただし、悪人だった場合は、閻魔の所に送って、地獄に行つて貰うけどね。因みに、君は大丈夫だよ。」

と言う。そして俺は

「それで、俺は何処に転生させられるんだ？」

と聞いた。すると

「それは貴方が決める事よ。浅木正嗣。」

と言った。って、俺名前言ったか？と思つたが、相手が神なら判つても可笑しくないかと思ひ至りながらも希望を言う。

「そうか、ならFAの世界の支倉孝平になりたい。それと、幾つかの能力が欲しい。」

と言う。すると聖王なのは

「了解。それと、能力に関しては、元よりそのつもりだよ。因みに、ある程度大きくなったら道具も送るし連絡先も教えるね。」

と言ってくれた。それに俺は有り難うと礼を言う。すると

「うん、こつちも仕事みたいな物だし気にしなくて良いよ。それじゃあ、始めるよ。」

と言うと俺の体が光だし、意識が朦朧としだした。そこへ

「ああ、言い忘れてたけど、貴方の家の隣に転生者が居るから、その能力の一つについては彼女に習えば良いよ。彼女の事は、アニメで知っているから直ぐに判るよ。」

と言った所を、そういうことはもっと早く言ってくれと、朦朧とした頭で思いながら、俺は眠りに落ちた。

視点終了

視点：聖王なのは

「さて、これで最後かな？グラギオス？」

と私は相棒の一機に話しかけた。そして

「そのようだ。しかし、なのはよ。お主は大丈夫か？いくら聖王の心臓があるからとはいえ、転生術使用には、リンカーコアに負担が掛かる。それを連続的に行使したのであれば、かなりの負担なのだな。」

虹色の宝石の形をしたグラギオスは私の心配をしてくれた。それに頷いて

「うん、確かにきついね。でも、まだ大丈夫だよ。」
と答えた。そして

「それよりもさっきは驚いたよ。まさか、別世界の私や兄さんがこの空間に来るなんてね。」

と私は続けて言う。そう。私はさっきの浅木正嗣を転生させる前に、別世界の自分とその世界とは別の世界の兄を転生させたのだ。そして「確かに。しかも別世界のお主は……」

とグラギオスが途中まで言うと、今度は私が続きを言う。「うん。間違いなく殺つたのは管理局だろうね。向こう側のはやて達にこれを見せて教えようかな？」

そう。向こう側の私は管理局に殺されたのだと確信していた。それは、証拠があるからだ。どういう証拠かと言うと、最高評議会が向こうの私を利用して兵器の性能を確かめようと話しているディスクだ。そして、私はそれを向こう側のはやて達に見せようと言うのだ。それに

「そうだな。それが良いだろう。」

とグラギオスも賛成してくれた。そして私はそのことを後回しにして「まあ、そのことは後にして、久しぶりに皆に会いに行かない？最近は久遠にも会ってないし。」

と提案する。すると

「そうだな。我もお主の使い魔に会っていないからな。」

とまた賛成してくれた。その言葉に

「じゃあ、行こっか！」

と頷きながら言う私に

「うむ！！」

とグラギオスが返事をした。そして、私は転移魔法を使って自分が生まれた世界の海鳴市へと帰っていった。

視点終了

その後、聖王なのはは自分の世界の中間達に一ヶ月振りの再会を果たした後、別世界の自分が死んだ世界へ行き、その世界での信用できるであろう人物達に映像ディスクを見せた。それを見たはやて達は、反管理局組織”黒帝”を設立し、表では管理局員、裏では黒帝総帥と言う二束の草鞋を履く事となった。

プロローグ（後書き）

聖王と魔装機神が終わってないのに投稿してしまいました。だけどこれも趣味の範囲内なので気にしないで下さい。

キャラ設定

支倉家

支倉孝平

年齢：0

誕生日：3月25日

魔力：不明

デバイス：なし

能力：不明

支倉家の長男にして、この小説の主人公。

聖王の血を引いている。ただ、聖王の証を持っているのは孝平のみである。

尚、生まれながらにして、高い身体能力を持っている。

現在は赤ん坊だが、前世の記憶や知識、それに能力をそのまま引き継いで生まれてきた為、直ぐに喋って、親に自分が転生者だということ进行明かす。だけど、それでも気持ち悪がらずに可愛がってくれる支倉夫婦にとても感謝している。

容姿は、瞳は翠と紅で髪は黒である。

支倉孝太

年齢：25

オリキャラ

孝平の父親で一般人である。建築関係の仕事をしている。

支倉美子

年齢：24

オリキャラ

孝平の母親で聖王の子孫である。ただし、聖王の証を持っていないばかりか魔力がないので一般人。

御神・不破家

恭也の活躍で御神家・不破家は健在。桃子が不破家に嫁ぐ形となった。尚、御神・不破本家は海鳴市にあるという設定である。因みに、現御神家の当主は御神静馬で、不破家の当主は不破士郎の弟の不破一臣である。

不破なのは

年齢：0

誕生日：3月25日

魔力：AAA+

デバイス：なし

聖王なのはにより転生した存在。

知識や才能が前世の分プラスされ、更には高い身体能力を、生まれながらにして持っている。

尚、家族には前世の事を話している。しかし、今まで知らなかった事を知って、戸惑いを隠せない様子。

不破恭也

年齢：10歳

誕生日：3月25日

魔力：SS

デバイス：シユロウガ、影の書

聖王なのはにより転生した存在。

前世の経験や能力を受け継いでいるのと、聖王なのはの力のお陰で、かなり高い運動能力を持つ。

なのはを前世同様に溺愛している。

御神・不破家には、自分が転生者だということを明かして、自らの魔法で両家を助けている。士郎には特殊デバイス”ガーディアン”

を渡している。因みにガーディアンは聖王なのはから渡されたものである。

不破桃子

苗字が違っただけで、後はほぼりリカルなのはの原作同様。

不破士郎

恭也に渡された特殊デバイス”ガーディアン”を持っているが、魔力を持っていない為、自分の意思での使用はできない。
苗字が違っ以外はほぼりリカルなのはの原作同様。しかし、まだフイアッセを狙った爆弾テロが起きていない為、護衛の仕事はしている。

その他の御神・不破家の皆さん

全員生存していて、美沙斗は復讐に走っていないし、美由希は御神姓のまま。

何人かは、翠屋を手伝いなどをしている為、桃子は育児にも余裕が出来ている。

キャラ設定（後書き）

次はとうとう支倉家の登場です。因みに、3人の誕生日が同じなのは、同じ日に転生したからです。とはいっても恭也だけ、聖王なのはの意向により2人より10年も早く生まれているという設定です。

第1話「3人の転生者」

場所：病院

視点：???

「オギヤー、オギヤー、オギヤー」

と気が付いたら赤ん坊の泣き声が聞こえた。しかも、近いつて言うかこの泣き声発しているのって俺じゃないか？と思っっていると

「は〜い、元気な男の子ですよ。」

と言う看護婦らしき人の声が聞こえる。らしいつて言うのは、まだ俺の目が開かなくて閉じたままだからだ。どうやら本当に転生したらしい。今まで半信半疑だったが、あの聖王なのはが本当に神の力を持つていたとは驚きだ。さて、ずっと泣いている俺はどうやら俺の意思には従つてくれないらしく泣いてばかりだった。まあ、そんなわけで意識を喋っている母親や看護婦に向ける。すると

「始めまして、私は支倉美子。貴方の母親よ。」

と言う優しい声が聞こえる。だけど、それと同様に自分の泣き声も聞こえるせいでその優しい声は聞きづらかった。その後、俺は泣き止み、目も見えるようになったし、自分の意思で体を動かせるようになった。どうやら身体能力と視力が前世の状態に近づいたようだ。しかし、それでも喋る事が出来なかった。声帯や言語系の神経とかが成長してないらしい。そんな事を考えていると、急に俺は眠気に襲われた。どうやら、泣き疲れてしまったらしい。それから1分後、どうにか抗おうとしたが、所詮は赤ん坊。本能にはどうしても逆らえなくて、俺はまどろみの中へと落ちていった。

それから2日後、俺に支倉孝平というFAの主人公と同じ名前が付けられた。その頃には目が開かれるようになっていて、幼児を入れる専用のガラス張りのベットで自分の容姿を確認する。俺の髪の色は、原作通りの黒だった。しかし、目に問題があった。なんと、俺

の目は何故か翠と紅と言う聖王家の証を持っていた。看護婦さん達もその事には首をかしげていた。だけど、母さんだけは何か知っているような感じだったらしいので、退院したら聞いてみることにした。それと、俺は前世の時並みに喋れるようになっていた。だけど、その事は退院するまで秘密にする事にした。なぜって？それは親ならまだ良いが他人に喋るのを聞かれたくないし、見られたくないからだ。下手に喋って気持ち悪がられたりしたら嫌だからだ。え？両親には良いのかって？それは多分大丈夫だろう。これでも人を見る目はある方だ。でもそれで嫌われたり気持ち悪がられたら、それは俺の人を見る眼が無いと言うだけの話だ。

数カ月後、俺は母親と共に退院して、父さんが運転する車で、我が家となる家へと向かった。因みに父さんは俺が生まれてから退院するまで時間の折り合いが悪く、俺が寝ている時にしか来れなかったらしい。それから俺は、直ぐに自分が喋れる事や、転生者だということを教えた。それでも、この夫婦は俺を受け入れてくれた。それと、母さんに自分の聖王の目の事を聞いたら、支倉家に嫁ぐ前は瀬尾家と言う家の人間だったらしく、その瀬尾家は聖王家の遠い子孫だと言うのだ。しかし、ある時から証を持つ者が居なくなっていたが、何故か俺にその証があると知ったと時は内心驚いたらしい。俺はそれを聞いた時、聖王なのは顔が思い浮かんだが、その事は後回しにして、俺以外にも転生者が居る事や、その転生者が家の隣に住んでいると言う事を教えた。すると

「ああ、もしかして恭也君かな？」

「そうね。あの子も結構小さいから喋れたっていうし、雰囲気や言動が大人びているからその可能性が高いな。」
と教えてくれた。って、恭也ってもしかしと思

「それはわかんないけど。もしかして名前って不破恭也さんか高町恭也さんだったりする？」

「「なっ!?!」」

と両親が驚いた。それを見た時、俺は自分の推理が間違いない事

を悟った。そして

「何でそれを！もしかして前世の知り合いだったのか？」

と父さんが聞いてきた。なので俺は正直に

「違うよ、父さん。確かに知っている事は知っているけど、それはアニメやゲームでの話だよ。」

と言った。それに？マークを浮かべる両親に苦笑しながら

「どういうことだ？」

と父さんが聞いてきた。そして、俺はとらは3での知りうる知識を父さんと母さんに話した。聖王家の血筋なんだから問題ないだろうと思いい、序に魔法少女リリカルなのはの事についても話した。すると、とんでもない話が飛び出してきた。

「そういえば、桃子さんに会った時、孝平が生まれた日になのはちゃんって子が生まれたって聞いたわよ。確か、家と同じ日に退院って言うってたわ。」

それを聞いた時、とらはの方のなのはの誕生日ではあるが思い出した。そして、聖王なのはの言っていたことがなんとなく判った気がした。俺はその先生になる可能性のあるなのはに直ぐにでも顔を合わせておきたい。なので

「そう。じゃあ、そのなのはって子に会わせて欲しいって桃子さんに言ってくれる？なのはって子に俺も転生者ですって言えば直ぐに返事くれるだろうから。」

と言う。すると父さんが

「ってことはもしかして、なのはって子も転生者の可能性があるってことだな？」

と俺の考えている事を言い当てた。

「うん。」

それに頷く俺に

「うん、じゃあ今度士郎さんか桃子さんに聞いてみるわ。士郎さんや桃子さんとは隣同士って事で、入院中も世間話してたからね。」と母さんがそう言うてくれた。その言葉に俺は

「有り難う。お願いします。」

と言った。こうして数日後、俺は母さんのお陰でなのはに会う事が出来た。それと、この世界の不破恭也さんも転生者だったことが判明し、俺はなのはや恭也さん達がゲームやアニメの主人公だと言う事を話した。最初は嘘だと言う様な顔をしていたけれど、それぞれの世界で起きたエピソードを話すと信じてくれるようになった。えっ!?俺は違うのかって?俺の場合は現実世界から来たから数に入れないよ。

そして、俺達三人は誰によって転生させられたのか、死因はなんだったのかを俺の家で語り合おうという事になった。その結果、俺達3人は聖王なのによって転生させられ、なのははSTSで語られた11・2歳の時のアンノウン襲撃事件(正体は聖王のゆりかごに搭載されていた艦載機であり、管理局、というより最高評議会がジエイルに命令してやらせた事)で、恭也さんの居る前で、なのはにその出来事の真相や管理局の様々な悪事を話したら

「そ、そんな!!私達は何の為に働いてきたの!?少なくとも私は多くの人を助けたいと思ったから管理局に入ったの!!!そんなの無いよ!!!」

と絶望と悲しみで泣き出してしまった。その事を聞いていた恭也さんは、なのはを抱き上げると

「なぜその世界の俺達はなのはを止めなかったんだ?命に関わる事だっけ分かってたのだろうに。」

と言葉では冷静に言っただけはいるが、内心では怒っているのが判った。そして、俺は推測ではあるが答える事にした。

「フィアッセさんを狙った爆弾テロは、向こう側ではなのはが生まれてから起きました。しかし、その世界では士郎さんは瀕死の重傷ですが、生きていました。ですが、当時開業した翠屋を持ち直す事や士郎さんの看病などがあり、なのはは幼少の頃から一人ぼっちでした。一応親戚が面倒を見てくれていたそうなんです、それでも一人で居る方が多かったそうです。しかも、晶やレンといった貴方

が生きていた世界で居候していた人達はいませんでした。」
と言うと恭也さんは

「ずっと一人ぼっちだったわけか。しかし、翠屋の経営や父さんが退院すれば、その埋め合わせは出来るんじゃないか？」

と言った。それならなのは少しは救われていたのだと思う。しかし、話はそんな簡単な話じゃない。その事を言う為に

「それなら、なのはもう少しは救われていたんだと思います。ただ、なのはアニメ本編開始時点では一人でした。確かに、土郎さん、桃子さん、向こう側の恭也さん、美由希さんはいましたが、なのはほっといてそれぞれ高町夫婦、恭也さんと美由希さんとで仲良くしてました。そのせいでなのは疎外感を感じていたようです。アニメの台詞でもそう言ってましたしね。」

と言う。その言葉に別世界の自分達の家族に怒りを感じたのか、恭也さんは

「な、なんだと!!」
と怒鳴っていた。だけど、それだけじゃないんだよね。

「それだけじゃありませんよ。ある話で魔法の師匠にずっと小さい頃から一人だったから大丈夫って言ってたし、良い子にしてないと駄目、我が俣言っても駄目っていう風に思っていて、更には自分は要らないんじゃないかと言うような考えをしていたようです。多分、その事を家族は気が付いても何もしなかった。その罪悪感が邪魔をして止められなかったのが理由じゃないかと思えますよ。」

と俺は言うつと、恭也さんは自分の頬を殴った。そして
「今すぐ、向こうの俺や家族を殴ってやりたい。何せ、こののが死んだ理由が向こうの俺達にあるんだからな!!」
と怒りを剥き出しに言った。そのことに対し俺は推測で

「別世界の自分だから自分にも非があると?だから自分を殴ると?」
と聞く。すると

「そつだ!!」
と怒鳴りながら肯定した。当たり前だった。なので、俺はある提案を

恭也さんに出す事にした。

「じゃあ、聖王なのは頼めば良いじゃないですか？俺を死んだなのは家族の所に行かせてくれって。」

そう、自力で行けないのなら他の人の力を借りれば良いのだ。しかも、その願いを叶えられる可能性を持った神という存在がいるのだ。

「しかし、そんな事で許可がでる分けないだろう？」

と俺の言葉に反論した。しかし、俺も原作のなのはの家族には怒りを感じていたし、なのはの為に、引き下がるわけにはいかなかった。「そんなの、言ってみなければ判りませんよ？もしかしたら、して貰えるかもしれませんよ？」と言う事で今度会った時にでも話してみてください。」

と言うと

「その必要はないよ。」

と後ろから声がした。その声には聞き覚えがあり、声がした所を見る。するとそこには、今俺が一番会いたがっていた人物、聖王なのはが立っていた。

視点終了

第1話「3人の転生者」(後書き)

次は、死んだなのはの世界に行く下準備をします。

それと、孝平以外のFA関係者が出てくるのは、もう少し時間が掛かります。

第2話「並行世界へく前編」

「その必要はないよ。」

と言う言葉に驚く3人。振り向くと、そこには聖王なののがいた。そして、そのいきなり現れた聖王なのはに驚きながらも

「い、いきなり現れてどうしたんだ？」

と動揺しながら孝平が聞く。すると

「君に言い忘れた事があつてね。」

と聖王なののが答える。

「言い忘れた事？」

その言葉を復唱する孝平に

「うん。ほら、能力が欲しいって言ってたでしょ。その能力についての説明だよ。」

と言う。能力が何か分からない以上、どうすれば良いか判らないからだ。

「そうか。って今はそんな事説明してる場合じゃない！！話は粗方聞いてたんだろ？なら俺達をこのなのはの前世がいた世界に連れて行ってくれ！！」

と言う。すると以外にもあっさり

「判った。」

と頷いた。それを見た孝平は

「じゃあ、今すぐでも行こう！！」

と急かすが、聖王なのははそれを無視して

「でも、その前に条件があるよ。」

と言う。それに疑問符を浮かべつつもそう言った聖王なのはに

「条件？その条件は何だ？」

と聞く。そして

「それはね。その世界の管理局に、ある反管理局組織が現れたの。」
と説明をしますが、途中で

「って事は、その組織を潰せってか？俺はそんなのやだぜ！！なのはを殺した組織を助けるなんてな！！」

と勘違いしながら怒鳴る。因みに、普段なら近所迷惑だろうが、幸い赤ん坊なのは小さいながらも結界を張っていた為、近所には聞こえない。聖王なのはそんな孝平に

「落ち着きなさい。そんな事は一言も言っていないよ。」

と言って、落ち着かせる。しかし、管理局やなのはの家族に対する怒りが強いためか

「じゃあ、何なんだよ！！」

と怒った声で言う。すると聖王なのはは

「君は管理局が嫌い？」

と言う事を聞いた。その問いに

「ああ、大嫌いだ！！」

と即答する。すると

「そう。なら都合が良いね。」

と言った。その言葉に孝平と赤ん坊なのはは直ぐに聖王なのはの思惑に気づき

「って、まさか！！」

といつの間にか泣き止んで落ち着いた赤ん坊の不破なのはが驚く。

そう、彼女は何が言いたいのかが分かったのだ。そして、それは孝平も一緒だった様で、声を出さなくても表情でその事を物語っていた。

「さすが別世界とはいえ私ね。そして、孝平もすごいね。今の言葉で理解したんだ。」

と褒めると更に言葉を続ける。

「そう。私が言いたいののは、その反管理局組織”黒帝”に加担して欲しいの。」

その言葉に

「まあ、そういうことだったら俺に異存は無い。」

と孝平が言い、恭也も

「俺もだ。妹を殺した罪は償わせる。」

と賛同する。しかし、なのはは迷っているようで答えを出せずにいた。

「わ、私は………」

とおどおどしているのはに

「ああ、君はまだ出さなくて良いよ。前世での親友とは敵対したくないもんね。」

と聖王なのが言う。そして、それに俯きながら頷いて

「……うん。」

と返事をするのは。それでも、聖王なのはは何にも問題ないという表情と口調で

「でも、迷う必要は無いけどね。」

と言った。その事に

「どうして？」

となのはが聞く。すると、とんでもないことが彼女の口から飛び出した。

「だって、その黒帝のリーダーってはやてなんだもん。因みに構成メンバーは殆どが君と面識のあるフェイト、ヴォルケンリッター、ハラオウン親子を始めとしたアースラスターフ、レティ提督なんだから。それに、グレアム元提督達も協力しているよ。」

と言う聖王なのはに

「「なっ!!!」」

と2人とも驚いた。しかし恭也は誰かは知らない為、疑問符を浮かべている。そして

「どうしてだ? ってあゝ、なるほど。」

と理由を聞こうとしたが、聖王なのはが笑っている事に気づき、納得した様にその理由を聞くのを止めた。それに不審に思った恭也が「分かったのか?」

と聞く。すると、孝平は自分の推測を語り始める。

「はい。その原因は、そこにいる神です。多分、何らかの手段では

やて達になのは殺しの実行犯が管理局だつて教えたんでしょね。」
と言つと

「「なっ！！」」

となのはと恭也は驚きの表情を浮かべながら聖王なのはの顔を見る。
すると、笑いながら

「よく分かつたね。その通りだよ。」

と肯定する。そして

「何かしたのか？」

と聞く。すると

「うん。これと同じ物を見せたただけだよ。」

と言いながら、何処からか持ち運び可能なDVDレコーダーを取り出してディスクをセットして再生させる。そこには、何らかの液体により、脳髓が浮かんでいるポッドが映し出されていた。すると

「「なっ！！」」

となのはと恭也は驚き、孝平はそれが誰の脳髓が分かつたので

「あゝなるほど・・・そういうことか。」

と言う。彼は大体呑み込めたようだ。その内容は、脳髓3つが聖王のゆりかごに搭載されている機械（なのは殺しの実行機）の性能テストと、管理外世界出身であるなのはを暗殺しようと言つ話をしていたのだ。それを見た恭也と孝平は、無表情のまま怒り、なのはも「そんな理由で私は殺されたの？許さない！！」

と怒りを露にした。何故、こんなにも反応したかと言うと、先程の孝平と恭也がその事について話していた時は、泣くので精一杯で聞こえていなかったからだ。そして、改めてなのはにどうするかと聞く

「私もやる。じゃないとはやてちゃん達にも危険が迫るかもしれない。」

と決意を固めた。しかし、そこで孝平があることに気が付いた。それは

「なあ？協力の件は良いんだけどさ。何時からなんだ？恭也さんは

兎も角、俺達はまだ赤ん坊だぞ？それに戦う力も無いしな。」
と言う。すると

「ああ、その事も考えてあるよ。はいっ!!!」

と言うと、孝平となのはの体が光りだした。そして、その光はどんどん大きくなつていき、恭也と同じ9歳か10歳位の姿になった。

そして、聖王なのはは、孝平となのはにそれぞれに虹色のカードと虹色の宝石と赤い指輪と蒼い指輪を渡す。2人は直ぐにこれがデバイスであるとわかった。何せ、方やアニメで見て、方やそのアニメで使用していたのだ。只の宝石だと思っわけが無い。そして更に、孝平となのはを他所にこの四つのデバイスについての説明し、序に魔力量についても説明した。

その説明が終わると、聖王なのはは恭也に

「今から行くから此方側の兄さんはデバイスを持ってきて。」

と言う。その言葉に恭也は

「分かった。」

と言い、一旦御神・不破本家に戻っていった。その間に、聖王なのはは恭也の死因を話し始める。その内容は、とらは原作の美沙斗によるクリステラ襲撃事件の時にテロリストが投げた爆弾で死んだとの事だった。それから数分後、恭也が戻ると、聖王なのはは更に「馴れてない魔法だけじゃきついだろうから、これも渡すね。」

と言って、カードの形をした待機状態のデバイスを渡した。そのデバイス不思議そうに見つめて

「これは？」

と言う恭也に

「これはアームドデバイスと言って、貴方の武器である小太刀になるんだよ。」

と説明した。すると恭也は直ぐに

「なるほど。起動方法は一緒なのか？」

と言った。どうやら大体の事は教えられているようだ。その言葉に「勿論だよ。殆どのデバイスはそう出来てるよ。因みに名前は黒覇

と白霸ね。」

と言う聖王なのは。そして、恭也が

「そうか。では行くぞ!!!黒覇、白覇、シュロウガ、影の書、セツトアップ!!!」

と叫ぶと、恭也は黒い光に包まれた。そして、それが直ぐに割れ、そこから出て来たのは先ほどまでの姿ではなく、黒い鎧を装着し、両手には二刀の小太刀型デバイスである黒覇と白覇が握られ、宙には黒い魔導書が浮いていた。更に恭也は

「そして・・・出て来い!!!アサキム!!!」

と叫ぶと、影の魔道書から世にも珍しい男性型のユニゾンデバイスが現れた。このユニゾンデバイスこそが、この影の書の管制人格であるアサキムである。そして、そのアサキムが

「ようやく出番か。」

と青年時の恭也の様な声で言った。それに対し

「悪かったな。でも今までお前を呼び出す必要がなかったからな。でも、これから出番だ。」

と恭也は謝りながらそう言った。それに納得したのか

「まあ、良いだろう。」

と許すアサキム。そして、遂に0歳児コンビの番となった。

「俺達も行くぞ!!!なのは!!!」

と孝平が言つと不破なのはが

「うん!!!」

と頷くと

「セイクリッドアイゼンと聖王の書!!!」

「ヴァイスアイゼンと魔王の書!!!」

と言いながら天に向けて高々と自分の待機状態のデバイスを掲げると
「セツトアップ!!!」

叫んだ。その瞬間、2人は虹色と桜色の光に包まれ、その光は柱となり、やがて球体となった。

第2話「並行世界へ〜前編〜」（後書き）

かなりグダグダ&駄文ですみませんorz

次は、孝平と不破なのはの覚醒です。それと、戦力となる仲間も登場します。

第3話「並行世界への中編」

光の球体に包まれた0歳児コンビだったが、直ぐに光の球体が割れるように消えていった。そして、その光から現れた二人の姿は、先程と違い、2人同じ色をした鎧を装着し、利き手にはそれぞれ色の異なる魔導書を持っていた。

場所：結界内の支倉家

視点：孝平

俺となのはは鎧型デバイスである事は前もって説明されていたし、恭也さんのシコロウガを見ているからそんなには驚かなかった。だけど、俺はある事に驚いた。

「すげー、なんか知らないけど馴染む。それにこのデバイスの使い方が解ったし、戦い方もわかる。しかも、御神流まで解る。どういうことだ？」

そう。俺は戦闘のセや魔法のマも知らないド素人だ。だから、使い方や戦い方が頭に入るわけが無いのだ。それはなのはも同じようである。「うん。ねえ、別世界の私、どういう事？」

と俺の言葉に頷いてから聖王なのはに説明を求めた。ただし、なのはの場合は接近戦に対する知識が入った事に驚いたのであるが・・・。すると聖王なのはは

「それはね。そのデバイスの初期起動時に、主の頭の中にデバイスの情報や戦闘方法が入るように設定してあるからなんだよ。しかも、その記憶は3人にあげた能力、完全記憶能力と高速学習によって忘れないようになってるし、直ぐに使用可能になっているの。あつ！因みに、御神流もあげた能力の1つで、その他にもそれぞれ違う能力が幾つかあるから、説明するね。」

と言う。それに対し、俺とこの世界のなのはは

「うん。」「わかった。」

と頷く。そして

「でも、恭也さんの能力は教えなくて良いのか？」
と言う俺に

「ああ、それなら前もって教えてもらった。因みに俺が貰ったのは、先程の2つと身体能力大幅強化とS感強化とSS級の魔力だった。俺には元々、魔力がなかったからな。それに俺は元々御神流の使い手だしな。」

と恭也さんが答えてくれた。

「そうなんですか。じゃあ、俺となのははなんだろう？」

そして、そんな事を言う俺に

「孝平の力は、御神流と時空操作とサイコドライバー能力と力（神力、気、霊力と言ったもので、いずれもEXクラス）だよ。それと特別に貴方を神にして、信仰の分だけ能力が上がる能力をあげたよ。嫌なら今すぐ言ってね。直ぐに戻すから。この世界の私には、御神流とサイコドライバー能力と肉体強化とS感強化と竜召喚だよ。帰ったら、卵をあげるからちゃんと育ててね。」

と俺となのはの能力を教えてくださいました。なのはは

「わかった。有り難う。」

とお礼を言い、俺はその時に聞き捨てなら無い言葉を聞いたので

「へー、俺って神になったのか。勝手に神にされた事には腹が立つけど、神になって変わる事はなんだ？」

と少し怒った口調で言う。すると

「そうだね。まず寿命が2000年まであつて、大体の病気には罹らないし、傷の治りも早いね。運動能力や神経、それに魔力等の異能の力がかなり上がるね。だから、今の孝平は、能力的にはかなり強いよ。ただ、戦闘については素人同然だから、この2人に頼んでみると良いよ。」

と説明された。それに対し

「解った。これで説明は最後か？」

と聞く俺に

「うん、最後の1つをまだ言っていない。」

と答える。それにまた

「最後の1つ？それは何だ？」

と質問をする俺。すると更に

「それはね。自分が神にしたいと思った人間を自分より下位の神にする事が出来るんだよ。相手の頭に触れて神力を流し込む事だね。まあ、ある意味眷属化みたいなものだね。ただ、吸血鬼と違って、普通の人間同様に子供を作れるよ。」

と説明を受けた。それに俺は反応し

「えっ！？そんな事が出来るのか？というより、色々の違いはあるが、殆ど球津島の吸血鬼みたいだな。」

と言う。すると

「そうだね。それと、自分が生死を共にしたいと思った人に同意を得た上でやるのが良いね。ただし、このまま神として生きることを決めただけだね。」

と認めて、それが嫌なら人間に戻すと言った。俺のその答えは

「わかった。そのままにする。それと、今まで不思議に思ってたんだけど。」

と言う人間を捨てて、神になる事を選んだ。理由は幾つかあるが、それはまだ秘密である。俺のその答えに

「うん。」

と頷く。それと俺がこの世界に転生してから不思議に思っていたことを聞く。

「そういえば此処って何処だ？海鳴市みたいなんだけど少し違って、いるような気がするんだけど。それと、今年で、最近では何が起きたんだ？」

と聞く俺に、なのはも

「あっ！！それは私も思った。」

と俺の質問に便乗した。すると

「そうだね。とりあえず最近の出来事は、スフィア王国のセフィリ

ア女王が亡くなった事だね。」

と言う言葉が返ってきた。因みに恭也さんは既に、自分が居た世界と違う世界だと割り切っているようで、無言だった。

「「えっ!!」」

その言葉に俺となのはは驚く。因みに、なのはは聞きなれない名前に対しての驚きで、俺にとってはゲームのキャラだからだ。そしてそこへある事気づく。それは、海鳴市以外にも変わっていて、案外他作品からの登場もあるかもしれないと気づいたが、取りあえずはセフィリア女王のことについて聞くのが先決だと思い

「ちよつと待て!!セフィリア女王って確か夜明けなのキャラだよな?なんでそんな人が出て来るんだよ?それにスフィア王国って月のだよな?なんで、この世界にあるんだよ?此処はFAの世界じゃないのかよ!!」

と聞いた。その言葉に

「「??」」

となのはと恭也さんは疑問符を浮かべていた。しかし、そんな二人を無視して

「ああ、そういえば言ってなかったね。この世界を君の知っている世界と一緒にしないほうが良いよ。何せ、いろんな世界が混ざり合ってるような世界だからね。FAの世界の筈なのに、この世界にこの2人と海鳴市を見て可笑しいと思わなかった?それと、この次元の管理局は、この地球と月を管理しようと企んでるよ。」

と言う聖王なのは。ってちよつと待て!!今聞き捨てなら無いこと聞いたぞ!!そのことに対し俺は

「それは思っただけど。ってそれより管理局が狙ってるって本当か?と聞く。すると「うん」と頷いて

「この様子だと、潰す気満々だね?」

と呆れるように聞いてきた。その問いに

「当たり前だ!!あんな腐った組織に俺達の地球やスフィア王国がある月を踏み荒らさせるわけにはいかないからな!!」

と怒鳴りながら答え、その時に話がかかなり脱線していることに気づき
「っていつか話がかかなり脱線してるな。そろそろ話を戻さないとな。」

と進言する。すると

「そうね。それじゃあ脱線から元に戻して、という前に紹介しとき
たい子達がいるの。」

と言ってくる。それになのはと恭也さんは

「「???」」

と疑問符を浮かべ、俺は

「誰だ？」

と聞く。するとなのはの横にスキマが現れ、3人のメイドが現れた。
それを見た瞬間、八雲紫でも従えてんのか?と思ってしまう。そ
の事を後で聞いたら、実際にその通りだった。そして、先程のスキ
マは聖王なのはが紫の能力をコピーして使用している事もその時に
解った。さて、その事は後回しにして

「「「!!!」」」

と驚く俺達。その間になのはと3人は話を進めていて

「これからは彼らが君達の主だから、ちゃんと守ってあげてね?」

「「「はい、母様。」」」

と会話していた。そして、俺が3人の事を

「え」と、この3人は誰だ?」

と聞いた。すると

「そうだね。じゃあ、3機共、挨拶して。」

と言った。俺はその時3機?人じゃないのか?それともこの3人は
自動人形?と黙っていた。

「「「はい。」」」

と元気良いく答える自動人形?達にこの世界のなのはが

「人じゃないんですか?」

と聞いたら。聖王なのはが肯定して、なのはを驚かせた。そして

「では、私から自己紹介させていただきます。始めまして、聖王支

倉孝平様に仕えることになりました魔導式自動人形のセラフイムです。どうぞよろしくお願い致します。ご主人様。」

と俺に向かって言ってきた。それに対し

「ご、ご主人様！？それにもう俺って聖王か？」

と聞く俺に

「はい。この次元で聖王の証を持つお方はご主人様だけですから。

それと、私がご主人様と言うのは、私が貴方様に仕えるメイドだからですので、以後そのように接してください。」

と、セラフイムに説明された。それを一応納得し

「そ、そうか。そういうことならわかった。よろしく頼む。」

と言う俺に

「はい、ご主人様。」

と頷いて返事をした。そして、次の自動人形の自己紹介の番となった。

「じゃあ、次は私ね。始めまして、私は、セラフイム姉さま同様の魔導式自動人形のリリース。不破なのは様に仕える事になったわ。ということでもよろしくね。別世界の母様にしてご主人様。」

と言うリリースに

「は、はい。よろしくお願いします。」

と返事をするのは。かなり固まっていた。それを見たリリースは

「そう固まらなくても良いわ。私は貴方の従者なんだから。もしそれが無理なら、友達に話すような口調で良いわ。」

と言い、なのはにアドバイスをする。すると

「……うん！！わかった。」

となのはがフェイト達に対して使っている様な口調で返事をした。

それに対し

「ふふふ、その調子よ。」

と褒めるリリースであったが、次の自動人形の番となった。

「じゃあ、最後は私ですね。始めまして恭也様。それに影の書の管制人格のアサキム殿。私はオファニスと申します。よろしくお願い

いたします。」

と上の姉同様に上品に挨拶するに恭也とアサキムは

「ああ。よろしく。」

と返事をした。こうして、3機の自己紹介が終わり、話を並行世界やデバイスの話に戻したのであった。

視点終了

おまけ

魔導式自動人形設定

聖王なのはが3人の転生者の為に作った機体で、自分が所有している4機よりも魔力量は下であるが、それ以外の性能は同等である。

セラフィム

魔力：SS+

デバイス：エクスカリバー

普段はメイド服を着ていて、戦闘形態ではデジモンのセラフィモンの姿をとる。性格は真面目で冷静沈着。自動人形1号機でもある為、実質的の長女にしてリーダー。武装として西洋剣型デバイスのエクスカリバーを持っている。人間の18歳位のサイズで、容姿は金髪の美少女。

リリス

魔力：SS

デバイス：ナザルネイル

普段はメイド服を着ている。性格は人をからかって楽しんだり、主には敬語を使わないなど、他の姉妹とはかなり性格が違っている。これは、なのはを主として認めていないと言う事ではなく、元からそういう性格である。

戦闘形態は見た目がデジモンのリリスモンである。右腕にある敵を腐食させる爪もデバイスとして組み込まれている。

自動人形2号機でもある為、実質的の次女。人間の18歳位のサイズで、容姿は黒髪の美少女。

オファニス

魔力：SS

デバイス：ツイン・オクスタランチャー改

普段はメイド服を着ていて、戦闘形態ではデジモンのオファニモンの姿をとる。性格は上の姉同様に真面目で冷静沈着。

3機の中で有一、中長距離用のデバイスを持っている。

自動人形の3号機である為、実質的の三女。人間の18歳位のサイズで、容姿は茶髪の美少女。

第3話「並行世界へ」中編」（後書き）

相変わらずなグダグダで駄文です。さて、気を取り直して、次回は
いよいよ並行世界へと行きます。

第4話「並行世界へ〜後編〜」

視点：孝平

「そういえば、俺となのはのデバイスが似てるんだが、どういうことだ？ 案外、同型機をそれぞれの特性に合わせて改造したとか？」
と俺は起動させてから思った事を聞いた。すると

「うーん、半分正解かな。確かに孝平の聖王の力を最大限に生かせる様に改造はしたよ。だけど、この世界の私には改造は施して無いよ。元々こういうデバイスだし、完成度がかなり高いからね。」
と言う答えがきた。そこへなのはが

「そうなんだ。そういえば、聖王って何？ なんか王様っぽいんだけど。」

と聞いてきた。ああ、そういえばもつと後に聖王とかを知るんだっ
たな。そこに恭也さんも

「そういえば、そうだな。」

と便乗してきた。その問いに

「「その通りだ（よ）。」「」

と俺と聖王なのはハモリながら答えた。そして

「古代ベルカは知ってるよね？」

と聖王なのはがなのはに聞いた。それに

「うん。はやてちゃんの夜天の書とかヴォルケンリッターの生まれ
た場所でしょう？」

彼女の問いに答えてから自分の聞きたい事を聞いた。その問いに
「そう。そして、その古代ベルカの国は、ある人物によって造られ
た。その人物が、初代聖王だよ。」

と肯定し、更にベルカを建国したのが聖王だと告げる。それに

「ふええええ！ じゃあ、孝平君も別世界の私も王様って事？」

と驚いてからそう聞いてきた。それには俺が

「そういうことだ。俺は先祖が聖王家の血を引いていてな。その中

で聖王家の血筋を一番色濃く受け継いだのが俺という訳だ。因みに、ベルカの国はもう既に滅んでいるからもう聖王ではないんだがな。」と答えて自分の出生を教える。それに続き

「私もそうだね。とはいっても私の場合は子孫だけではなく聖王オリヴィエと言う人の生まれ変わりでもあるよ。」

と聖王なのも答える。そして、俺は今出てきた名前に驚きを隠せなかった。

「何！！オリヴィエだと！！」
と驚く俺に

「え、何か知ってるの？」

とこの世界のなののが聞いてくる。それに対し俺が

「ああ、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。歴代の聖王の中でも最強と名高い人物だ。」

とオリヴィエの事を説明する。それに

「ええっ、ええええええええ！！」

と驚くなのは。だけど聖王なのはそれを無視して

「それと、鎧型はかなり癖があるからデバイスの性能には引っ張られないように気をつけてね。」

と注意する。それに

「……わかった。」

と先程まで驚いていたなのもその注意に頷いて答えた。そして、ようやく並行世界の話にようやく入れると思っていると

「じゃあ、次は並行世界についてだね。」

と聖王なののが言う。そして

「まずは、兄さんや孝平はその世界の私の前世の家族を殴ろうとしてるけど、向こうの家族には必要ないと思うよ？」

と言って来た。それに対し

「どうしてだ？」

と聞いている恭也さんに対し、俺は少し考えてから

「……あ、わかった。向こうではちゃんと自分達も原因だと

気づいたからその必要が無いと言いたいんだな？」

とその理由について自分なりの仮説を語つ。すると

「そういう事。しかも、それだけじゃないよ。なんと、向こう側の兄さん、姉さん、父さん、アリサ、さすが黒帝に参加してるんだよ。」

私のはやて達同様に説明したし、君達が来る事も伝えているからね。それと、プレシアやアリシアって覚えてる？」

と肯定し、原作キャラが黒帝に参加している事を話し、更には原作の無印で消えた二人の事を覚えているかとなのはに聞いた。

「うん。フェイトちゃんのお母さんとフェイトちゃんのオリジナルでお姉さんでしょ？でも、あの2人って虚数空間に消えたはずだよ。」

と肯定してから、その末路を言った。それに

「うん。確かにね。でも、2人は私が復活させて協力してもらつてるよ。」

と肯定して、その2人は自分が復活させたと言う聖王なのは。そこに恭也さんが

「2人で、説明やら話している所悪いんだが。」

と話しかけてきた。それに

「「どうしたの？兄さん（お兄ちゃん）？」」

とダブルなのはがハモリながら聞く。すると

「幾つか聞きなれない人物名やら単語が聞こえて来るんだが、どういふことか俺にも説明してくれ。」

と言った。それに対し俺が

「じゃあ、俺から話しますよ。」

と言い、俺は原作で知っている情報を教えた。その時に月村忍さんのことも話したら、恭也さんが

「そうか。それにあいつと、か……。其方側ではそうなんだな。」

と落ち込んでいた。転生前に何かあったんだろうか？と思いつつも

「さて、必要な情報はこれで全部か？」

と言う。その質問に聖王なのはが

「うん。じゃあ(ピピピピピ)・・・ん？通信だ。しかも今から行こうとしている世界からだ。」

答えようとすると通信音が入ってきた。しかも、これから行く世界から来た。と言う事は何かまずい事が起きたのか？と思っっていると「聖王なのはちゃん！！大変や！！」

とはやての声が聞こえてきた。しかも、結構切羽詰ってる口調だな。もしかして正体がばれたのか？と思っっていると

「どうしたの？・・・もしかして管理局に正体がばれたとか？」と聖王なのはが俺が思っていた事と同じ事を言った。すると

「そのもしかしてや！！今、地球で戦ってて、恭也さんや士郎さん、それに家の子たちが対応してるけど数が多いんや。」

正解だったらしく、今はその対応に向こう側の士郎さんと恭也さんも戦闘に参加している事らしい事がはやての言葉でわかった。俺はどうやって戦ってるんだ？と思いなながらも、行けばわかるだろうと思いつ返し、話を聞くことにした。

「はあ、仕方ないね。今ちようどそつちに増援と一緒に行くことしてた所だよ。因みにどの位の数？」

と俺達が行く事を伝えてから、敵の数を聞いた。すると

「2千900人位や。それに次元航行船が25隻も確認されとる。」

一応、その内の500人近くと6隻を落としたんやけど、如何せん戦力が足りないんや。力を貸してや！！」

と聖王なのはの質問に答えてから救援要請をしてきた。そして、はやての魂の叫びに聖王なのはは

「わかった。本当なら増援だけ送って、その増援にやらせるつもりだったけど仕方ない。私も戦闘に参加する。」

と言う。それに

「ほんまか！！おおきにな！！」

と先程の絶望的な表情とは違い、それなりに明るくなった。そして、

聖王なのはは

「その代わり、10分程持ち堪えてって伝えて。」
と言う。それに

「わかった。伝えとく。」

と言うとはやては通信を閉じた。そして

「さて、皆。話は聞いたね？」

と聖王なのはが俺たちに向けてそう言っ来て来た。聞いてたに決まってるだろう？と思いつつも

「ああ。」

と恭也さんと八モリながら答えた。それに

「うん!!!」

なのはも遅れながらに返事をして、更には

「はい!!!」

と俺たちの従者も答えた。そして聖王なのはは

「じゃあ行くよ。と言いたい所なんだけど、船も持っていくから、少し時間がかかるから孝平とこの世界の私とこの世界の兄さんに頼みたい事があるの。」

と言った。それに俺と恭也さんは

「なんだ？」

とやはり八モリながら聞いた。なのはも

「何？」

と聞いている。すると

「うん。今からそれぞれが担当する船への座標を送るから、それぞれの母艦となる戦艦に向かって。」

と言うある意味とんでもない話が舞い込んできた。俺は意味が意味がわからなかったのだ

「どっついうことだ？」

と聞く。すると

「それはね。本来ならデバイス同様に大きくなったらあげる予定だったんだけど。緊急事態だからあげるよ。」

と言う事らしい。おいおい、船一隻を3人にそう簡単に渡すなよと思っていると、恭也さんが

「で、その船でその戦いに参加しろと？」

と聞いた。その質問に

「そういう事。そして、初起動にはそれぞれの指紋やら声紋を取らないといけないんだ。だかた船に入ったら、自動人形の指示道理に動いてね。」

肯定してからめんどくさい話が出てきた。おいおい、そんなセキユリテイの厳しい船ならそう簡単に渡すなよと思いつつも

「わかった。で、その船にはどうやって行けば良い？」

と俺が聞いた。すると

「それぞれの魔導書に、念じれば良いよ。自分の船に行きたいってね。そうすれば今送ったばかりの座標まで跳べるから。それと、自動人形達は、主である君たちと一緒に行動を共にするから、一緒に連れて行ってね。」

と言って来た。って何時の間送ってたんだ？と思いつつも

「っっわかった。」

と3人同時に答えた。そして、俺達はそれぞれの戦艦の内部に転移するのであった。

それぞれ戦艦に到着すると、初起動の俺達は、自分の所有する自動人形にして、メイドであるセラフィムから指示を受けて戦艦を起動させた。そして、この戦艦に搭載されているAIが起動した。しかも、ただのAIではなく、上位のインテリジェントデバイスや某勇者ロボシリーズに登場するような超高性能なAIらしい。そして

「この船には名前はあるのか？」

と俺はその船に搭載してある超高性能AIに聞いた。すると

「ありません。マスターがお付けになつてください。」

俺に名前を付けると言うてきた。仕方ないから俺は名前をつける事を決め

「じゃあ、俺はこの船に名前をつける。」

と言った。すると

「なんて付けますか？」

セラフィムが聞いてきた。それに

「そうだな・・・」

と少し悩んでから名前を決定し

「よしっ、決めた!!」

と言い

「行くぞ!!カイゼリオン!!」

と俺は出航の合図と共に名前を叫んだ。

因みに、なのはや恭也さんの所でも似たようなやり取りがあり、それぞれが

「行くよ!!エクセリオン!!」

「行くぞ!!黒星!!」

と名前をつけて次元の海へと旅立っていった。そして、直ぐに聖王なのはの乗る戦艦に合流して、俺達は、この世界のなのはの前世の時の仲間が待つ次元まで跳んで行った。

視点終了

戦艦設定

カイゼリオン、エクセリオン、黒星（こくせいと読む）

第2世代巨大艦級

3隻は共に同型艦で、見た目はガンバスターに登場するエクセリオン級で、大きさは一回り小さい。

中身は、大型の機動兵器も入れる様に大きな格納庫がある。それに、転送ポートや超高性能なAIやデバイスルーム（デバイスの製作や強化やメンテナンスとかを行う部屋）等といった原作艦には存在し

ない設備があり、他にも娯楽室やら一流ホテル並みの寝室や個室、調理室&高級レストラン並みの食堂等があったりする。尚、原艦と同じの武装にデュアル・アルカンシエルやデュアル・グラビティブラストを追加して火力を強化し、防御力も自らのデュアル・アルカンシエルを受けてもびくともしない防御フィールドと装甲を持つ。そして、カイゼリオンとエクセリオンにはマイクロウェーブ送電システムがある。(ガンダムXやDXがサテライトキャノンを使用する時のあれ。)色は、カイゼリオンとエクセリオンが白と青で、黒星は名前通り黒一色である。

究極戦艦グラギオン

聖王なのはの戦艦。ワンオフ戦艦であり、大きさは戦艦と言うよりは要塞と言うのに相応しく、エクセリオン級を3隻まで入れられる程の巨大である。しかし、その巨体の割りにエクセリオン級等よりも数段高速に動ける。武装として、第2世代巨大艦級に搭載されている武装と惑星を軽々と破壊できるアルティメットキャノンを装備。防御面でも最強のアルティメットキャノンすらと押さないシールド(若しくはフィールド)を持っている。見た目はかなり大型化したエクセリオン級に色々付け足した感じのもので、色はカイゼリオンやエクセリオン同様に白と青である。

因みに、第一世代巨大艦級は聖王のゆりかご等の事を指します。

第4話「並行世界へ〜後編〜」（後書き）

次回ははやて達に合流して2人で無双します。因みに、本当はサウ
ンドステージの時にリンデイも嫌いなのですが、比較的まともな管
理局員と言う事で仲間になりました。それと、最大の難問としてジエ
イルのアジト探索ではあるんですが、それは聖王なのによって解
決します。何せ、自分が生まれた世界ではそこが自分達の拠点なん
ですからね。それと、聖王のゆりかごは、孝平の船であるカイゼリ
オンに吸収されて孝平の船は更なる力を手に入れます。

第5話「戦闘、そして再開」

それぞれの次元航行戦艦に乗り込んで並行世界に向かった2柱と2人と4機であったが、2分後にその目的地である並行世界の地球へと到着した。そして、担当する場所を決めた。宇宙の次元航行戦艦は、先に戦っていた黒帝のリンディ提督、クロノ執務官、グレアム元提督、レティ提督と共に聖王なのはと恭也が担当する事になり、地球では前世がこの世界出身であった不破なのはと孝平が担当になった。

場所：海鳴市付近の海上

視点：はやて

聖王の証を持ったなのはちゃんに連絡を送って6分が経った。その間にも、数の多さに圧倒されていた。今は何とか持ち堪えてはいるけど、何時それが崩れるか判らない状態だった。なので、私は早く増援が来て欲しいと願った。そして、その増援は私がそう願って1分後に現れた。しかも、その増援の一人に亡くなった親友の転生体があった事で、私はこれが神の奇跡だと思わずには居られなかった。

視点終了

場所：次元航行戦艦エクセリオンブリッジ

視点：なのは

私がこの世界の宇宙空間に到着した。そして私達はそれぞれの決められた地域とはいっても宇宙で次元航行船を相手にするか、地球で2千人強の魔導師を相手にするかと言うものだったけど。私は、早く前世での家族や友達と会いたいと思う気持ちで地球で魔導師と戦う事を選んだ。それは同時にエクセリオンとリリースがついて来る事も決定した。正直、人を殺すのは初めてで、怖いけど、私を自分勝手な理由で殺した事と、今も家族や友達の生を脅かしているのなら容赦はしない。それと、どうしてリリースを呼び捨てにするのか気に

なる人が出てきたと思いますけど、それは本人がそう言ってきたからに過ぎません。そして、地球に下りて直ぐにはやてちゃん達と管理局が戦っている空域にもうそろそろ入ろうとした時

「マスター、戦闘空域付近に到着しました。如何致しましょうか。」
とエクセリオンのAIが私に指示を仰いできた。それに対し

「じゃあ、私とリリスは出るからエクセリオンは此処で待機して、もし敵が来たら迎撃して!!」

と指示を出す。それに

「了解。」

と指示を受け入れた後に

「それと、マスターと同じ内容の事をカイゼリオンからの通信で受信しましたが、返事は如何致しましょうか？」

と言う報告が来た。どうやら、私よりも孝平君の方が判断力が良いのかな?と思いつつも

「なら、了解。私とリリスも出るって伝えて!!じゃあ、リリス。行くよっ!!」

と返信するようにAIに言い、そしてリリスに付いて来る様に言う。「分かったわ。」

と返事が来た。こうして私達はブリッジを出て、走り出した。そして、私はヴァイスアイゼンと魔王の書を起動させてからエクセリオンをリリスと一緒に飛び出した。

視点終了

その1分後、孝平&セラフイムコンビとなのは&リリスが合流して直ぐに戦闘空域に入った。

孝平となのはは戦闘空域に入ると持っていた魔導書をそれぞれあるページで開き、魔法を発動させた。

「「遍在!!」」

そう。この魔法”風の遍在”はハルケギニアのスクエアスペルである。孝平は8人になり、なのはは4人になると、直ぐにそれぞれ魔

導書を待機状態にして、それぞれ武器を両手に持ち、本体はセラフイムとリリスを連れて高速で仲間の下へ向かっていった。そして、遍在達も本体とは違う場所に向かっていった。

場所：海鳴市付近の海上

視点：この世界の恭也

俺達が地球で、管理局と戦い始めて9分が経過した。その間に、押されていく俺達。それは、他の空域を担当している者達も一緒だった。しかし、それはある2人の活躍で覆る事となった。一方は、1年前に死んだ末妹のなのはと瓜二つだった。しかも、もう一人は男で、仲が良さそうだった為、複雑な気持ちだった。さて、そこでどうやって2人だけで戦況を覆ったのか語らねばなるまい。2人は両手に持っていた2挺の大きくて変わった銃で、高速に動きながら光線（殺傷設定の魔力砲撃）を連射していった。その速度や砲撃の量のせいでそれは最早弾幕と化していた。その弾幕の数は異常で、敵は殆ど避け切れずに全滅していった。後から聞いた話だと、他の空域でも同様だったとの事だった。その戦闘後、俺はその2人から話を聞いた。此方側を援護しに来たこの2人は魔法で作り出した分身体であり、本体は別の所に援護していた事、更にはなのはに似た子供は自分の妹の生まれ変わりで、並行世界の自分の妹だと言う事をその分身体から教えてもらった。そして、その話が終わった途端、風のように2人は消えてしまった。

視点終了

本体の孝平となのはが遍在を解除してから、黒帝メンバーが全員がはやくと本体の2人の所に集まり、感動の再開で騒ぎ始めた。しかし、そこへ聖王なのはのグラギオンが、宇宙に居た敵艦を全て沈めた様で、黒星やアークエンジェル、ミネルバ、プトレマイオス1&2と共に地球に降下してきた。そして

「再開で感動している所悪いんだけど、直ぐにこっちに来て。管理

局が少し変な動きを見せているらしいの。」
と言い、騒いでいた全員を引き締めさせる。その後、直ぐに黒帝メンバーと並行世界組は直ぐにグラギオンに着艦する。そして、直ぐに対管理局合同会議を行う事となった。

おまけ

反管理局組織”黒帝”のデータ

ガンダムシリーズや魔装機やガンダムシリーズに登場する戦艦で構成される組織であるが、どの機体も8m級と原作機より小さい。しかし、性能は全てSS級で、総帥機だけSSS級である。総帥は八神はやてで、全ての機体を与えたのは聖王なのは。因みに、デバイスではなく機体なのは、素性や正体がばれない為だけではなく、魔法の使えない人でも扱える。その為、操縦方法だけを覚えれば、ほぼ誰でも乗れる。ただし、魔力兵器も搭載している機体も存在する為、その機体は直ぐにレーダーに引つかかるのが難点であるのと、機体によっては、懐に入り込まれると対処し辛い事が判明している。また、デバイス同様にセットアップの音声入力で待機状態から機体になる事が出来る。

機体・パイロットデータ

ラファエルガンダム

はやて専用機で、原作機とは少し性能や武装が異なる。

八神はやて

聖王なのはにより、なのはの死の真相と管理局の裏を知る。その事で黒帝を組織して、仲間を集めた。

此処からは、サイズや動力以外は機体性能や武装が原作機とほぼ同じもの。GN粒子関係はGNではなく普通のミサイルやビーム兵器や魔力兵器である。

ヴォルケンリッター

主の頼みとなのはの死について思う所があつた為、参加。特になのはが死ぬ時に一緒に居たヴィータは、そのことを自分のせいだと思つて
いる。

ガルガード

シグナム

ガオガイガー（ゴルディオオンハンマー付き）

ヴィータ

ノルス・レイ1号機

シャマル

ゴッドガンダム

ザフィーラ

ノルス・レイ2号機

ユーノ

聖王なのはによる説得となのはを魔法側に引き込んでしまった責任を感じて黒帝に参加。

フェアリオング

フェイト

聖王なのはによって、親友だったなのはの死の真相を知って黒帝に参加。

フェアリオンス

アリシア

母親のプレシアと共に虚数空間で漂っている所を、聖王なのはに見つかりそのまま蘇生術で復活した。その後、自らと妹の親友の死が管理

局が原因である事を知り、黒帝に参加。

シャイニングガンダム

アルフ

主の親友を奪った管理局が許せない為、黒帝に参加。

ディアブロ（パイロットの名前つながりではあるが声優ネタではない。）

プレシア

アリシア同様に聖王なのはに虚数空間に漂っていた所を見つげられて、生きていたものの病気の状態が悪く、時間操作で治した。尚、フェ

イトとは和解している。聖王なのはに恩を返す為と、アリシアをある意味殺した管理局に復讐する為に参加。

アークエンジェル
リンディ・ハラオウン

なのは管理局に引き込んだ事に責任を感じていた事と、聖王なのはの説得により黒帝に参加。フェイトをプレシアに返した。

ミネルバ

レティ・ロウラン

管理局の体制を変える為、黒帝に参加。

ブトレマイオス2

クロノ・ハラオウン

今の管理局の体制を見直すために黒帝に参加。

ブトレマイオス1（ただし、武装は多少強化されている。）
ギル・グレアム

聖王なのはの説得と今までの償いの1つとして黒帝に参加。

0ガンダム1号機と2号機

リーゼ姉妹

主のグレアムに付き添う形で黒帝に参加。

シュロウガ1号機

高町士郎

聖王なのはの言葉により、なのはの死の原因の1つが自分達にあると気づき、その罪滅ぼしの1つとして参加。尚、昔負った古傷は聖王な

のはの力により回復している。

シュロウガ2号機

高町恭也

理由は父同様。

シユロウガ3号機

高町美由希

理由は父同様。

以上が反管理局組織”黒帝”のメンバーである。
尚、パイロットの力や能力は原作同様。

第5話「戦闘、そして再開」(後書き)

相変わらずのグダグダですし駄文です。次回は会議か、本局と地上本部制圧のどちらかです。もし、後者だったらジエイルの始末もするかもしれません。

第6話「並行世界の管理局崩壊、そして帰界」(前書き)

サブを少し変えました。とはいっても”並行世界の”を増やしただけですが。

第6話「並行世界の管理局崩壊、そして帰界」

会議では先ず、管理局に起きた異変の話が行われた。異変の内容は、所々の管理世界に不穏な気配があるとの事であった。その不穏な気配がある世界はの殆どは、管理局の武力によっていやいや平定された世界だと言う事がリンディ達の証言で得られた。恐らく、黒帝が管理局を壊滅的とは言わないが、かなりの被害を受けている事によって、今なら管理局を潰せるだろうという魂胆だろうと判断し、黒帝も動く事が決定した。先ず、本局には孝平&セラフイム、恭也&オファニス&アサキム、なのは&リリス、ハラオウン親子、レテイだけで行き、地上本部には聖王なのは、テッサロツサ親子、グレアム&リーゼ姉妹、高町家、八神家いったメンバーで行く事となった。何故、本局よりも地上本部の方が多いのかと言うと、まず空間操作で孝平のカイゼリオンを本局に無人で行かせて陽動する。その間に孝平&セラフイム、恭也&オファニス&アサキム、なのは&リリスが本局に潜入して内部を制圧するという作戦で、もし逃げられたとしても、そこにはハラオウン親子、無人のエクセリオン、無人の黒星、レテイが待ち構えているという作戦を立てているからだ。しかし、地上本部はそうは行かない。何せ、惑星にあるので無関係な人が居る事、その他にも強力なバリアがあったり、ジェイル・スカリエッティと言う違法化学者がいるからだ。その為、聖王なのはがスキマ能力を使用して地上本部の内部に潜入してバリアの動力炉を破壊。その後、スキマで待機していたグレアム&リーゼ姉妹が潜入し、聖王なのはと共に内部を制圧。残りのメンバーは予め会議の時に教えておいたスカリエッティのアジトとマリナーガーデンの海底遺跡のある場所に向かわせてそれぞれの任務を果たすと言うものだった。因みに、スカリエッティ一家に行って一家を殺す任務に就いたのはテッサロツサ家と恭也と美由希で、海底遺跡に向かつて、冥府の炎王を助ける任務に就いたのは、士郎一人だけであった。

結果だけ言わせて貰おう。

殆ど会議通りで、本人達は土郎以外はかなり欲求不満だった。勿論、最高評議会やその秘書であり、スカリエッツィのスパイだったドゥー工、そしてスカリエッツィ一家は全員殺害した。そして、作戦が成功した後に管理世界中に管理局の悪行や不正行為を全てばらしてから、ミッドを始めとした管理世界に新しい組織の設立を呼びかけた。その結果、管理局は解体され、その代わり時空警察、時空裁判所、時空連合軍（管理世界で組織された連合の軍隊）と言う風に姿を変えた。因みにレジラスと言った比較的まともな管理局員はそれぞれの組織に編入される事となり、不正などを行っていた元局員には処刑、若しくはかなり重い罪となった。海底遺跡から救い出された冥府の炎王”イクスベリア”は聖王なのはの力により普通の人間に戻り、高町家の養女となり、名前を高町・G・イクスベリア（通称イクス）と改名し、高町家の3女として生きる事となり、黒帝メンバーは高町家以外は全てその3つの組織のどれかに配属される事となった。そして、今回の戦いの立役者である聖王なのはと並行世界から来た孝平達はそれらを見終わると、自らの世界へと帰っていった。その時になのははこの世界の家族に謝れて困惑した事と、孝平のカイゼリオンに、スカリエッツィのアジトだった聖王のゆりかごを、取り込ませてカイゼリオンを強化した事を追記しておこう。こうして、孝平たちの並行世界の旅は無事に終えたのだった。

元の世界に戻った孝平達は、聖王なのはによって一時的に9・10歳となっていたが、元の姿の赤ん坊の姿に戻っていた。そして、それぞれの戦艦を近隣の無人世界へと隠し、従者を連れて（孝平となのはは赤ん坊なので、それぞれセラフイムとリリスに抱きかかえられてだが）地球に戻るのだった。戻った時にそれぞれの家でひと悶着あったのは言うまでも無い。

それから数日後、聖王なのはがなのはに2つの竜の卵を持ってきて「はい、これが卵の正しい暖め方と竜の育て方を書いた本だから失くさないでね。それから、卵も大切にね。」
と言い、見た感じ手作りに見える本を卵と一緒に渡してから、次ぎに来るのは6年後だと言い残して去っていった。

おまけ

現段階でのキャラ設定

支倉孝平

年齢：0歳

種族：神、元人間、転生者

魔力：測定不能（1億2000万）

能力：時空操作、サイコドライバー（簡単に言えば高位の超能力者の様なもの）、完全記憶能力、高速学習、力（神力、気、霊力と言った

もので、いずれもEXクラス）、信仰の分だけ能力が上がる程度の能力

デバイス：セイクリッドアイゼン、聖王の書

所有戦艦：カイゼリオン

所有自動人形：セラフィム

既に歩いて、戦える0歳児の片割れで、神になった為に、異常な程に全ての能力が高い。
御神流が使えるので御神の剣士であり、聖王でもある。御神流では、なのはや恭也といった不破家や御神家の人達と一緒に修行をしている為、日々強くなっている。

不破なのは

年齢：0歳

種族：人間、転生者

魔力：SS-

能力：竜召喚、サイコドライバー、完全記憶能力と高速学習

デバイス：ヴァイスアイゼン

所有戦艦：エクセリオン

所有自動人形：リリス

既に歩いて、戦える0歳児の片割れで、孝平や恭也程ではないが肉体と感覚と魔力が大幅に強化されている。更に御神流を覚えており、強くなる為に、家族である御神家と不破家といった人達や孝平と一緒に修行している。

不破恭也

年齢：10歳

種族：人間、転生者

魔力：SS

能力：完全記憶能力、高速学習

デバイス：黒覇、白覇、影の書、シュロウガ（ただし、機動兵器だった並行世界のものとは違い、完全にデバイス化している。それに

性能も此方の方が若干上である。)

所有戦艦：黒星

所有自動人形：オファニス

元々御神流を使える為、元の戦闘力は高いが、なのはにより肉体や感覚を神ほどではないが異常に強化している。貰っている能力が一番少ないが、本人は気にしていない。

第6話「並行世界の管理局崩壊、そして帰界」(後書き)

すみません。並行世界編は早めに終わらせてもらいました。次はいよいよ孝平が海鳴を離れます。

第7話「引越し」

家族達にそれぞれの自動人形やアサキムの事を紹介し、その事で自動人形達も生んで良いかと交渉する。すると、両家ともOKが出た。そして更に、なのはと孝平も御神流の鍛錬をしたいと言い出したのだ。なのはの場合は、かなりハードルが軽く、不破家の血を引いている事もあり、変身魔法を使うことで許されたが、孝平の場合は御神や不破家とは関係ないと理由で渋られたが、実質的な御神・不破の大ボスである不破御影さんにより、悪用やむやみに人に見せたりしないと云う条件で認められた。

そして、それから1年と少したったある日の事。

場所：支倉家・リビング

視点：孝平

御神・不破家で修行するようになって1年と2ヶ月がたった。そして、俺はリビングで家族と食事を取ろうとしていた。

「……………」頂きます「……………」

と俺、父さん、母さん、そして父さん達に認められて家族となったセラフイムで合掌をした。今日の献立は肉じゃが、お米、焼き魚（種類は太刀魚）等の日本食に、それに少し摘めるものであった。

俺達は食事に箸で摘んで食べた。因みに、俺は本来は、離乳食と言うか、幼児が食べるようなものにしなければならぬが、体が既に入外であり、大人と同じ食事をしても良いとセラフイムからもお墨隙がもらえたから大人と同じでも良いのだ。そして、俺が

「今日も旨いな。セラフイム。」

と褒める。それに続き、父さんや母さんも

「ああ。そうだね。」

「ええ、さすがメイドさんね。」

とセラフィムを褒める。そう、今の会話でわかったと思うが、これらは全部、セラフィムが作ったものだ。褒められたセラフィムはというと、顔を真っ赤にし、照れながら

「いいえっ！！ご主人様や御家族様に食べていただけていただけで光栄ですっ！！」

と言った。その反応はかわいく、まるで人間であった。すると父さんが

「突然なんだが、今からかなり真面目な話がある。皆、良く聞いてくれ。」

と突然真面目な顔で言い出した。俺の父さんは、こんな大真面目な顔で冗談などは言わない。なので、俺達も真面目に聞く態勢をとった。

そして、父さんからの話を待った。まあ、俺は多分程度ではあるが、大体の見当はついていて。なぜならば、この出来事がたくさんあったからこそ原作の孝平は、渡り鳥を終わらせたいという理由で、学籍寮という物に憧れたのだ。そして、父さんから俺の予想通りの言葉が出てきた。

「実はな、もうそろそろ転勤と言うか、別の所に行かないといけないんだ。その為、此処を去らねばならない。」

その言葉に、俺と母さんは驚かなかったものの、セラフィムが

「え、ええええ！！」

と大いに驚いてしまった。それを見た俺は最近はどういった慌てたり驚いたりしていることが多いなと感じてしまう。1年近く前なら冷静に「そうですか。何時からですか？」と聞いてきそうだったが、最近では驚いてばかりだ。別に悪いと言いたいわけじゃなく、人間らしくなっている事に喜んでいる。しかし、そんな彼女でも戦闘時には1年前と同様に冷静な戦いをする（自動人形同士の模擬戦や、俺との模擬戦等で確認している）。どうやら、食卓や冷静じゃなくても良いような場所であれば、こうやって驚くことも良いと学習したらしい。しかし、この声は流石に近所迷惑になると思

「そんなに大きな声を出すな。近所迷惑になる。」
と注意する。それにしゅんとしながら

「申し訳ありませんでした、ご主人様。」

と謝るセラフイム。俺はそれを見て、かわいいと思いつながら

「反省してるようだし、許すよ。」
と許してから

「それより父さん、引越すって何処に？それと何日ごろから此処出るの？」

と話を变える。すると父さんは

「場所は満弦ヶ崎で、日にちは今月の29日、つまり明後日だ。それまでに自分の荷物や知り合いに知らせておけ。」

と言った。俺はその瞬間、驚きながらも

「そ、それって本当？父さん。」

と聞いた。それはそうだ。同じオーガスト作品である夜明けなのキヤラに会える可能性があるからだ。驚くのも当然と言えるだろう。

そして、嬉しさがこみ上げてきたが、次に浮かぶのは、なのはの悲しむ顔だった。俺は、喜びの表情から落胆へと表情に変えてしまっていた。

しかし、俺にはまだ手段が残っていた。それは、そう！魔法だ。その事を思いつくと、その落胆の表情も少しは落ち着いたような感じがした。しかし、今此処は食事中で、父さんや母さん、それにセラフイムが居る事を忘れていた俺は

「どうした？やはり、なのはちゃん達に会えなくなるのが寂しいか？」

「そうよね。私だって桃子さんとお話できなくなるのは辛いもの。」

「ご主人様！お気を確かに！！」
と心配される羽目となった。

そして、翌日。

いつもの様に、なのはと恭也さんと一緒にロードワークを終えると、直ぐに御神・不破家へと行った。そして、2人と3機（リリース、アサキム、オフアニス）に

「ええと、突然なんだけど。俺、父さんの仕事の都合で、明後日から別の所に引越す事になります。」
と話した。突然の事になのはは

「えっ!？」

と驚きの顔から悲しい顔へと変えて、泣きそうな顔になった。だけど、俺はそれが嫌だったので、直ぐ

「でも、大丈夫だって!!ほら、俺らには魔法があるし、俺が此処まで跳べば良いだけの話だろ?だから、そんな悲しい顔するなよ。」
となのはに言う。するとなのははいくらか表情が

「そ、そうだよ。ごめんね。」
と謝ってきた。それを

「謝る必要は無いよ。これは仕方ないんだから。」
となのはを抱きしめて慰める。その時、恭也さんの方から物凄い殺気が溢れ出したが、なのはも俺の腰に手を回してきたので、引くに引けない。しかも、離れようとする

「今はこうさせて!!お願い!!お兄ちゃんも殺気を出すの止めて
!!!」

と言ってきた。まあ、原作だとわがまま言わない子だったから少しは良くなったかなと思いつつも、俺は、その言葉にしばらくされるがままになり、恭也さんは仕方無しに殺気を出すのを止めたのだ。

それから、更に翌日、俺達は、別れの挨拶ではなく

「また明日。」

と挨拶を交わしてこの海鳴市を離れるのだった。
視点終了

おまけ

場所説明

海鳴市

どこかの県にある市で、海と山に囲まれている。とらいあんぐるハートシリーズと魔法少女リリカルなのは無印とA'sで、舞台となった場所である。また、人外が多く存在する場所の1つでもある。

満弦ヶ崎

夜明け前より瑠璃色なの舞台となった場所で、月にあるスフィア王国と地球における唯一の窓口である満弦ヶ崎中央連絡港市に、スフィア王国の大使館、月人居住区、王立月博物館が設置されている。原作では、メインヒロインであるフィーナ・ファミ・アーシェライト王女は、この市の朝霧家に従者のミア・クレメンティスと共にホームステイする事となった。

第7話「引越し」（後書き）

次は満弦ヶ崎編なのですが、どうやって原作と絡ませようか悩んでいます。一応の方法はあるんですが、恭也やなのは達も満弦ヶ崎に入れないといけません。

それと、なのはは孝平の事を好きになっていて、孝平も満更でもなような設定です。それと、なのはもハーレムというよりは、妻の一人にします。

第8話「物見の丘公園にて」

孝平は、引越して海鳴を離れてからもなのはや恭也達と鍛錬していた。両家の家族の方は魔法を知っているので、特に何も言われなかった。そんなある日、なのはが

「ねえ、私達もそっちに行っても良い？」

と言い出したのだ。孝平は断る理由も無いのでOKと返事をした。そして、その夜に、孝平はなのはと恭也を連れて、満弦ヶ崎中央連絡港市に戻ってから自宅を紹介してから、物見の丘公園に来ていた。その時に、孝平達は幻術で姿を見れないようにしていた。そして、そこに孝平だけが小さな2つの影が見えたので、近づいた。すると、10歳くらいの少年が少女の鼻を軽くつまんで、何か言っていた。そして、突然2人で泣き出してしまった。それらを全て見ていた孝平は、直ぐに小さい頃の朝霧達哉とフィーナ・ファム・アーシユライト（アニメ版の方の”よあけな”）だと判った。その瞬間、孝平は時間を止めると、直ぐに、カイゼリオン改に行つて、銀時計を4つ作り出した。そして、その4つを持って物見の丘公園に戻り、時間停止を解き、変身魔法を使って18歳の姿になり、泣いている二人に向かつて行き

「どうしたんだ？2人とも、泣いたりして。」

と聞く。すると原作同様の理由で

「僕達のお母さん。死んじゃったんだ。だから……ふえ〜〜〜
〜ん。」

と”よあけな”主人公の朝霧達哉が答えてまた泣き出してしまった。それを見かねた孝平は

「……………」
と無言でさつき創った銀時計を、2人の額に触れさせる。その冷たさに

「うわっ！ー！」

「きゃあつ！！」

と幼少期の達也とフィーナが驚きの声を上げる。そして

「どう？驚いた？これはね。お守りなんだ。」

「お守り？」

と聞いてくる。それに

「そう。これは2人を悲しい事から守るお守りです。出来ればいつも持っていて欲しいな。何時危険な事が起こるか判らないからな。」
と言う。それに

「ありがとう。」

と言う2人。そして、そこに何人かの気配を感じたので孝平は

「じゃあ、俺は帰るけど、君達も早く帰りなよ。」
と言って去っていった。

その後、なのはから同じ物が欲しいとせがまれたので、用意していた残りの2つの内の1つをプレゼントした。その時になのはが大喜びしたのは言うまでも無い。そして、孝平は変身魔法の設定を10歳程度に戻し、認識阻害魔法を行使してら3人で夜の鍛錬を始めたのであった。

おまけ

よあけな

夜明け前より瑠璃色な略称の1つ。

戦艦設定

カイゼリオン改

聖王なのはが、カイゼリオンに並行世界の聖王のゆりかごを取り込

んだ形で出来た戦艦で、その大きさは原型艦と同じかそれ以上に及ぶ。

全ての性能も向上し、特に防御能力では、強化前よりも2倍もあがっている。更には、2つの月の魔力によって鉄壁の防御を手に入れるという聖王のゆりかごの機能を改造し、何処の惑星や衛星からでも魔力を受けて鉄壁の防御を手に入れるという物に強化された。これは、原作のゆりかごの様に2つの月がある衛星軌道上に到達しなければ魔力を受けられないという欠点を解決する為である。動力炉も取り込んでいる為、動力炉が予備も入れて4つある。

デバイス設定

銀時計

孝平が未来の出来事の為に作り出した銀時計型デバイスで攻撃手段が無い。ただ、周囲の魔力を常に取り込んで、不可視の防御系の魔法を常に気づかれないように展開する事が出来る。

セイクリッドアイゼン

種類：鎧型

特殊：自己修復機能、自己補給機能、聖王の鎧強化装置、VPS装甲改、サテライトシステム

武装：ハウリング・ランチャー？×2、プラズマホーン、小太刀×4、5連チエーンガン改×2、3連砲改×2、両刃の西洋剣×2、アヴァランチ・クレイモア改、バインダーグラビティブラスト×2、バインダーアルカンシエル×2、バインダー6連ミサイルポッド×2

ライン・ヴァイスリッター&アルトアイゼン・リーゼの合体した姿に、原作機のクレイモアのテストドライブ部分にドライブではなく、ブラックサレナのバインダーが付属している様なもので、色は青と

白を基調としている（配色はライン・ヴァイスリッター参照）。因みに、上半身は純白の騎士で、下半身は古い鉄の巨人で肩は古い鉄の巨人の肩部（しかし、テストドライブではなく、ブラックサレナと同じ形をしている可動式のバインダーとなっている。）で、両腕には古い鉄の巨人の5連チェーリングン&純白の騎士の3連ビーム砲に似せた3連砲（魔力砲で威力としてはディバインバスターとディバインシューターの間位）が両方についている（形としては、3連砲の真ん中に5連チェーリングンという感じである）。そして、頭部は、ATX計画の2機を合わせたもので、どちらかと言うと古い鉄の巨人に近いデザインではあるが、純白の騎士同様に額には赤い宝石がある。背中も純白の騎士とはかなり異なり、12枚の天使の羽がある。また、純白の騎士の所は機械的になり、生物的な所が無くなっている。

ヴァイスアイゼンの同型機を聖王家の血を引く孝平用に改造した物である為、ヴァイスアイゼンとは武装や形状がかなり似ている。元はヴァイスアイゼンの1号機。

聖王の書

種類：魔道書型の複合ストレージ

管制人格：???（意図的な封印がしてある為、未登場）

特殊：クロスゲートシステム

ありとあらゆる古代ベルカ式とアルハザード式とハルケギニア式の魔法が記録され、更にはクロスゲート・システムが搭載されている。また、夜天の書のオリジナルデータも記録されている。孝平やその直系の子孫にしか使えないようになっている。

どちらも聖王家専用で、特に孝平用に調整されている為、孝平にとってはかなり扱い易いようになっている。

ヴァイスアイゼン

種類：鎧

特殊：自己修復機能、自己補給機能、VPS装甲改、サテライトシステム

武装：ハウリングランチャー？×2、3連砲改、小太刀×2、両刃の西洋剣、アヴァランチ・クレイモア改、バインダー3連ミサイルポッド×2、バインダーアルカンシエル×2

ライン・ヴァイスリッター&アルトアイゼン・リーゼの合体した姿に、原作機のクレイモアのテスラドライブ部分にドライブではなく、ブラックサレナのバインダーが付属している様なもので、色は青と白を基調としている（配色はライン・ヴァイスリッター参照）。因みに、上半身と下半身は純白の騎士、肩は古い鉄の巨人の肩部（しかし、テスラドライブではなく、ブラックサレナと同じ形をしている可動式のバインダーとなっている。）で、腕は、純白の騎士の様に3連砲を両腕に装備している。頭部は完全に純白の騎士で、背中
は原型機同様の羽が8枚ある。また、原型機の様な生物的ではなく、機械的になっている。2機存在したが、1機はセイクリッドアイゼンになった。

レイジングハート・スターゲイザー

種類：インテリジェント

前世で使っていたレイジングハート・エクセリオンを改造したもので、魔王の書とのリンクが可能となっている為、魔王の書の魔法を魔導書を開かなくても使用できる。また、槍になっている為、接近戦でも使える。

魔王の書

種類：種類：魔道書型の複合ストレージ

管制人格：???（意図的な封印がしてある為、未登場）

特殊：クロスゲートシステム

ありとあらゆる古代と近代のミッドチルダ式とハルケギニア式の魔法が記録されている魔導書で、クロスゲート・システムが搭載されている。聖王の書とは兄弟本である。なのはやその直系の子孫にしか使えないようになっている。

シユロウガ

種類：鎧

見た目も武装も原作機と同じだが、機動兵器の物とは性能が違い、此方の方が上である。

影の書

種類：魔道書型の複合ストレージ

管制人格：アサキム（見た目も声もスパロボZのアサキム・ド・ウイン）

魔法が比較的苦手な恭也用のデバイスで、自動で発動できるようになっている。

使用術式は、ベルカ式が主で、補助にミッド式やハルケギニア式が記録されている。

黒覇・白覇

種類：小太刀型アームド

恭也のデバイスで、それぞれにレヴァンティンの様なカートリッジシステムを搭載している。

装備・システム説明

クロスゲートシステム

サイコドライバーの力によって発動するシステムで、これを使えば並行世界に行き来出来、因果律もある程度は操作できる。

ハウリング・ランチャー？・？・ライン・ヴァイスリッターの物を機械的にして改造を施した武器で、？と？は殆ど変わらない仕様ではあるが、Xモードの時にだけ、？は4つの砲、？は6つの砲になる。原型のXモードは3つである。尚、魔力の方はMモードと言い、拡散型と砲撃型の使い分けが出来て、実弾のBモードは原型同様の弾と散弾の使い分けが出来る。

プラズマホーン：アルトアイゼン・リーゼに搭載されていたものを参考にしたもので、ヘッドパーツを付けている時だけ使用可能な兵器。

小太刀：小太刀を機械化したようなもので、素材は液体金属が使用されている。

5連チエーンガン改：アルトアイゼン・リーゼに搭載されていたものをデバイス用に転用し、改造したもの。威力は原型の物の1・5倍。

3連砲改：ヴァイスリッター系に装備されていた物を転用し、改造したもの。原型のもの2倍の威力を持つ。

両刃の西洋剣：見た目はFateのエクスカリバーで、同じ形の剣同士を連結させる事が可能。

アヴァランチ・クレイモア改：アルトアイゼン・リーゼに搭載されていたものをデバイス用に転用し、改造したもの。威力は原型の物の1・5倍。

バインダー6連ミサイルポッド：そのまんまに、バインダーに装備

されているミサイルで、質量兵器に該当するものである。

バインダーアルカンシエル：原作のA'sアースラに一時的に搭載された魔導砲で、数十キロが消滅する威力を持つ。エネルギーは母艦から補給される（ガンダムX系のサテライトシステムの様に標準用レーザーが発射されてからエネルギーが届く）。

第8話「物見の丘公園にて」(後書き)

本当はもっと早く2人は出会っていますが、孝平とアニメ版の”よあけな”との接点や達哉が瀕死にならない為の工作の機会を作る為には、必要でした。それにアニメ版の”よあけな”の最終話の部分に孝平を出そうと今の所考えています。因みに支倉家と朝霧家の距離はかなり離れています。

第9話「珠津島への引越しとユーノとの出会い」

孝平と”よあけな”の主人公である朝霧達也とフィーナ・ファム・アーシユライトの出会いから2年がたった。孝平となのはは3歳、恭也は12歳となっていた。そして、そんなある日、支倉家はまた引越する事となった。その事を、なのはたちに報告すると

「そうなんだ。また、その場所に連れてってね。」

となのはが言いだし、それに孝平は

「ああ。とはいっても面白い所が何もなければ連れてかんど。」

とだけ言っつて、その話は終了して、魔法と御神流の鍛錬に入っていた。

それから2日後、支倉家4人は引越したが、特に印象になる物が無い普通の町であった為なのはや恭也を呼ばなかった。

そして、更に4年の月日が経過し、孝平達は小学生となっていた。その間に引越しを2回したが、特に良い場所もなく、2人や海鳴で小学1年の終わり頃に知り合っつて友人となつたアリサ・バニングスと月村すずかに案内できずにいた。因みに、アリサとすずかとは、なのはが紹介した形となり、魔法の事も知つている。その時に、2人に魔力があるかと聞かれたなのはだったが、無いといつてその場を終わらせたらしい。勿論2人は残念そうにしていた。特に、アリサがすごく

「ねえ、魔力がなくても魔法使えないの？」

と聞いたが、なのはは

「どうだろう？私もそこまで詳しくないから・・・あ、でも孝平君なら知つてるかも。」

と言つと、アリサは反応して

「じゃあ、その孝平つて奴に会わせなさい。」

と言い、孝平の事が紹介される事となつたのだつた。そして、孝平はなのは同様の質問をされて

「一応、使える。だけど、それには特殊なデバイスが必要だし、造るとしても、造る場所はあるけど作る材料や部品が無いから無理だ。まあ、いつかは作ってやるから安心しろ。ああ、それとこれが魔法に関する知識だから暇な時にでも読んでおけ。」

とアリサを納得させた。少々不満げであったが………。

因みに、アリサ達に渡したのは小学生用にテキストの様なものである。

それから、小学校でも聞かれた孝平の瞳についても聞かれたが、その時はいつも

「ああ、先祖の遺伝。」

とだけ答えていたが、アリサとすずかには

「先祖の遺伝で、その先祖は魔法文明が発達していたベルカという国の聖王というベルカを建国した王だったんだ。もう、国自体が滅んでるから王族じゃないんだけどね。」

と正直に言った。その後、すずかの秘密についても話が行われ、孝平達は友（すずかは恋人として誓いを交わしたかったらしく残念そうにしていたが）としての誓いを交わしたりと有意義な出会いとなった。

それから数カ月後

場所：支倉家

視点：孝平

いつもの食事の最中に

「明後日からまた引越すことが決まった。」

と父さんからの連絡を受けた俺達。だけど、その言葉は聞きなれていたので驚かなかつた。そして、何時も通りに俺が

「今度は何処で、期間は何時まで？」

と聞いた。すると父さんは

「ああ、期間は2年で、場所は珠津島だ。」

と発表する。そうか。珠津島か……つて、ええええ！！と内心驚きながらも

「そ、そうか。」

と冷静を装う。しかし

「どうした？」

「どうしたの？」

「どうかなさいましたか？」

と聞かれてしまった。どうやら少しでも動揺したのがわかったらしい。それに

「あ、いや。なんでもない。」

と誤魔化す俺に皆は引き下がってくれた。

それから二日後、俺達は珠津島に引越した。

視点終了

支倉家が引越した先のは、悠木家の隣のアパートであった。その後、孝平が最初に出会ったのは、たまたまそのアパートの方を見ていた悠木姉妹であった。その事と、悠木家の陽菜とは学校で同じクラスになったのが縁で仲良くなっていった。仲良くなってからは孝平は魔法の事を明かした。2人はそれを受け入れて、今まで通り仲良くしていた。2人が魔法の事を知ってからのはなのは、アリサ、すずかを転移魔法で連れてきてから紹介して、良く一緒に遊ぶようになっていた。

それから2年後が経過した。

視点：孝平

悠木姉妹と仲良くなって2年がたった。その間にゲーム通りに千年泉に突き落とされたり色々な事に巻き込まれりと大変だったが、楽しくもあった。だけど、そんな日常もずっと続くわけもなく、予定

よりも早く父さんの仕事が終わり、俺達は別の所に引越していった。その直前に、ゲーム同様にガラスが割れて俺が犯人にされそうになったが、俺の結界+時間操作によりガラスは元に戻った。そして、先生を呼びに言っただけのせいにしてしようとした奴等は、その後たつぷりと怒られた。ざまあみる。その後、陽菜には俺が時間操作でガラスを直した事がばれていたりしたが、それ以外は何も言われなかった。それから数日後、なのはからメールが来た。その内容とは、フレット(ユーノ)

と会ったと言うことであつた。それを読んでから「じゃあ、今から行かないとな。」
と言い、俺は直ぐに海鳴の不破家へと転移して予め連絡していたなのはと合流した。そして、遂に念話で
(助けて。)

と言う念話を聞いた俺となのはは、直ぐに榎原動物病院へと向かった。因みに、恭也さんとリスとオファニスとは封印手段が無いので御神・不破家で待機している。俺も手段は無いけど、この事で交渉する為だ。それにこの世界のレイジングハートを俺専用で改造してやれば聖王の魔力でも耐え切れるからレイジングハートを貰うつもりだ。なのはには、前世で使っていたものがあるからだ。とはいっても改造するのはセラフィムの仕事だがな。そんなこんなで動物病院前についた俺達、原作同様なのはにフレットユーノが逃げ込んで来た。それと同時に病院から黒い塊をしたジュエルシードの暴走体が現れた。それをなのはは前世の経験や俺達との実践的な模擬戦もやっていたこともあり、直ぐに暴走体を封印できた。そして、俺はユーノに回復魔法を掛け、更には暴走体に破壊された壁や家屋の一部を時間操作で修復したのであつた。

それから数分後、俺達は御神・不破家へと戻った。そして
「うっっん。此処は？」

とユーノが目を見ました。それに
「あっ！目を覚ました？」

となのはが言う。それに

「君はさっきの！！それに……貴方は聖王では無いですか？どうしてこんな所に？」

と驚いた。そこへ俺が

「ああ、先祖が聖王家の人間でな。なんかの理由で地球に来たらしい。その理由はわからんがな。」

と言うと

「そうですか。それで貴女は、どうしてレイジングハートを持っているんです？僕が持っているのしか存在しないはずなんです……」

と聞いてくる。それになのはが

「ああ。それはね。私前世持ちでね。前も私をやったんだ。並行世界のだけだね。だから君の事もしてるよ。ユーノ君。」

と言う。それに

「ええええ！！」

と大声を上げる。しかし、今は防音用の結界を張っているお陰でその大声はこの部屋から洩れてはいない。そしてなのはは驚くユーノに「どうして死んだかというと、私ね、このジュエル・シード事件や今後起きる闇の書事件とかの激しい実戦や訓練で体がぼろぼろだったんだ。そんな時、当時管理局員だった私は管理局の上層部の企みのせいで任務の帰りに事故に見せかけて殺された。そして、ある人のお陰で転生してるって訳。」

と言う。すると

「じゃあ、並行世界とはいえ、僕のせいじゃないですか！！僕が貴女に協力を求めなければ貴女は死ぬ事もなかった！！と言うより闇の書って確かかなり危険度の高い一級搜索ロストログアじゃないですか！！それがこの世界で復活すると？」

とユーノは自分を責める。しかし、なのはは

「うん。地球で復活するよ。それと勘違いしないいでね、ユーノ君。これは私が望んでやった事なんだから君にとやかく言われる必要は

無いよ。勿論今回も私は君を手伝うよ。助けたい人達もいるし。」
と言う。それに

「助けたい子？」

と聞くユーノ。それになのはではなく俺が

「ああ。フェイト・テッサロッサ。母親の名は大魔導師と呼ばれた人物、プレシア・テッサロッサだ。そして、そのプレシアもある理由でジュエルシードを集めている。だけど、ジュエルシードを集めても、その願いがかなうことは無くこの世界を滅ぼすだけだ。」
と言う。それに

「そ、そんな。それじゃあどうやって集めれば？それにどうすればこの世界を守れるんですか？」

と震えた声で言う。それに

「何、簡単な事だ。交渉さ。」

と何気なく言う俺にユーノは

「交渉？」

と聞いてくる。それに

「そうだ。ジュエルシードを諦めるのと、もう一つ条件をつける代わりにプレシアの願いを叶えようってな。」

と答えると、またユーノに

「その願いとは何です？」

と質問された。それに

「プレシア・テッサロッサの実の娘。アリシア・テッサロッサの復活だ。そして、俺達にならそれが出来る。」

と正直に答える。下手に嘘を言っつて裏切られるような事になったら堪らないからな。そして、それに

「そ、そんな馬鹿な！！そんな事、アルハザードで無い限りは無理のはずだ！！」

と言う。そう。それがプレシアがジュエルシードを使おうとした理由だ。それを

「そう。プレシアもそう考えてアルハザードに行こうとしてるのさ。」

ジュエルシードを使い、この世界を滅ぼしてまでね。」

と口にする。それに

「なっ!!!」

と驚くだけで何も言えなくなっていた。そこに

「だから、私達はテッサロツサ家を助けるのと同時に世界を守る必要があるの。だから、協力させて・・・ね？」

と言っなのはに続き、俺も

「勿論、ただでとは言わない。そのレイジングハートを俺にくれ。それがこの事件に俺達を巻き込んだ事への謝罪と手伝う俺達への礼だ。」

と言う。それに根負けしたのか

「わかりました。そういう事でしたら協力、お願い致します!!! 聖王陛下!!! そして・・・」なのはだよ。高町なのは!!!」なのはさん。そして、ありがとう。」

とユーノから協力を求めさせるのに成功するのであった。それから俺は名乗る事を忘れていたので

「あっ!!! 自己紹介がまだだったな。俺の名は支倉孝平。世界や死因は違うが、なのはと同じ転生者だ。俺のことは普通に孝平で良いし、タメ口が良い。勿論なのはのこともな。良いだろ? なのは。」
と言う。なのはが

「うん」

と頷く。すると割と驚かずにいたユーノは

「あ、御丁寧にどうも。知っているとは思っけど、ユーノ・スクライアと言います。よろしく、孝平、なのは。」

と自己紹介をしてきた。どうやら、今まで驚く事になれたらしい。その後、恭也さんやセラフィム、リリス、オファニス呼び出してユーノに紹介した。こうして、俺はユーノのジュエルシードを探すのを手伝う代わりに、優秀なデバイスであるレイジングハートを手に入れたのであった。

視点終了

第9話「珠津島への引越しとユ一ノとの出会い」(後書き)

陽菜との文通の話がなかった事については、次回でその理由が明らかになります。

第10話「話し合い」

孝平が、ユーノからレイジングハートを貰って、数日が経過した。月村邸の物以外は殆ど回収した。月村邸の物を回収しない理由は、なのはがフェイトと初めて会う場所であり、都合が良い場所でもあるからだ。それ以外はなのはの記憶と戦艦の探査能力や孝平の空間操作により、全て回収された。そう、フェイトを孝平やなのはと会わないといけないように仕向けたのだ。そして、孝平は、なのはと協力して全てを回収した後、カイゼリオン改のデバイスルームに居た。

場所：カイゼリオン改・デバイスルーム

視点：孝平

「さて、セラフィム。君には、これからこのレイジングハートを改造して貰いたいんだ。レイジングハートは遠距離が本領だから俺向きのデバイスじゃない。だから、形態についてはランサーフォルムとザンバーフォルムにして、術式をミッドと古代ベルカの二つにしてくれ。それに、フレーム強化とカートリッジシステムと補助武装もつけないとな。幸い、素材や資金は沢山あるからな。」

と俺はセラフィムに要望を言うと

「はい。2年程前に母様から頂いた物がありますし、それに、カートリッジシステムの方は、母様から頂いた改良型のカートリッジシステムのデータと部品を使って強化すれば、このレイジングハートは完全に生まれ変わります。」

と頷いてからそう言うセラフィム。それに

「そう。レイジングハートではなく、神の槍としてな。」

と言う俺に対し

「はい。」

と頷くセラフィム。そう、今の会話でわかったと思うが、聖王なの

はが俺達が6歳の時に約束通りに来たのだ。その時に渡されたのが、デバイス改造に必要な素材や機材に資金。それに、月並みの人工衛星”ネビーイーム”とまるで剣の形をしたスペースコロニー”ソーディアン”だった。勿論、この二つは宇宙にあり、月にスフィア王国という国家があるので、常時ステルスモードにしていけないといけない(現在もそうしている)。因みに、防衛兵器として無人のジューテッカ(15メートル)1機&ゆりかご級の戦艦10隻と鎧型デバイス(形はゲシュペンスト)を持った自動人形兵20体がその二つにそれぞれに配備されている。はっきり言って、この戦力は、管理局の1個師団程の力を持つと、聖王なのはが言っていた。しかも、それがなのはと恭也さんにも渡されている。つまり、俺達は3個師団並の戦力を持つているのである。その為、管理局と戦う時は俺が聖王教会に命令を下し、管理局と戦わせ、それに地球や月にも参加させれば、この戦いは勝つたも同然なのだ。その為に、俺は時機を見て管理局の事を地球と月にばらすつもりだ。それと同時に聖王教会や教会が支配している場所全体に地球に聖王である俺が居る事と、管理局と戦おうとしている事を教えてやれば、戦争の始まりとなる。しかも、地球や月に、管理局のシンパが居るとしても本局に伝わるのはそれなりに時間がかかるので、敵対している事がばれるのももう少し先で、その間にミッドや本局に攻め込もうというのだ。それに、もし直ぐにばれても、ネビーイームとソーディアンには、イージスいう最強の盾を発生させる装置が置かれており、その防御能力は、アルカンシエル20発分の攻撃を受けても、びくともしないと

という代物だと聖王なのはが言っていた。しかも、それは1組ネビーイームとソーディアンだけで地球と月も守れるようになっていてというので、全く地球や月にはダメージは無い。そもそも、アルカンシエルの装備や管理局員派遣には、かなりの時間と許可が必要となる。例え、許可が直ぐに下りても、装備や準備をしている間に本局や地上本部が終わっている。その二つを潰した後は、管理局の悪行を全部見せて、管理世界に新たな組織の加入に同意してもらおうという計画も考えている。勿論、

加入しなくても良いが、聖王教会側の世界には確実に参加してもらう。というよりは参加せざるを得ない状況にする。そう。俺が促進してその組織に入るように、それぞれの世界に働きかけるのだ。そうする事によって、聖王が進めているのであれば仕方が無いと参加させるのである。ジェル？あいつは並行世界の時同様に潰す。そして、イクスヴェリアは神にする事によって助ける予定だ。とそんな事を考えていると

「ご・・じん・ま!!、御主人様!!」

という声が聞こえてきた。何度もセラフィムに声を掛けられていたらしい。なので

「あ、すまん。考え事をしていた。」

と答えた。すると安心した様な表情で

「そうですか。それで、何の考えですか？」

と聞いて来た。なので、俺は先程考えていた事を説明する。すると「なるほど。確かにそうですね。では、聖王教会の交渉は私がやりましょう。」

と言って来た。俺は一理あるなと考えてから

「確かに、俺に長年仕えてきた君なら任せられるな。ではその様に頼む。」

と頼むとセラフィムは

「ハッ!!」

と返事をしてから

「しかし、その前にレイジングハートの改造が先決ですね。」

と続けて言った。それに俺は頷いて

「ああ、頼む。」

と言って、セラフィムを残して、地球へ帰っていった。

視点終了

孝平がセラフィムにレイジングハートの改造を任せてから、2日後の日曜日、孝平は珠津島に居た。理由は、悠木 陽菜から、千堂

瑛里華と友達になったと言う連絡を受けた。そして、その瑛里華に会ってみたいという理由で珠津島に来たのだ。さて、ここでどうしてこつも早く連絡が行き、孝平がこんなに早く珠津島に来られたのかを説明しなければならぬ。

連絡手段として、陽菜は手紙でやり取りを行おうと孝平に言った。しかし、孝平は

「それよりも早く連絡を取り合える手段があるから、これを使って連絡を取り合おう。」

と言い、腕時計型の発信機付きの通信機を、陽菜とかなで渡したのだ。そして、移動手段としては転移魔法で原作で紅瀬 桐葉が寝ている草原に転移、そこから認識障害と幻術を使用して、陽菜の持っている通信機に内蔵されている発信機を辿って、陽菜と瑛里華に会いに来たのである。勿論、魔法を使用する理由が存在する。それは、居ない筈の人間が居たら不味いと判断したからだ。

と言うわけで、孝平は今珠津島の地に足を踏んでいるのだ。その後、陽菜との待ち合わせ場所に行くと陽菜と瑛里華が待っていた。そして、孝平と瑛里華は会うはずの無い時間軸に出会い、原作同様に尻餅をつかれたであった。孝平は知ってはいたけど、実際にされるときつかった様で落ち込んでいた。しかし、気を取り直して尻餅をついている瑛里華の頭に

「ごめん。ちよつと触れる。」

と言いながら触れて、神力を流し込んだ。すると

「あれ？どうして？変な感じがなくなっちゃった。どうして？」

と言いながら瑛里華はきよんとした表情で孝平を見つめた。それに答えるように

「ああ、ごめん。実はね、君は吸血鬼ではなくなつたんだよ。」
と言う。すると瑛里華は

「ええ！！どうして知っているの！？」

と驚いていた。その後、直ぐに口を手で塞ぐ。しかし、事情が良くわかっていない陽菜は何を言っているのかわかっていないと言う

ような表情で孝平と瑛里華の顔を交互に見ている。それに気づいた孝平は、陽菜に瑛里華は吸血鬼だったと教えた。その後、拒絶されるのが怖いのか、俯いている瑛里華に対し

「大丈夫だよ？ エリちゃんは一リちゃんなんだから怖がらなくて良いよ？ それに、似たような人なら此処に居るし。」

と言うと孝平の方を見た。それに釣られて、陽菜の言葉で頭を上げた瑛里華も驚きの表情で孝平を見た。そして、孝平が、自らが神である事を教えた。その事を知った瑛里華は、似たような存在が居ると知って少しは気を緩めた。そして、孝平の言っていた言葉を思い出し

「ねえ、支倉君が神なのはわかったけど、私が吸血鬼じゃなくなっただってどういう意味？ それに、どうして私が吸血鬼だって事が分かった？」

と瑛里華が聞いて来た。それに

「あつ！ 私も聞きたいかも。」

と陽菜も便乗する。その後、孝平により瑛里華が吸血鬼から神になった事を明かされ、これから神についての説明をしようと口を開いたその時、隙間が現れて

「やつほ〜。」

と聖王なのはが出てきたのであった。

その時、この世界のなのははフェイトと会って交渉していた。

結果、フェイトの説得は成功し、ジュエルシードはなのはの手に渡り、なのはは全てのジュエルシード封印を終えたのであった。そして、後はプレシアとの交渉だけとなったのだ。因みに、フェイトの体には原作同様に虐待された時の傷があったので、なのははそれを全て治した。

第10話「話し合い」（後書き）

悠木姉妹は孝平が神だという事を知っています。
それと、もう直ぐ管理局との戦争が近づいてきました。闇の書の方もありますから早めに決着をつけようと思います。

第11話「新たな神の能力!？」 (前書き)

サブタイトルを少し変えました。

第11話「新たな神の能力!？」

「やっほー」

と現れた聖王なのは、それに驚きながらも孝平が

「なんだ? どうかしたのか?」

と言う。それに

「ああ、少し孝平に異常を感じたから来たんだよ。」

と言う。それに孝平は

「そうか。で、その異常って言うのは何だ?」

と聞く。それに

「それを調べに来たんだよ。」

と聖王なのが言う。そこに陽菜が

「ねえ、孝平君。少し良いかな?」

と声を掛ける。それに

「なんだ?。」

と陽菜の方を向いて聞く。そして

「この子は誰? なのはちゃんに似てるような気がするんだけど?」

と言うに事情や誰なのかわかっていない瑛里華は

「???」

と首を傾げていた。そして、その問いに答えたのは聖王なのはだった。

「似ていて当然だよ。だって私、並行世界のなのはだもの。あつ! 並行世界ってわかる?」

と答えると並行世界について聞いた。しかし、首を横に振る2人に「並行世界っていうのはな。簡単に言えばもしもの世界だ。」

と孝平が答える。それに瑛里華と陽菜が

「もしもの世界?」

と復唱する。それに

「ああ、例えば、もしも俺がこの島に来なかったら、とかそう言う

可能性の世界の事だ。そして、そこにいるなのはそっくりの奴はその可能性の1つのなのはこのわけだ。」

と詳しく説明した孝平に

「そういう事。で、孝平は体に何か異常はみなれない？痛いとか。」
と聖王なのはが頷いてから孝平に異常が無いかと聞く。それに

「あゝ、そういえばなんかさつきから少しいたい気もするが、我慢できない痛みじゃないな。」

と答える孝平に

「やっぱりか。ちょっとごめんね。」

と言い、孝平の頭に触れる。そして、手を離すと今度は

「ふゝん、なるほどね。じゃあ、次は君ね。」

と言って、瑛里華の頭に触れる。そして、頭から手を離すと

「やっぱりか。よし、大体わかった。」

と言う聖王なのは。それに疑問を持った孝平は

「わかったって何がだよ？」

と聞く。それに

「うん、じゃあ説明するね。」

と言うと聖王なのはは孝平達に説明しだした。

視点：孝平

聖王なのはからの話を聞いて、瑛里華を神にした時から感じていた痛の正体がわかった。

どうやら、瑛里華の能力のせいらしい。その能力と言うのは、神になった時に生まれた能力らしく、神にした存在、つまり俺に永遠の命を与えると言うものらしい。どうしてかはわからないが、瑛里華は元々吸血鬼であった為、不老で殺されない限りは死なない存在であった。そして、それは神になってからも変わらず、その能力を相手にも分けるといふ能力が神になって付いたという。しかも、その副作用で、俺の能力が全て向上したらしい。まあ、それはそれで良いんだけど、聖王なのはから

「うーん、これだと孝平のデバイスがもたないね。孝平・・・デバイス貸して。」

と言う聖王なのは、俺のデバイスを渡す。そして

「はぁー！ー！！！」

と叫びながらデバイス達に力を送った。それが終わると

「はい、これで改造完了。これでもう魔力値が、あと5億ぐらい増えたって問題ないはずだよ。あつ！因みに今の孝平の魔力値は4億と少しだからね。」

と言う。そこで、俺は少し考えてから

「なあ、聖王なのは。少し頼みたい事があるんだけど。」

と相談を持ちかけた。それに

「何？」

と内容を聞いてくる。俺はそれに

「少し耳貸して。」

と言う。それに

「わかった。」

と返事が来たので俺は

「ゴニョゴニョ」

と聖王なのはにしか聞こえないように話た。その内容に

「はあく。仕方ないな。わかったよ。」

と疲れた表情で了承してくれた。そしてそれに

「勝手言つてすまん。」

と頭を下げる。それに

「いや、気にしなくて良いから頭上げて。」

と聖王なのはに言われた。なので頭を上げる。そして

「ありがとう。」

と笑いながら言うと、聖王なのは以外の瑛里華と陽菜の頬が紅く染まるのが見えた。それを見た瞬間、まあ容姿は良い方だからなと思っただが

「どうしたんだ？2人とも、顔が紅いぞ？」

と言う。すると、2人に何にも無いと言われてしまった。そしてそれに

「まあ、いつか。」

と言った時、ピピピピピピピピ通信の音が聞こえた。なので、回線を開く。するとディスプレイになのはとフェイトの顔が映し出された。それを見た瞬間、説得が成功した事がわかった。なので

「おっ！！その様子だと、俺にプレシアとの交渉させたいらしいな。」

と単刀直入に言う。すると、フェイトは驚きの顔を見せて、なのはは「うん。今直ぐ願うことができる?」

とお願うしてきたが、こちらでも交渉しなければならぬ相手がいる為「すまん。今は別件があつて無理だ。そっちより厄介な事なんでな。

その代わりに、交渉に必要なカンペを送るからそれを覚えて、時の庭園に行つてくれ。」

と言う。すると

「わかったよ。その代わりに、後でフェイトちゃんに会つてね。孝平君に会つのは、楽しみにしてるから。」

と言うと、なのはは通信を切った。そこに、陽菜が

「孝平君、なに？交渉相手って?」

と聞いてくる。

「ああ。少し、千堂の母親と話をしないといけない事があるからさ。」

と答えるた後に

「それと、さっきの金髪の子については本人から聞いてくれ。」

と続け言う。それには

「うん、わかった。」

と素直に頷く。そして

「なあ、千堂。これから君の事は瑛里華って読んで良い?俺も孝平で良いからさ。」

「わかったわ。孝平君。」

「じゃあ、いきなりで悪いけど・・・。」

「な、何？」

「少しと一緒に瑛里華の家に行ってくる。ただし、かなり危険だから帰ってくれないか？」

「いつも以上に真剣な顔を見つめる。その俺の表情に紅くなりながらも」

「わ、わかった。でも、いつか埋め合わせはしてね？」

と言う。それに

「ああ、すまないな。」

と頷く。そして、俺となのはと瑛里華に別れの挨拶をして帰っていた。させ、これで俺も交渉が出来る。

「じゃあ、行こうか。」

と瑛里華に言う

「ちよ、ちよっと！！本当に母様に会うつもり？危険なのよ？」

と警告してくるが

「ああ、わかってる。でも、このまま行くと君は屋敷に閉じ込められたままになるよ？」

と言う。それに

「で、でも！！って言うより何でその事を？」

と驚く。それに

「内緒です。それよりも大丈夫だって、心配するな。それと、聖王なのは。」

と言う

「スキマを使って、ついて行けば良いんだね？わかった」

と俺の言いたい事がわかったのかそう言って来た。それに

「ああ。」

と頷いた。

こうして俺と聖王なのは（ただし、スキマで）と瑛里華は千堂邸に向かって行くのであった。

視点終了

おまけ

人物設定

聖王高町なのは

魔導師ランク：測定不能（魔力値は1兆以上。）

種族：神

不破なのはと孝平と恭也を転生させた張本人にして、魔法少女リリカルなのはと聖王と魔装機神の主人公。見た存在の能力等をコピーし、それを自分の物にして自分に乗せするという恐ろしい能力がある。その他にも、時間を操作したり、歴史を限定付ではあるが操作もできるたりとなんでもありの神様である。

千堂 瑛里華

魔力値：測定不能（8200万）

種族：元吸血鬼の神

デバイス：なし

能力：自分を神にした存在に永遠の命や力を与える程度の能力、対象を神にする時に永遠の命と力を与える程度の能力。

メインヒロインの一人。元吸血鬼の女の子で、その運動能力が高く、神になった事で魔力や神力を手に入れた。

デバイス設定

ゲベル・ガンエデン（別名：神の槍）

形態：槍、ザンバー（魔力刃を展開する。バルディッシュのザンバ

「フォームに近いものだと思います。」
レイジングハートを改造した孝平専用のデバイスで、主にミッド系の術式を使うのが目的ではあるが、ベルカ式も使える。待機状態はそのまま。なのはの手によって更に強度が増した。

聖王の書

ミッド式の魔法を追加しただけで、他の性能は変わらない。ただ、管制人格の使用術式がベルカ式だけでなくミッド式も使えるようになってる。

セイクリッドアイゼン改

追加特殊：、サイココミュ、時流エンジン、反消滅エンジン、重力制御装置

孝平が瑛里華を神にした後、彼女の能力が原因で魔力やその他能力が大幅に増えた結果、セイクリッドアイゼンでは耐えられないと判断し、聖王なのはとアルティメット・グラギオスの力によって耐えられる様に改造された。その性能は、改造前の10倍かそれ以上となっている。バインダー部分にはビット×8とツイン・カイザー砲を、腰部分にはレールガンを装備して、実弾、魔力共に武装が増えて、攻撃性が増している。また、追加装甲で防御性能も向上し、更には超小型の時流エンジンと反消滅エンジンと重力制御装置が追加装備されている為、魔力以外の動力源も使用可能になり、全ての性能が武装も含めて向上している。また、重力フィールドやワームホールも使用可能になり、縮退砲やブラックホールクラスタやブラックホールキャノンを撃てる様になった。

追加された武装設定

ビット：バインダーに追加したレジェンドガンダム的大型ドラグーンを小型化した装備。バリアが展開可能。

ツイン・カイザー砲：バインダーに追加装備された武装で、アルカシエルトは違い、バインダーの先端を敵に向けないが、戦艦からのエネルギー供給を受けなければならない為、時間がかかるし足が止まる。しかし、拡散モードや連射モード、最大出力モードとモードが充実している為、アルカシエルよりは扱い易い。ただ、威力も低い。最大出力は、島を一撃で消滅させる事が出来る。

レールガン：ストライクフリーダムガンダム同様に腰に装備している物を小型化したレールガン。

ブラックホールクラスター：ネオ・グランゾンのブラックホールクラスターと同等の威力。

ブラックホールキャノン：胸の紅い大きな宝玉から発射される。威力はブラックホールクラスターの小規模版。

縮退砲：ネオ・グランゾンの武装と同じもので、星を消滅させる事が出来る。

第11話「新たな神の能力!？」（後書き）

次は説得します。多分、前編と後半に分けられると思います。それと、孝平と聖王なのはの内緒話は、アニメ版のよあけなの千春さん登場前に明かされます。

第12話「交渉と説得」前編

陽菜と別れた瑛里華の母親の説得と交渉に向かった孝平は、瑛里華と聖王なのは（ただし、スキマに居る）と一緒に数分走って、目的の千堂邸に着いた。そして、千堂家の当主にして瑛里華の母親である千堂伽耶の居る洋館の離れにある和室へとたどり着いた。

場所：千堂邸・

視点：孝平

伽耶さんの居る和室にたどり着いた俺達、そして、奥には伽耶さんと思わしき女性の気配を感じた。なので、俺と瑛里華は普通に部屋の中へと入っていった。ただし、怖がる瑛里華に安心感を与える為に手を繋いでだったが……。因みに聖王なのはスキマで既に中へ入っている。

「失礼します。」

と俺と瑛里華が挨拶をする。それに

「何だ！！貴様は！！それに瑛里華！！貴様、何故その様な子供と共に居る！？」

ときつい口調で伽耶さんが怒鳴る。それに動じない俺は、怖がっている瑛里華の手を握りながら

「貴女にお話があつて来ました、支倉孝平と言います。」

と伽耶さんに話しかける。それに

「話だ！？私に何の用だ！？」

と相変わらずきつい口調で聞く伽耶さん。しかし

「貴女の娘、瑛里華さんは吸血鬼では無くなりました。」

と言う。すると

「な！！貴様！！何故それを！！まさか、貴様か！！瑛里華！！・・・やはり貴様は完全に出来ぞこないの様だな！！」

と怒鳴り、直ぐ後に

「それと、何故こ奴が吸血鬼じゃなくなったのか、答えよ。」
と少し怒りを抑えた感じでそう聞いて来た。それに

「わかりました。しかし、勘違いしないで下さい、伽耶さん。瑛里華さんは俺に一言も自分の存在を明かしてはいません。俺が一方的に知っているだけなのですから、瑛里華さんのせいではありません。」

「
と言い、続いて

「それと、何故吸血鬼ではなくなったかと言うと・・・俺がこの子を神にしたのです。そのせいで、彼女は吸血鬼から神になりました。何故、俺にこの様な事が出来るかと言いますと、俺も神だからです。神には、対象に自分の神力を流し込む事によって自分より下の神にする事が出来ます。」

と伽耶さんの質問に答えた。それに
「ふんっ！それでこ奴を神にして、如何しようと言うのだ？」
と聞いてくる。それに

「はい。貴女と共に家族にしようと思っています。それと、さっきから思っていたのですが、出来そこ無いと言うのは、血の繋がっていないとはいえ、自分の娘に対して酷いのでは？」

言う。それに瑛里華は驚いていたが無視をする。そして、伽耶さんも驚いていたが

「ふんっ！出来そこないを出来そこない呼ばわりして何が悪い？それと、良く私と瑛里華が血の繋がっていないと知ってるな？それに何故、私が貴様と家族にならないといけない？」

と色々と聞いてくる。それに

「はあ、そんな事では、死んだマレヒトさんが可哀想ですよ？それと、どうして血が繋がっていないかを知っているかは後で説明しますし、貴女は淋しそうだからです。まあ、他にも理由はありますがね。」

と呆れたように言う。すると

「何故、貴様がその名を知っている？それに私は淋しくなど無いし、何故父様が死んだと言う！？これ以上の戯言は許さんぞ！」

と先程と違い、俺達に殺気を込めて怒り出した。それに俺は更に彼女の怒りを買うような言葉を言う。

「それは、俺がマレヒトさんの記憶を持っているからです。」

その言葉に完全にキレたのか

「世合いごとを。冗談も大概にしろ。……お前、殺すぞ。」
と言った後、俺に襲い掛かってきた。しかし、俺は瑛里華の手を握っていた手を離して、伽耶さんの腕を自分の手で掴んで攻撃や動けないようにする。そして

「おっと！！見えてるんだよ。その程度で俺を殺す？殺れるものならやってみろよ。」

と少し殺気を込めて言う。それに負けじと

「くっ、離せっ！！！」

と言うが、そのまま腕を掴んだまま

「いや、離さないね。俺の言葉を信じてくれるまでね。……どうしても、信じられないと言うのであれば……」

と言う。そして、伽耶さんは俺のを睨む。それに対し俺は、先程とは違い、優しく

「7月12日、それが貴女の誕生日ですよ？これでも信じないと言えますか？」

とこの時代では、伽耶さん自身と彼女の親友兼着属の紅瀬さんしか知らない事を話した。すると、不機嫌ながらも

「くっ！！……わかった。話を続ける。そして、手を離せ！！！」

と言う。それを聞いた俺は、伽耶さんの腕を離した。そして、俺はゲームで孝平と瑛里華が話した事を一人で言った。その時に、伽耶さんの反応も紅瀬さんが居なかつたので瑛里華を殺せと命令しなかつた事や自らが瑛里華を殺そうとしなかつた事と、俺が伽耶さんを

引つ叩かなかつた事以外は、ほぼゲーム通りだったので、俺は一安心しつつも

「なので、伽耶さん。もう一人で抱え込むのは止めましょう。憎し
みで繋がりを作るなんて間違ってます。確かに貴女は恨めないだけ
マシと言う様な人生を送って来たかも知れませんが。しかし、それで
貴女や周りの家族は幸せになれのですか？そんな道より、皆で仲良
く暮らした方が幸せだと俺は考えていますし、マレヒトさんもそう
伽耶さんに望んでいるでしょう。だから、俺は貴女を幸せにする為
に家族になりたいと言ったのです。では改めて言います。……
……今からとは言いません、俺と家族になつてください。」
等と話した。その時に顔を紅くしながら瑛里華が怒っていたが、気
にしない事にした。すると、少し間を置いてから

「わかった。いえ、わかりましたわ。貴方。」

と顔を紅くしながら伽耶さんが言った。それを聞いた時、俺は

「はあ！！」

と素っ頓狂な声を上げた後

（しまった。これってプロポーズじゃん。瑛里華が怒ってた理由も
これだったのか。瑛里華も俺の事好きみたいだし。）

と自分が言った失態に気づいて心でそう思った。しかし、時遅く
「これからは貴方の妻として生きることにします。」

と言った。それによって瑛里華の怒りも最高潮になり

「ちよつと！！母様。本気！？それに、孝平君はまだ9歳なんだよ
？」

と叫ぶが

「年なんて関係なからう。これからはお前は孝平さんの事を父様と
呼ぶが良い。」

と言う伽耶さんが言った。その言葉に俺は

「すみません、伽耶さん。実はお願いがあるんですが……。」
と言う俺に

「何ですか？孝平さん。他人行儀な言葉遣いは止めていたたきたい

のですが……。それと、伽耶とお呼び下さい。」

と言ってくれる。俺は嘘をついているしこれから言う事なので罪悪感を感じながらも

「わかった。伽耶の夫になる事に不満はない。しかし、貴女以外にも妻を持つ事を許して欲しい。」

と頼んだ。すると思っただとおり

「どう言う事です！？説明してください!!」

「そうよ!!ちゃんと説明して!!」

と伽耶と瑛里華が怒る。それに

「実はな。大学を卒業したら、俺は異世界に移り住もうと思ってるんだ。」

と言う俺に

「「異世界?」」

と復唱する。それに頷いて

「そうだ。そして、そこには聖王教会と言うベルカ聖王家を神として崇める宗教があるんだ。」

と聖王教会について話す。それに

「それで、その聖王教会って言うのと、孝平君に何の関係があるの?」

と聞いてくる瑛里華に対し、伽耶は俺の言いたい事がわかったのか

「まさか!!」

と驚いた。それに

「そう。伽耶の思った通りだよ。俺がその聖王の証を持った存在なんだ。そして、俺はある組織を潰す為にその教会の神である聖王になろうと考えてる。勿論、向こう側としては聖王家の血を絶やしたくない。それで向こうはお見合いを勧めてくるだろう。だから、俺を本気で好きでいる女性達や俺が好きだと思ってる女性達を妻にする事で、一夫多妻にはなるがそれを回避しようと考えてる。勿論、その妻の中に伽耶や瑛里華も入って貰おうと思ってる。ただし、本気で俺の事を好きでいてくれるのであればな。」

と言う。これは俺の本当の気持ちだ。そして、瑛里華は「ど、どうして、私が孝平君の事を好きって分かるの？心が読めるなら別だけど。」

と聞いてくる。それに伽耶が

「そういえばそうね。心が読めるのですか？」

と便乗するかのように聞いて来た。なので

「いや、俺は心は読めない。それが出来る聖王なのはに教えてもらった。」

と正直な話した。さて、此処でどうやって瑛里華の気持ちを知ったのかを話さねばなるまい。

俺と聖王なのは、千堂邸に向かっている間、密かに念話で話をしていた。そして、その時に瑛里華が俺の事を好きな事と聖王なのが人の心を読めると言う事を教えてもらったのだ。俺の言葉に

「聖王なのは？」

と首を傾げて復唱する伽耶に対し、瑛里華は聖王なのはを知っていたので

「ああ、あの子か。そんな力があつたんだ。」

と聖王なのはの能力に驚いていた。そして、それに驚きながら

「何っ！！瑛里華、知っているのか！？」

と聞く伽耶に

「ええ、此処に居ますよ。姿は見えませんが。」

と言う。それを聞いた伽耶は、気配を探りながら和室部屋付近に誰か居ないかを調べるが

「気配を探ったが、何処にも居ないぞ？どう言うことだ！？説明しろ！！！」

と少し怒鳴った。それに

「まあまあ、落ち着いてくれ、伽耶。今呼ぶから。」

と言う俺に

「わかりました。」

と渋々従う伽耶。そして、俺が聖王なのはを呼ぼうとしたその時

「ばあ!!」

と逆さ状態で聖王なのがスキマから顔を出した。それに

「「うわっ!!」」

「きゃ〜!!」

と驚く俺達だったが、俺は何とか先に持ち直して

「お前な、俺が呼ぶ前に出てくるなよ。驚いたじゃないか。」

と文句を言った。すると

「驚かせたかったのだから、驚かせて当たり前でしょ?」

と言ってきた。それに何処の妖怪だと思いつつも

「・・・まあ、良い。それで、伽耶。こいつが聖王なのはだ。こいつには色々助けてもらっていてな、瑛里華が俺の事を好きだと言う事も教えてくれたんだ。」

と伽耶に聖王なのはに紹介した。因みに、瑛里華には既に紹介を済ませていたので問題なかった。すると、先程まで驚いていた伽耶も落ち着きを取り戻して

「未来の夫がお世話になっております。」

とおしとやかに言った。すると

「いえいえ、大した事はしてませんよ。それよりも孝平、本当の事を話しても良いんじゃない?」

と俺に聞いて来た。恐らく、俺が本当はマレヒトの記憶を持っていないことや転生者だと教える心算だと思いつ

「ああ。俺もそろそろ言おうと思っていたからな。」

と答えた。こうして、俺は聖王なのはと一緒にこの世界がゲームの世界に酷似しているという事を黙っている事と、前世は別世界の支倉孝平で、その時の記憶を引っ張り出したという嘘をついた以外は殆ど俺が千堂家を助けたいと言う思いも含めて正直に話した。そして、話し終わった後に謝った。結果、2人に嫌われると思っただが

「私達を助けてくれようとしてついた嘘なんでしょ? だったら、孝平君が謝る必要は無いわよ。」

「そうですね。それに私は、もう貴方の妻として生きることを決め

たのです。ですから、謝らないで下さい。」
と言ってくれる。なので

「2人ともありがとう。それで、一夫多妻についての事なんだけど、結局2人は決めたの？」

と2人にお礼を言っつて、一夫多妻についての答えを聞く。すると2人は

「はい。」

「ええ。」

と返事をしてから

「不束者ですが、母娘共々よろしくお願い致します。」

と同時に答えたのだつた。少し不満げであつたが、仕方ないと思つたのであろう。その答えに

「ありがとう。それから、これからよろしく頼む。」

とま頭を下げと言つた。その後、伽耶が

「瑛里華だけ孝平と一緒にの種族でずるい！！私も神になつて孝平さんと一緒にいたい！！」

と言い出したので、俺が伽耶の頭に手を乗せて神力を流し込んで神にした。伽耶が神になる時に、瑛里華の時みたいに俺の力が増えると思つていたが、それは起こらなかつた。しかし、伽耶は吸血鬼の血を元々持つていた為、2000年の寿命が無くなつて殺されない限りは不老不死と言う娘と同じ状態になつたと聖王なのは調べでわかつた。こうして、俺は2人の美少女（一人は250歳を超えているけど、見た目は美少女だからという理由）と婚約する事となつたのであつた。

視点終了

キャラ設定

千堂伽耶

魔力値：測定不能（2億5千万）

能力：殺されない限りは死なない程度の能力、幻術を使う程度の能力、眷属を作る程度の能力、眷属から開放する程度の能力

デバイス：なし

この作品のメインヒロインの一人で千堂家の当主にして、瑛里華の母親でもある。また、孝平に恋してからは性格が変わった人でもある。東儀家に過去の事について謝罪してから、東儀家と和解した。その後、東儀家の人で眷属になった人達は彼女の能力により、人間に戻っている。ただし、紅瀬 桐葉だけは、遠隔操作でも届かない場所に居る為、眷属のまま。因みに、彼女は桐葉も孝平の妻にしようと企んでいるらしい。

第12話「交渉と説得」前編」（後書き）

伽耶様の性格を変えてみました。さて、次はプレシアさんの番です。

第13話「交渉と説得」後編」

孝平が、千堂家に行つて伽耶の説得をしている時、なのはもリリスを連れてフェイトと共に時の庭園に来ていた。

場所：時の庭園

視点：なのは

私はフェイトちゃんとリリスと一緒にプレシアさんに会いに、時の庭園に来た。理由は、フェイトちゃんに対する虐待を止めさせる事、そして、プレシアさんの願いを叶える事の二つ。プレシアさんの目的は、フェイトちゃんのオ리지ナルであり、お姉さんでもあるアリシアちゃんを蘇らせる事だ。そして、私にはそれが出来る。フェイトちゃんの時もそうやって説得して今、私は此処にいる。そして、いよいよこの次元のプレシアさんのいる部屋の前へとたどり着いた。「フェイトちゃん、大丈夫？」

と私は足を止めてフェイトちゃんを気遣う。それに

「うん。心配してくれてありがとう。なのは。」

と笑顔で言うフェイトちゃん。だけど、その笑顔にも影と言つか暗い感じがした。それを見た私は、早くフェイトちゃんに心から笑って欲しいと願い、プレシアさんのいる玉座の間の扉を開けた。そして、プレシアさんに対し

「母さん!!」

とフェイトちゃんが声を掛けて近づこうとする。だけど、私はそれを止めて、プレシアさんに対し

「始めまして、プレシアさん。私の名前は不破なのはと言います。貴女のアリシアちゃんの蘇生という願いを叶える為にやって来ました。」

と言う。私の言葉に、

「何故、私の望みを知っているの？それにしてもフェイト、貴女はジュエルシードは全部揃えたのかしら？」

と聞いてくる。それに対し、フェイトちゃんは辛そうな表情をしていたので手を握りながら

「何故かは後で詳しく話します。それとジェルシードは私や仲間達が全部揃えました。しかし、ジェルシードは使わないでアリシアちゃんを蘇生をします。」

と言った。それに信用できないのか

「信用できないわね。ジュエルシードを渡しなさい。」

と杖を向けてくる。だけど、私はそれに動じずに

「アルハザードの秘術の載っている魔導書を持っているとしても・・・ですか？」

と言う。するとプレシアさんが目を大きく開いて

「何ですって！！」

と驚く。それに止めとばかりに魔王の書を取り出す。そして

「ほら、これがアルハザードの秘術の載った魔導書”魔王の書”です。」

と言う。そして更に

「しかし、アリシアちゃんを蘇生させるのには条件が3つあります。」

と条件をつける。それに

「条件が3つ？」

と復唱するプレシアさん。それに

「はい。1つ目は私達の仲間になる事、2つ目は貴女の病気を治す事、そして最後の3つ目は、フェイトちゃんを娘として接する事です。一つ目はまあ、条件によるでしょうけど可能ですね？2つ目も知り合いに治せる人が居るので問題ないですね？問題のフェイトちゃんについてですが、生まれ方は違っても貴女の娘ですよ？それに復活したアリシアちゃんも、妹が出来たって喜びますよ？」

と言った。因みに、これらは孝平君から貰ったカンペを覚えて、そ

のまま言っているだけ。けれども、その言葉が効いたのか

「……わかったわ。条件を全て飲むわ。だけど、本当に大丈夫なの？」

と少し優しい声で聞いてきた。どうやら、狂気が抜けたようだ。その質問に、私は

「大丈夫ですよ。それよりも、今から蘇生させますので、早くアリシアちゃんの死体を持ってきて下さい。」

と早く死体を持ってくるようにプレシアさんに促す。すると、プレシアさんは玉座の間よりも置くにある所からアリシアちゃんの遺体を生体ポットから取り出して横たわらせる。それを確認した私は

「では、今からアリシアちゃんの蘇生を始めたので、離れてください。」

と言ってプレシアさんをアリシアちゃんの遺体から離れさせた。そして、スターゲイザーを取り出して私は呪文を詠唱し始めた。そして、詠唱が終わると

「アレイズ!!」

と魔法名を叫んだ。すると、アリシアちゃんの体が光だした。それから30秒くらいが経って、アリシアちゃんを包んでいた光が止んだ。そして

「うん？此処は……何処？」

とアリシアちゃんが目を覚ました。それにプレシアさんとフェイトちゃんが

「アリシア!!」

「姉さん!!」

とそれぞれがそう言ってアリシアちゃんに駆け寄った。そして

「お・かあ・さん？」

とアリシアちゃんがプレシアさんを見てそう言った。それに

「そうよ!!アリシア!!お母さんよ。」

と言い、泣きながらアリシアちゃんを抱きしめる。すると、痛かったのか

「お母さん。痛いよ。」

と痛そうな表情をして訴えた。それに

「あっ！ごめんなさいね。アリシア。それとね。アリシア、この子はフェイトと言ってるね。貴女の妹よ。」

と謝ってからフェイトを紹介した。そしてフェイトも

「始めまして、姉さん。これからよろしくね。」

と挨拶をした。それに

「うん。よろしくね。フェイト。」

とアリシアちゃんが嬉しそうにフェイトちゃんに挨拶をする。そして、プレシアさんはフェイトちゃんの方を向いて

「今まで、酷い事してごめんなさいね。フェイト。」

と泣きながら謝る。それに

「うん、うん。」

と頷いた後、フェイトちゃんは

「う、う、うわ~~~~~ん」

と泣き出してしまった。それをやさしく抱きしめるプレシアさん。

そんな3人の邪魔をしない為に、私はその間、玉座の間から出て、時の庭園から立ち去ろうとする。しかし

「待つて、まだお礼を言ってる無いわ。娘達を助けてくれて、ありがとう。」

とプレシアさんが私を止めて私にお礼を言った。それに対し

「蘇ってよかったです。では、全て落ち着いたらフェイトちゃん経由で連絡してください。治療できる人を連れて来ますので。じゃあ、行くよ。リリス。」

と言って私は、リリスを連れて海鳴市にある御神・不破家に戻るのがだった。

視点終了

その後、プレシアはアリシアに全てを話し、フェイトに虐待を加え

ていた事を怒られたという。その後、なのはを呼び出して、その事を伝えた。そして、同じく交渉と説得を終えた孝平を通信で呼び出して一緒に時の庭園に向かうのであった。

おまけ

人物・デバイス設定

ブレシア・テッサロッサ

年齢：70近く（孝平の時間操作により30代まで若返った。）

魔導師ランク：S（ただし限定ではあるがSSランク相当）

デバイス：原作同様の鞭になる杖

嘗ては大魔導師と呼ばれた人で、娘のアリシアの死によって人が変わった。しかし、なのはの説得とアリシアの復活により、元の性格に戻った。アリシア復活の為に時間を費やした為、体がボロボロとなり、更には末期の病気に犯されていたが、孝平の時間操作により病気になる前まで若返った。なのはと孝平にはとても感謝している。次元跳躍魔法の数少ない使い手でもある。その為、孝平やなのは、それにフェイトにその使用方法を伝授している。本人曰く、3人も筋が良いとの事。

アリシア・テッサロッサ

年齢：5歳（見た目だけで死んだ年齢を入れると、本当は30を超えていると思われる。）

魔力：なし

テッサロツサ家の長女だったが、一度プレシアが主動で行っていた新型の魔力炉実験の時に魔力炉が暴走を引き起こし、そのせいで死んだものの、なのはのお陰で復活を果たす。魔力の無い一般人で、プレシアの魔力資質を受け継げなかった。最近の夢は、なのはとフエイトと一緒に孝平のお嫁さんになる事と、魔力無しでも魔法が使える様になる事。

フエイト・テッサロツサ

年齢：9歳（実年齢は4歳くらい。）

魔導師：AAA

デバイス：バルディッシュ

テッサロツサ家の次女で、アリシアのクローン。プレシアに虐待されていたが、なのはのお陰でそれは止み、今では家族揃って仲が良いい。

最近の夢は、なのはとアリシアと一緒に孝平のお嫁さんになる事。

バルディッシュ

種類：インテリジェント

原作同様のデバイスではあるが、後に改造される予定。ただ、名称はバルディッシュ・アサルトではないし、形状も多少異なる予定。

鞭になる杖

名称不明のプレシアの杖型のデバイス。杖以外は鞭であることが判明している。しかし、それ以外は不明である。

第13話「交渉と説得」後編」（後書き）

次は、孝平とテッサロツサ家が会います。それと、アリシアとアリサとすずかのデバイスはプレシアに素材とデータを渡して造らせようと思います。それと、もしかしたらなのはの2つの卵が孵るかもしれません。

第14話「プレシア、若返る」

時の庭園に着いた孝平となのはは、先ず、挨拶をして孝平だけは互いに挨拶した。そして、プレシアの病を治す為に、時間操作を始めようとしていた。

「では、始めます。」

その言葉に頷く一同。そして、それを見た孝平はプレシアに虹色の球体を投げた。その瞬間、プレシアは光に包まれた。この光、実は孝平が特定に人物だけに時間操作を行う為のものだ。勿論、この光が無くて特定的人物だけにでも操作は可能だが、これが無いのとあるのでは制御面で違いが出てくるし、光が無いと成功率が低いという事でこの光を出したのだ。そして、その光に包まれたプレシアに対し、孝平が念を送るかのようになり始めた。それから2分後、光が無くなり、プレシアが出てきた。しかし、プレシアの顔を見た時、孝平以外は呆然としていた。そして、プレシアが

「どうしたの？孝平君以外は私を見て驚いているのだけけど？」

と孝平に聞いた。それを口で言うより見たほうが早いと判断し

「この鏡で、自分の顔を見てください。」

と言った。それに従ったプレシアは、自分の顔を見た。その瞬間、何故自分の顔を見て驚いているのかがわかった。そして、自分も驚いてしまった。何故なら、30代にまで戻っているからだ。その事を孝平に聞く。すると

「ああ、それはフェイト達と長い間居られるようにと思って業と30代にしました。」

と言った。それに

「そう・・・ありがとう。」

「いえいえ。で、これからどうします？」

「管理局に自首しようと思ってるわ。ジュエルシードを運搬していた船を襲撃したのは私だからね。」

と言つと

「……だめだよ（です）！！」

といつの間にか正気に戻っていたなのは、フェイト、アリシアの3人がそれに反対する。それに

「そうだな。それだと、管理局に利用されかねない。」
と孝平が同意した。それに

「そうだね。今の管理局は腐ってるからね。魔法文化の無いこの地球と月を狙っている位だし。」

となのはが言つと3人と1匹が「えっ！！」と言つ驚きの声を上げた。しかし、孝平はそれを無視して

「ああ、だからプレシアさん。貴女は管理局に捕まつてはいけません。そもそも、管理局のせいでアリシアが死んだようなものですよ？そんな組織に投降したら、最悪はアリシアも生き返つたと理由で、フェイトはクローンの成功例として実験台にされる可能性がありますよ？」

とプレシアに警告する。それに続き、なのはが

「それだけじゃないんですよ。今から話すことは、誰にも言わないで下さい。最悪、私や孝平君、それに私のお兄ちゃんが実験台にされる可能性があるの……。フェイトちゃんもアリシアちゃんもお願いできる？」

と少し厳しい表情で言つた。その厳しい表情にとても大事な事だと思いつつ

「……わ、わかつた（わ）。」「」

となのはの言葉に頷いた。そして、なのはと孝平、それと今はいないがなのはの兄である恭也が転生者で、なのはがどういった理由で死んだのかや前世で起きた事件などを自分の知る限りを話した。それを黙って聞いた3人は内心で（「やっぱり、（お）母さんを渡したらいけない。私達で守らなきゃ。」）、（管理局に投降するのやめて、管理局と戦おうかしら？でもどうやって……）等と考えていた。そこでなのはがその思考を呼んだかのように

「3人とも考え事しているみたいですが、少し良いですか？」

となのはが、考え事をしていた3人に対しそう切り出した。そしてそれに頷いてそれぞれ謝った。しかし、なのはは

「気にしてませんよ。それよりも、聞きたい事があるんです。」

と本当に気にしていないという口調で言った。それに3人と1匹が「「「聞きたい事？」」」

と復唱する。その反応に笑った後

「はい。私達は管理局と戦う事になります。でも、プレシアさん達は地球や月の住人ではありませんから巻き込むわけにはいきません。そ

こで質問です。貴方はこれからどうしたいですか？」

と真剣な表情で3人と1匹に問いかける。すると

「私達も戦う。だって、管理局に母さんを捕られたくないし、なのは達には恩があるからその恩を返したい。」

とフェイトとアリシアが同時に同じ事を言った。そして、小さい声で「それに、なのはと孝平と一緒に居たいしね」と呟いた。その事は、耳のかなり良い全員が聞いていてなのはと孝平が顔を紅く染めたのであった。因みに、プレシアの耳が良い理由は、孝平が時間操作の時に肉体や感覚器官を強化したからである。そして、それに驚きつつも

「フェイトがそういうんなら私も戦うよ。それになのはと孝平はフェイト達の恩人だしね。」

とフェイトの使い魔のであるアルフが言い、プレシアも

「そうね。それに管理局には借りがあるし、私達も手伝うわ。」

と協力の表明をした。それになのはと孝平は

「「ありがとうございます。」」

とお礼を言った。しかし、そこへ

「でも、どうやって管理局と戦うつもりなの？なのはちゃんが並行世界のとはいえ、管理局と関わり合いがあるならなのはちゃんは敵がどれだけ強大か分かる筈よ？」

とプレシアがなのはに聞く。すると

「問題ありませんよ。既に準備を始めてますし、戦力や要塞も俺達を転生させてくれた人に貰ってます。それに、戦力は聖王教会や管理局の良心ともいえる三提督達からも出してもらえるように交渉する予定です。後は地球と月に知らせる事も必要なのですが、それについても考えがあります。」

と孝平が言う。それに

「ちょっと待って！！三提督なら確かに受け入れてもらえそうだけど、聖王教会は無理じゃないかしら？」

とプレシアが聞く。しかし、孝平は余裕を持って

「大丈夫です。」

と言い切り、更には

「此処に聖王の末裔が此処にいますと知れば教会も動かざる得ないでしょう。」

と言う。それに反応してプレシアが何かを思い出すかのような仕草で考え出した。それから30秒が経ち孝平を見てから

「そういう事ね。貴方の言いたい事がわかったわ。」

と言った。そして

「でも貴方の自由が無くなるけど良いの？」

と聞く。それに

「問題ありませんよ。それに、聖王に為らないと、なのはやフェイト達が俺を取り合っちゃうでしょ？他にも嫁にしたい子が居るし。」

と言う。その言葉になのは、フェイト、アリシアが顔を紅くする。

そう、孝平はなのは達3人が自分に対して恋愛感情を持っている事を知っているのだ。そして、プレシアが少し考えてから

「成る程、そういう条件をつけるのね。」

と孝平の企みに気づく。しかし、アリシアがその企みがわからないとばかりに

「ねえ、お母さん。どう言うこと？」

と聞いてくる。他の2人と1匹も同じよう感じだった。それに気づ

いたプレシアは

「ああ、そうね。まず、聖王や聖王教会から話したほうが良いわよね？」

と孝平に聞く。それに頷いてから

「良いですよ。」

と言う。その返答を聞いて、プレシアは聖王や聖王教会について話し出した。

聖王は、大昔にベルカという国を造った存在であり、嘗て長い間続いた戦争を終わらせた英雄である事。聖王教会は、その聖王を神として崇める宗教組織であり、ベルカ関連のロストロギアを集めている場所でもあるという事。そして、プレシアが聖王や教会についての話が終わると

「これが、私の知っている聖王と聖王教会よ。そして、孝平君はその聖王の証を持っているの。つまり、聖王教会からしたら孝平君は神様だつて事よ。」

と言った。それに

「ええええええっ!!!!」

と驚くフェイトとアリシア。そこでなのは何かが閃いた様で

「ああ、成る程。そういう事か。」

と納得しだした。それに対して

「えっ!?!?なのはには分かったの?」

とフェイトが聞く。それに続いてアリシアとアルフが

「何か分かったの(かい)?」

となのはに聞く。その問いに

「うん。つまりね、分かり易くまとめると孝平君は、自分は神だから一夫多妻にしろと言いたいんだよ。そうだよ、孝平君?」

と答えてから孝平に聞く。その質問に孝平は

「ああ、聖王になるに当たって幾つかの条件を付けようと思っていた。そして、その1つが・・・」

と最後まで言おうとした時にアリシアが

「一夫多妻つて事？」

と正解を先に言ってしまった。それに苦笑を浮かべながらも孝平は「そういう事だ。」

と頷いて答える。そして

「話は変わるんだけど・・・プレシアさん。」

といきなり孝平が話題を変えてプレシアに話しかけた。それに

「何かしら？」

と答える。それに対し孝平は

「少し頼みたい事があるんだけど、良いですか？」

と聞いた。それに対し

「頼みたい事？まあ、良いわ。私に答えられることなら何でもするわよ。」

と興味がありそうにしながらも答えたプレシア。その答えを聞いた孝平は

「そうですね。なら、俺となのはとフェイトに次元跳躍魔法を教えてください。」

と頼み込んだ。それに

「・・・ええええ」「・・・」

と驚いたのはプレシアではなく、なのは、フェイト、アリシア、アルフであった。そして、プレシアは最初は驚きはしたものの直ぐに冷静になって

「あんな負担を掛けるものをどうして？」

と聞く。その答えとして

「管理局を効率よく潰す為にも必要だからです。それに、俺は既人ではなく神ですからある程度なら耐えられますし、2人もデバイスに頼れば負担は減らせると思いますし。」

と言った。すると、数分待ってから

「良いわ。教えてあげる。」

と言う答えがやってきた。それを聞いた孝平は

「ありがとうございます。よろしく願います。」

と礼を言った。そして、なのはとフェイトも

「よろしく願います。」

「ありがとう。母さん。」

と続いたのであった。

こうして、孝平、なのは、フェイトはプレシアから次元跳躍技術を学び始めるのであった。

第14話「プレシア、若返る」(後書き)

すみません。今回は龍は生まれませんでした。龍は、次回で生まれます。それと、珠津島である事を伽耶が家族や東儀家に対して発表します。

第15話「3柱の神と2匹の竜の誕生」

孝平、なのは、フェイトの3人がプレシアから次元跳躍魔法の技術を学び始めて2日、孝平となのはは高速学習と完全記憶能力により完全に次元跳躍魔法技術を会得していった。その事に、フェイトとアリシアがかなり驚いていた。フェイトは物覚えが良いが、それでもまだ習得までには至っていない。そして、そんな頃、アリシアが魔法を使いたいと言いだした。孝平たちが理由を聞くと

「私も孝平、母さん、フェイト、アルフ、なのはと一緒に戦いたい。」
「
と言ってきた。その言葉にプレシアは

「アリシアが魔法は使えないでしょう？我慢なさい。」
と反対する。それでも

「やだ！！守られるばかりは嫌だ！！」
と駄々を捏ねた。その結果、孝平は

「良いよ。ただし、どちらかを選べ。人を捨てて神となり魔力を得るか、特殊なデバイスを使って魔法を使えるようにするか、どちらかをな。」

と言った。その選択に疑問を持ったプレシアは

「神なる？そんな事が出来るの？」
と孝平に聞いた。すると

「出来ませんよ。ただし、位としては俺よりも下となりますがね。因みに、神になることを選んだ場合は、俺と居られる時間がほぼ永遠になります。多分ですが寿命がなくなりますから。」

と孝平は答えた。その言葉に、アリシアは
「神になりたい。」

と少し考えた上で真剣な眼差しで孝平を見つめる。そして、アリシアだけでなくフェイトまでも

「私も神になつて孝平たちを支えたい。」

と言い出したのだ。その言葉に驚く一同だったが、孝平は

「わかったよ」

と了承してから

「でもその前に、プレシアさん。貴女は自分の娘達がこう言ってますがどうします？ 反対ですか賛成ですか？ それと、貴女自身はどうしますか？」

とプレシアに聞いた。その問いにプレシアは

「2人は反対しても立ち止まらないわ。それに2人がそう言うのであれば仕方ないわ。これは2人が決めるのであって私が決める事では無

いわ。それと、私は十分に生きてたわ。だから、人間のまま生きる事にするわ。」

と答えた。その答えにフェイトとアリシアは残念そうに俯いてしまった。しかし、直ぐに顔を上げて今から神になりたいと言い出したのだ。その言葉に孝平は2人の頭に手を乗せて神力を注ぎ始めた。その時に、2人は光りだしたが、神力を注ぎ終わると直ぐに収まった。そして、2人の雰囲気は以前とは違い神々しいものであった。そして、その事にお礼を言うフェイトとアリシアだった。しかし、アリシアはそれだけではなく、更にプレシアに次元跳躍魔法技術を教わりたいたいと言い出したのだ。プレシアは身内にかなり甘い為、アリシアも教える事にしたのであった。

一方、珠津島の千堂邸の離れの和室では、伽耶が娘の瑛里華とその兄である伊織、そして東儀家を、大事な話があると言って、集め出したのだった。その時に、伽耶と伊織が喧嘩をし始めたが、東儀家本家の長男である征一郎と瑛里華が止めた。そして全員が集まると「さて、揃った様だな。これから大事な話があるから心して聞くように。」

と言い出した。その言葉に

「へっ！！どうせ下らない事を考えてんだろ？」

と伊織が口を出す。その言い様に伽耶が

「何を、貴様はいつも余計な事や下らない事を言うのではないか！
！この失敗息子っ！！」

と怒り出し口論となった。しかし、それも征一郎と瑛里華に止められて収まった。そして、怒りを抑えてから

「さて、皆に集まって貰ったのは、ある事を発表するので聞いてもらいたいからである。皆のもの、心して聞くが良い。」

と言って、本題に入り始めた。そして、その内容を語り始めた。

支倉孝平という神によって自分と瑛里華が神になった事、そして、その孝平に2人が将来嫁いで異世界に行く事を話した。その時に

「良くアンタみたいなのを貰う物好きが居たな。」

と伊織が茶々を入れて喧嘩になったが、瑛里華に

「母様、そんな事で怒っていても孝平君に嫌われますよ？」

と言われて止められる。そして、気を取り直してから伽耶は、その時の間は留守を頼むと言った。その言葉に力強く頷く東儀家一同に「ありがとう。」

と言って頭を下げる伽耶に、東儀家や瑛里華は感動した。そして、それから少し仕事の話や雑談をしてから、千堂家と東儀家の話し合いは解散となった。

その二日後の夜、御神・不破家では、聖王なのはから貰った卵が孵っていた。その時に寝ていたなのはを見て、2匹は母親だと思い込み寝ているなのはに甘え始め、なのはが起きて驚いてしまい、その事が原因で家族全員が起きてしまったと言う事件が発生したが、直ぐにそれは収まり、翌日にはなのはと遊んでいる姿が見られた。そして、そこに聖王なのはが現れて大人になってもなのはには従順となるような術式を施して去っていったという事も起きて、その時からなのはに従順な姿が見られるようになったと言う。

そして、その翌日の昼ごろ孝平はミッドチルダにあるマリン・ガーデンに来ていた。

場所：マリン・ガーデンの海底遺跡内部

視点：孝平

俺は今、マリン・ガーデンの下にある海底遺跡の中にいる。何故此処にいるのかというと、此処に眠っているとされるイクスベリアを助ける為だ。どうやって此処が分かったかというと、俺達3人が並行世界に行った時、高町士郎さんがイクスベリアを保護して養子にした事を覚えているだろうか？その時に、俺は士郎さんや聖王なのからミッドについてのデータを貰っていたので、それを使って、今此処にいるのだ。そして、しばらく歩いていると、ベッドに横たわっている少女を見つけた。そう、その少女こそ、俺が探していた冥府の炎王”イクスベリア・ガレア”なのだ。俺は、イクスベリアにアルハザード式の目覚まし魔法であるザメハを使用して、彼女を目覚めさせたのだった。

視点終了

視点：イクスベリア

私は、長い間ずっと眠り続けていた。その間に、私の故郷であるベルカの地は滅んでいた。そして、私はミッドチルダと言う世界で、静かに眠っていた。しかし、そこへ何者かによって強制的に起こされた。私は、目を開けて眠りを妨げたであろう人物を見ようと思いつつも目を開けた。すると

「おはよう。冥府の炎王”イクスベリア”。」

と言う声がした。私はその声がした方を向いた。しかし、私はその瞬間、我が目を疑った。何故なら、私の目の前に居たのは、ベルカ聖王家の証を持った少年だったからだ。私は

（そんな！！聖王家は既に消滅しているはず）

と驚きつつも

「おはようございます、聖王陛下。私に何か御用ですか？」

とベッドから起きて挨拶をした。すると、聖王の証を持った少年が「君をマリアージュという枷から助けに来たんだよ。」

と言ってきた。私は意味が分からなかった。それに、マリアージュと言っ運命からは逃げられない。だから

「そんな事が出来ると思っているのですか？」

と聞いた。すると

「出来るさ。だけど、代償として君は人間ではなくなり、神として生きていく事になる。そして、君は神になる事によって、不完全な不老ではなく、完全な不老を手にする事が出来るし、マリアージュ生成機能を失くす事が出来る。」

と言ってきた。私は驚いたけど、直ぐに気持ちを切り替えてから

（それが本当ならやりたいけど、どうやって？）

と思った。なので

「でもどうやって？何かの実験か何かですか？」

と彼に質問する。すると、彼は首を横に振ってから

「違うよ。俺は神でね、能力として人や人外を神にすることが出来るんだよ。それと、マリアージュのコアを遠くに居ながら壊す能力もあげるよ」

と言ってきた。私は、その言葉によって

（虫が良すぎるような気がしますますが彼が嘘を言っている様子は無いですし、信じてみましょうか。）

と考えた後に

「分かりました。ではお願いします。幼き聖王陛下。」

とお願いしたのだった。

視点終了

こうしてイクスベリアは神となり、マリアージュを生成する機能を失った。ただ、マリアージュがまだ残っている事を知っていたイク

スベリアは、孝平から与えられた能力によって残っているコアや新しく出来たマリアージュを全て破壊する事に成功する。その後、互いに自己紹介しつつ、一旦海底遺跡から出てから今の空と大地を見せた。すると

「孝平！！凄いです！！空も海もこんなに澄んでますよ！！」

と言って驚いていた。それを聞いた孝平は

（サウンドステージXの時みたいに驚いてるな）
と思いつつ

「そうだね。もっと見せてあげるよ。」

と言い、孝平はイクスベリアと一緒に転移魔法を使って地球に帰還したのだった。帰還した孝平は、家族に事情を説明し、支倉家で住める様に頼み込んだ。すると、意外にもそれは受け入れられてイクスベリアも支倉家で暮らす事となったのであった。

おまけ

キャラ設定

イクスベリア・ガレア

種族：神

魔力値：測定不能（1億）

能力：マリアージュやコアを破壊する程度の能力、不老

デバイス：なし

古代ベルカの戦乱期から存在している王で、冥府の炎王と呼ばれていた。書物などでは悪い事しか書かれていなかったが、本人は至って優しい少女である。孝平の婚約者の一人となる。嘗ての経験の為、戦争が大嫌い。しかし、管理局の腐った現状を知って戦う事を決意

する。支倉家に住む事になる。

変更や追加設定

フェイト・テッサロッサ

種族：神

魔力値：測定不能（9千3百万）

能力：雷を操る程度の能力

孝平によって神になった。姉のアリシア同様に孝平の婚約者の一人。

アリシア・テッサロッサ

種族：神

魔力値：測定不能（6千万）

デバイス：なし

能力：不老、一度だけ死んでも蘇る事が出来る程度の能力

孝平によって神になった。妹のフェイト同様に孝平の婚約者の一人。

なのはの召喚竜

アルバボロス

孵った竜の一匹で、元ネタは、主にモンスターハンター3のアルバトリオン。ただ、角が違っており、ディアボロスの角に似た角を持つ。しかし、まだ生まれたばかりなので、角も無いし体も大きく無い。大きくなると、超強力な氷、炎、雷、風のブレスを放つ。また、地中を移動する事も出来、風や炎を鎧のように纏う事が出来る。かなり強大な力を持った竜なのだが、聖王なのはの力により主の不破なのはには従順。

カオス・バハムート

孵った竜の一匹。此方もかなり強力で、聖王なのはの力により不破なのはに従順。

広域殲滅が可能なブレスの毒の息”ポイズンブレス”と泡の息”アクアブレス”と毒泡の息”ポイズンアクアブレス”とオメガフレアがかなり強力で、体からも毒を発する事が出来る他、水中も移動できる。その他の攻撃方法や属性のブレスが存在する。成体の大きさは、アルバポロストよりも大きい。元ネタは主にFFの竜王バハムート

第15話「3柱の神と2匹の竜の誕生」(後書き)

なのはも神にしたいのですが、それはもう少し後になります。

第16話「聖王教会とスカリエッツィのアジトと本局」

イクスベリアが支倉家に暮らすようになって1週間が経過した。その頃には、孝平とイクスベリア（此処からはイクス）は互いに孝平さん、イクスと呼び合うようになっていた。そして、その頃にはイクスは地球での暮らしにも慣れて日本語も旨くなり、漢字もある程度は書ける様になっていた。更には、管理局の存在や今のあり方を聞いて

「本当は嫌ですけど、私も戦います。」

と決意をして魔法と御神流を習い始め、今では孝平と模擬戦闘をしている姿がよく見られるようになっていた。それに、孝平のあり方を見て孝平に惚れて、それが孝平が分かるほどの態度だったので、孝平から告白した。勿論、この後の事や計画を全て話したが、それも受け入れられ、結婚を約束したのであった。そんな時、孝平のデバイスを造り終えたセラフイムから三提督や聖王教会との交渉は成功して、聖王である孝平に一目会いたいという話があった。そして、孝平はイクスを連れて聖王教会と三提督に会いに行く事を決めたのであった。孝平とイクスは、ミッドのある場所でセラフイムと合流した。そして、イクスとセラフイムは初対面だったので、自己紹介を済ませ、孝平は頼んでいたレイジングハート改めゲベル・ガンエデン（AIは使える記憶だけを残して後は取り外してナシム・ガンエデンの為に保存してある）とその仕様書や機能についてかかれてある紙を受け取った。

場所：聖王教会

視点：孝平

俺とイクスは、セラフイムや教会のお偉いさんに案内されて聖王教会の本拠地へと来ていた。聖王教会のお偉いさんたちに挨拶をする為だ。その後、三提督との話し合いもあるのだが、そちらは明々後

日で構わないらしいので、此方を優先しているという訳だ。

そんなこんなで教会の内部の廊下を歩いてきた俺達だったが、案内していた1人とセラフィムが1つの扉の前で立ち止まった。どうやら、此処にお偉いさん達が集まっているらしいと思っただ時、案の定「では、聖王陛下、お入り下さい。」とお偉いさんに言われた。なので、俺は言われた通りにお偉いさんによって開けられた扉から中に入ったのだった。

中には、まだ幼く、緊張した騎士カリム等がいて少し和んだが、他は大人ばかりであった。そこへそのお偉方が全員、俺とイクスの方に向かって歩き出し、その中で先頭にたった人物が

「ようこそ聖王陛下、よく遠路遙々お越しくございました。私は聖王教会教祖のフリート・フォン・シュヴァイゼンと申します。」と俺に挨拶をしてきた。なので、俺も

「ああ、ご苦労だった。俺は地球から来た支倉孝平。貴方方がご存知のように聖王を受け継いだ者だ。そして、横にいる少女は俺の婚約者の1人と考えている、イクスベリア・ガレアだ。嘗て、古代ベルカで冥府の炎王として恐れられてきた少女だ。」

と自己紹介とイクスに紹介した。その俺の言葉に、周りがざわめきだしたが、直ぐにそれは収まり

「まあ、その事については後々教えてもらうとして、今日は長旅でお疲れでしょう。ごゆっくり為さって下さい。」

と言っただ。それに俺も

「ありがとう、ではそうさせて貰うよ。」

と返し、イクスも

「ありがとうございます。」

とお礼を言うのであった。その後、俺とイクス、セラフィムは豪華な料理やデザートでもてなされ、俺とイクスは婚約者と言う事もあり、豪華な寝室で一緒に寝る事となり、セラフィムは別部屋で寝る事になった。

翌日、俺とイクスとセラフィムは新しいベル力を建国する事を約束する代わりに、地球が俺の生まれた聖地であるという事を認めさせたり（目的は、聖王教会が地球に攻め込めない様にする事と管理局が地球に攻めてくる時に妨害してもらおう為だ。）、一夫多妻という条件などの話し合いをしてから、カリムと世間話をしてから俺達は聖王教会をお偉いさん達に別れの挨拶をしてから聖王教会を出たのであった。因みに、その時のカリムの表情は、昨日とは違って緊張してはおらず、代わりに俺を見ては顔を紅くしたりして可愛かった。

場所：ゆりかごのある洞窟

聖王教会を出た俺達は、ジェイル・スカリエッティの本拠地であるゆりかごのある洞窟に気配と魔力を消して入っていった。目的は、原作で聖王教会の汚点の1つである原因を作った女が此処の人間なので先に潰しておこうと言うことである。本来は、管理局と一緒に潰すつもりだったのだが、俺が聖王教会の最高権力者になる事を約束した以上、早めにそういった不安材料は取り除きたいと思ったからである。最も、このことが原因でヴィヴィオは生まれなくなるのは残念だが、仕方ないと思い、感情を無理やり押さえ込んだ。少し歩いていると、そこには多くの生体ポッドが左右に並べられており、そこには何十人かの人間がその生体ポッドの中に入れられていたのであった。俺達は、その生体ポッドの集まった部屋より奥に進んで、まずは屑のジェイル・スカリエッティと、同じく屑の戦闘機人のN04のクワットロを暗殺する為に動き出した。そうすれば、後の戦闘機人には、精神や記憶を少し弄ってやれば悪い事はしなくなるだろうし、N02のドゥーエもジェイルの命令だとN01のウーノを使って此方におびき出せる。それに、生体ポッドの中にいる人達を助けられるからだ。すると、向こうから話し声が聞こえた。大体、100メートル以上は離れているが俺達は人間よりも全ての感覚器官が優れている為、こういったことも出来るのだ。そして、その話は、俺達が暗殺しようとしているジェイル・スカリエッティとクワ

ツトロ、ウーノ、チンク、トーレの2番以外の戦闘機人が何やら話し合っていた。しかし、孝平達はその会話には興味が無く、直ぐに行動を開始した。先ず、孝平とセラフイムが人間を遙かに超える速度（神速も使用）でジェイルとクワットロの後ろに、それぞれ回りこんで首を刎ねてから直ぐに神速を使って姿を消した。その事によって俺達が居ることがばれたが、直ぐに待機していたイクスと一緒にトーレ、チンク、ウーノの後ろに回り込んでから首に手刀で軽く気絶させた。その後、俺はこの時の為に聖王なのはと一緒に開発していた機械と人を融合させる魔法を使って3人をエヴォリューダにした。勿論、エヴォリューダーの元ネタは、某勇者王なのだがこの際その事はどうでも良い事だ。それよりも生体ポッドの中に居る人々を助けるのが先だと判断して俺はセラフイムに

「セラフイム、悪いけど此処のコンピュータを使って今すぐポッドから出せそうな人を探してくれ。」

と命令を下す。セラフイムは、俺の命令を聞いて「分かりました。」

と答えた。すると、イクスも

「私も手伝います。」

と言ってセラフイムと一緒にコンピュータを動かし始めたのであった。俺は、その間にエヴォリューダにした3人を、ハルケギニア式のレビテーションを使って手術室に連れて行った。因みに、手術室はゆりかごの物なので並行世界のゆりかごと同じ場所にあったので直ぐに分かった。

そして、俺は

「さて、始めるとしますか。」

と言いながら、3人の精神をそれぞれ一人ずつ弄り始めたのだった。視点終了

その後、孝平は3人の精神を真面目で優しい性格へと変えてた。そしてウーノにドゥーエにアジトに戻るように命令した。その間に、

孝平は、イクスとセラフイムに調べさせていた直ぐにでもポッドから出せる人間をポッドから出した。その中には、サイコドライバーの力と、強大な魔力と人外としての力を狙われて捕まっていたイルイが居たので前世で第2次と第3次のスパロボをやった事のある孝平は何故此処にいるのかと驚いてしまった。その他にも、捕まっていた実験台にされていた人も居たので、その人達は時間操作で改造や実験される前の状態に戻してから聖王教会に引き渡した。しかし、イルイの力を利用されるのを恐れてイルイだけは孝平達で引き取る事にした。そして、数時間が経過してからドゥーエらしき気配があったので、孝平が空間転移でドゥーエの後ろに現れて気絶させた。その後、エヴォリューダにし、精神を弄ってからまた管理局にスパイとして送り出したのであった。そして、孝平達は、セラフイムを除いては全員寝る事となったのであった。

翌日、孝平達は元スカリエッティのアジトをトールレ達に任せてアジトを後にした。そして、管理局本局の内部を变身魔法を使って入り、セラフイムの案内により三提督の居る部屋に向かった。因みに、セラフイムは実力があるとして管理局の一尉の地位を手に入れていた。だから、セラフイムが居る事によって怪しまれずに本局を移動できるのだ。そして、孝平達は三提督のいる部屋についてセラフイムが特殊カードキーを使って部屋を開ける。この三提督の部屋は、特別な人物にしか入れないようになっていて、渡されたカードキーでないと部屋に入れないのだ。しかし、セラフイムは始めて三提督に会った時、一時的にその機能を麻痺させた事で入り込む事に成功して交渉にも成功し、カードキーも渡されたのであった。そして、セラフイムが

「失礼致します。セラフィス・ペンドラゴン、入ります。」
と言って中に入り、その後孝平とイクスが続く。そして、2柱と1機が入ると扉が閉じた。因みにセラフィス・ペンドラゴンと言う

のは管理局に入局する為の偽名である。そこへ

「ああ、ご苦労じゃった。」

と黒い制服を着た老人が言い、それに続き白い服を着た老人が

「それより、早く座って。・・・貴方達もね。」

と言った。その言葉に

「・・・はい。」

と返事をしてから孝平、イクス、セラフイムが座り、序に変身魔法も解除する。そして、互いに自己紹介してから本題に入り始めた。

その内容は、孝平がある人物に頼んで、地球や月に次元世界や管理局の事を知らせる事や、管理局との戦いに勝利した暁には欲しい世界等について話し合われた。結果、孝平達の考えが三提督の考えと殆ど一致した事のお陰で殆ど通った。しかし、貰う世界については、マウ克蘭と言う原作でルーテシアとが隔離された開発中の世界と言う事となった。こうして、孝平達は一度ミッドで手に入れたアジトに戻り、イルイを連れてミッドチルダを後に、地球に帰還したのであった。

おまけ

イルイ・ガンエデン

種族：人造神

魔力値：EX

能力：不老、肉体年齢を好きに設定できる程度の能力

デバイス：なし

スカリエツティに捕まっていた少女で、孝平に助けられた事によって孝平に惚れる。見た目は10歳前後である。尚、本来はイルイだけなのだが、孝平から聖王としてガンエデンと言う家名を与えられた。

カリム・グラシア

種族：人間

年齢：15

魔力値：S

能力：プロフェーティン・シュリフテン（簡単に言えばよく当たる程度の占い程度の未来予知）

聖王教会に所属している預言者で、孝平に惚れる。

自動人形

セラフィス・ペンドラゴン

魔導師ランク：S（リミッターを掛けて偽造している）

デバイス：エクスカリバー

騎士甲冑：f a t eのセイバーの戦闘服と同じ物

管理局に入って内情を探る為に入局したセラフィムの偽名であり、ランクや魔力値も偽造している。

管理局では不敗の姫騎士との二つ名で呼ばれている。

第16話「聖王教会とスカリエッツィのアジトと本局」(後書き)

ナンバーズについてはいつか設定を載せます。それと、思い切つてスカリエッツィとクワットロを殺してしまいました。2人とも性格が私的に駄目だったのと、技術的には此方の方が上で、シルバーカーテンもアスレスがあれば誰でもシルバーカーテンの様な事が可能だからです。それと、イルイを出しました。ぶっちゃけた話、私が好きなキャラだからです。

第17話「3冊の魔導書の覚醒となのはの魔神化」(前書き)

今回は何時も以上に短いです。

第17話「3冊の魔導書の覚醒となのはの魔神化」

視点：孝平

俺とイクスとセラフイムがイルイを連れて地球に帰った翌日、セラフイムは管理局の方に戻って教導官の仕事に戻っていった。セラフイムは、原作のなのはが働いていた教導隊で教導官として働いている。昨日までは休暇をとっていたので俺達を案内できたのだ。しかし、今日からは管理局での仕事をしなければならぬのだ。どうして、セラフイムが教導隊を選んだかと言うと、少しでも張り合いが欲しいのとあわよくば此方側にも引き抜こうと言う魂胆だった。その結果、本局では46人が仲間となった。これは若手やベテランを入れての結果だったが俺はそれに満足した。しかも、驚いた事にティアナ・ランスターの兄であるティーダがその中にいたのだ。そのティーダは、前世での知識では死んだ事になっている。だから、俺はセラフイムに頼んで特殊なデバイスを造ってもらい、それをティーダに渡すように通信で頼んだ。その特殊なデバイスとは、改造型のAMFと自動回復魔法とオートプロテクションを発動できる物で、SSS以上の力を持った魔導師で無い限りは彼は死なないだろう。その他にもリンディ、クロノ、レティと言った原作キャラも、三提督の説得もあり、此方側となった。地上では、セラフイムが密かにレジアスの説得をしてくれたお陰で、かなりの人数が味方してくれるようになった。その中には、ゼスト隊や、その部隊員のクイント・ナカジマの夫であるゲンヤ・ナカジマの姿があったと言う。それ以外の出来事では、イルイが俺が助けたと言う理由で惚れて、俺の家に住むようになった。まあ、それは良いとしよう。元々俺もそう思っていた事だからな。しかし、問題が出来たのだ。それは、イルイとイクスが俺の取り合いで口喧嘩をし始めることだった。例えば、俺の隣に座るのは私だとかどっちが俺の事が好きかとかだ。しかも、それが昨日の夕食から始まったのだ。その時は、俺がじゃ

んけんで順番決めてから交代でならば良いと言って収まった。その結果、イルイ、イクスと言う順番となった。イクスは不満そうにし、イルイは喜んで俺に抱きついてきたりと大変だ。しかも、そのことが原因でイクスが俺とイルイに殺気を込めると言うおまけ付だ。さて、そんなこんなで俺は忙しい朝を送り、魔力と気配等を消してから学校へと向かっていった。消す理由？そんなのは2人、若しくはイルイが付いてくるからに決まっている。そして、俺は学校に着いて何時も通りに授業を受けて普通に寄り道せずに帰宅した。しかし、その後が修羅場だった。何故なら、イクスとイルイが玄関に入った所で待ち伏せして怒っていたのだ。それも気配やら全て消して。そして、イルイが

「どうして私達を置いていったのかな？学校と言う所に行くならどうして私達に言わないの？」

と怒った口調で言う。それに対し俺は

「学校についての説明をする時間がなかったしな。その様子だと母さんが教えてくれたんだろ？だったら良いじゃないか。」

と言うってこの話を無理矢理終わらせようとした。しかし、そこへ「良くありません。確かに孝平さんの言う通り、時間がなかったのは事実です。しかし、どうして気配や魔力、その他諸々を消す必要があったのです？」

とイクスが俺を責めながらそう聞いてきた。俺は

（は、だから強制的に終わらせようとしたんだ。それにこいつら特にイルイは学校と一緒に行くと言い出しかねないからな。）

とも思った。そこに追い討ちを掛けるかのように

「もしかして、私とイルイが学校についてくる、若しくはそう言うと思ったのですか？特にイルイが・・・。」

と俺の心を見透かしたように言ってきた。俺は、それを頷いてから「ごめんな。でも、お前らは学校に通ってなかったし興味があるだろうと思ったんだ。それに、こっちの戸籍が無いだろ？戸籍が無いと学校に入れないからな。」

と謝りつつ言い訳をした。それに

「そっか、なら仕方ないね。」

「そうですね。なら仕方ないですね。」

と2人が引き下がった。しかし、念のために

「そうか。じゃあ、くれぐれも認識阻害や幻術使って学校に来ないでくれよ?」

と言っておいた。そして

「でも、どうしても学校に通いたいのなら今すぐにも言ってくれ。と言つか欲しいだろうな?」

と言うと、2人は頷いた。なので

「わかった。なのはあたりに聞いてみる。」

と言った。すると、イルイとイクスが反応し

「私達以外にも女が居るの(ですか)!?」「」

と鬼気迫る迫力で聞いてきた。それに

「うん。でもちゃんと全員で結婚できるようにするから大丈夫。」
と言って2人を俺の側まで招いて抱きしめるのだった。こうして、

俺はなのはのコネでイクスとイルイの戸籍を作ってもらった事となったのだった。

数日後、なのはのコネでイルイとイクスの戸籍を作ってもらったことが出来た。しかし、その時に

「また、婚約者が増えたの!？」

と驚かれてしまった。まあ、怒らないだけマシと判断してなのはに謝って許してもらった事が出たのであった。

視点終了

それから2ヶ月が経過し、6月になっていた。そして、そんなある日、夜天の魔導書が眠りから目を覚まし、それに呼応するかの様に孝平の聖王の書となのはの魔王の書の全機能が管制人格を含めて完

全に目覚めたのであった。そして、なのはの所では、なのは自身にも変化が出て家族に驚かれてしまった。それもそのはずで、なのはの髪は金色に染まり、瞳は赤くなり、背中には6枚の蝙蝠の様な羽がついたのだ。驚かないはずが無い。その日は学校があるので変身魔法を使って登校したが、直ぐに魔王の魔導書の管制人格であるエクスレンに聞いた所、なのはは魔導書の名前通りの魔王となったとの事であった。その事は、リリース経由で孝平たちに直ぐに伝わった。そして、なのはは孝平に神にしてくれる様に頼んだのだった。こうして、なのはも神となり、改めて支倉孝平ラバーズに参加するのであった。

おまけ

人物設定

不破なのは

種族：元人間、元魔王、魔神

魔力値：測定不能（3億8千）

追加能力：不老、霊力と妖力（どちらもEX以上）、眷属としてアインストシリーズを呼び出せる

魔王の書の完全覚醒により魔王となったが、その後は孝平に神にして貰った。しかし、その姿から神ではなく魔神と思われる。

魔王だった時の容姿は、金髪にそめて赤い瞳にし、更に6枚の蝙蝠の羽が付いていた。

神の時は金髪の所は一緒ではあるが青と赤のオッドアイとなり、背中の羽も右が天使の羽で左が蝙蝠の羽が3枚づつあると言う魔王であつた時の力や能力、羽がまだ残っている。また、光と闇の両方の力を持つ存在で、何故か幽霊等も見れるようになった。孝平の婚約者の一人でもある。

デバイス設定

聖王の書追加設定

管制人格：キョウスケ

魔王の書追加設定

管制人格：エクセレン

キョウスケ

魔力値：SSS

聖王の書の管制人格で、珍しい男性型のユニゾンデバイスであり、無口で無愛想である。

容姿はスパロボシリーズのキョウスケ・ナンブ

エクセレン

魔力値：SSS EX（なのはが神になった時の変化）

魔王の書の管制人格で、主であるなのはが神になる前は無口で無愛想であつたが神になった後はかなり喋るようになり、愛想もかなり良くなった。それに目も赤から青になった。

容姿は、なのはが神になる前はアインスト側に居た時のエクセレン・ブロウニングで神になった後は連邦軍に居る時のエクセレン・ブロウニングである。

第17話「3冊の魔導書の覚醒となのはの魔神化」(後書き)

次回からは、管理局の事を知らせるのが近くなってきたので、はやてを完全な形での夜天の王にしようと思います。それと、グレアムには死んで貰う予定です。

第18話「現聖王と現夜天の王」（前書き）

誤字は直したつもりですが何か誤字があったら教えてくださるとありがたいです。

第18話「現聖王と現夜天の王」

なのはが闇の力を持った神となった翌日、孝平となのはは海鳴にある図書館に来ていた。

場所：図書館

視点：孝平

俺はなのはと一緒に調べ物をするのと八神はやてを探す為に図書館に居た。そして、そこにはさすがの気配が誰かの気配と一緒に居た為、八神はやてかと思いい、さすがの元に行く事になった。そして「やっぱりもう1つの気配ははやてだったか。」

「うん。でも変だね。」

「変?・・・ああ、今はまだ話して無い時期って事か?」

「うん。とりあえず話しかけようよ。」

「そうだな。じゃあ行くか。」

と言う会話をして俺達は2人の方に歩み寄り

「よっ!さすが、久しぶり。」

と手を上げて小声で言った。すると

「あ、孝平君になのはちゃん、どうしたの?こんな所で。」

とさすがが小声で聞いてきた。それに

「すずかちゃんの姿を見かけたから声を掛けただけだよ。」

と答えるなのはに

「そうなんだ。」

と答える。そして

「あ、はやてちゃん、この子達が話していた支倉孝平君と不破なのはちゃんだよ。こっちは「知ってるよ。八神はやてだろ?」

「・・・!!!..そうだけど、何でしてるの?」

「そ、そや!!何で知ってるんや?」

「知ってるよ。なのはは特にな。」

「うん。前世での友達だもん。」

「前世？」

「ああ、すずかには話したんだけど、俺達は転生者でな。特にこのなのは前世では並行世界のなのはやってたんだ。」

「だから私の事を知ってたんか。納得や、だけどそんな事私に話してもいいんか？」

「ああ、良いんだよ。夜天の書・いや、闇の書の主。」

「・・・なんで、知ってるん？もしかしてあの子達に・・・」

「いや、なのははこの世界では蒐集はされて無い。それよりもこの事は出来ればなのはとすずか以外には聞かれたくない。続きは君の家で良いか？」

「ええよ。すずかちゃんはどうするん？」

「うん。お邪魔じゃなければ行くよ。」

「なら行こうか。」

と言う会話をして俺達ははやての家に行く事になったのだった。

数十分後、俺達ははやての家に到着した。そして、家の中からは2つの魔力を感じ取れた。俺となのははそれに対しヴォルケンリッターのヴィータとザフィーラだろうと思いつつも家の中に入っていた。

「ただいまや。さあ、皆入って。」

「とはやてが言つて玄関を上がる。それに続き」

「お邪魔します。」

と俺達が言つてはやての言う通りに玄関に上がった。すると

「はやて!」

と小さな影が部屋から飛び出してはやてに抱きついた。ヴォルケンリッターの鉄槌の騎士ヴィータである。そして、そのヴィータは俺達に気づくと

「はやて、こいつ等は？」

と言って来た。それに反応したはやては

「こらっ！ヴィータ！！お客さんに何て口聞くんや！！皆に謝りい
！！」

とヴィータに怒った。すると

「わ、わかった。・・・ごめんなさい。」

とはやての言う通りに謝って来た。それに対し、俺たちは全員で

「「「気にしてない（よ）（よ）」」」

と口を揃えて言った。それに

「ありがとな。で、さっきの続き何やけど、前世でなのはちゃんが
蒐集されたって、向こうの私は止めなかったんか？」

とはやてがさっきの続きをし始めた。それにヴィータは

「はやて、どういうこと？あたし達は蒐集してないよ。」

と言う。それに

「少し黙っててな、ヴィータ。」

と黙らせた。そして、俺は

「いや、止めはしたが内緒で蒐集してたんだ。まあ、この世界では
まだ全く蒐集してないけどな。」

と言うと、はやてはホッとしたような顔を見せる。しかし

「だけど、向こう側でははやての病気と言うか麻痺がかなり進んで
いてな。それが原因で止むを得ない状態だったんだ。だから、この
まま何もしなければ同じことが起こるぞ？まあ、それを何とかする
ことはできるけど・・・聞きたい？」

とはやてに忠告と質問をする。すると

「当たり前や！！」

と力強く答える。それに対し、俺は

「じゃあ、ヴォルケンリッターにも話さないといけないことだから
全員を集めてくれないか？」

と言う。すると、力強く頷いて

「わかった。」

と言ってヴィータにシャマルを呼ぶように言い、はやてはザフィーラを呼んだ。しかし、シグナムだけは剣道の臨時講師をしているので直ぐには帰って来れないとの事だった。

それから、数時間後、ようやくシグナムが帰ってきた。

「ただいま戻りました。」

とシグナムは玄関ではやてに挨拶をした。それに

「お帰り、シグナム。それよりもお客さんが来てるから早く来てな。」

と言って俺達のいるリビングに戻っていき、それを不思議に思いつつシグナムは

「わかりました。」

と言って付いて行くのであった。こうして、俺達は自己紹介をしてからなのはが前世でどんな経験をしてどんな理由で死んだのかを話した。

その時に、闇の書事件の事も出てきてヴォルケンリッターは、信じられないと口にしたがそれは事実だと俺が言った。そして、俺も前世の事を話すことになり、この世界がアニメになっている事などを話した。もっとも、それも信じられないと言われたが、グレアムの事やグレアムの目的を話すとヴォルケンリッターは少しは信じるようになってくれた。しかし、その代わりはやては信じたくないと言う顔をしていたが、黙って俺の話を聞いた。そして、遂に本題のどうやってはやてとヴォルケンリッター達が幸せに暮らせるのかと言う話題になった。

話し合いの結果、俺が前もって決めていた作戦であるアニメ同様に闇の書を完成させてからはやてが目覚めるまで時間稼ぎしてから防衛プログラムを切り離す事にした。そして、俺一人で防衛プログラムを破壊してユーノ、アルフ、シャマルが宇宙に核を打ち上げてから、なのはが宇宙でツイン・アルカンシエルを使って蒸発させると

言う計画を立てた。その後は、リインフォースと夜天の書が消えな
いようにする為に、聖王の書に記録されている夜天の書のオリジナ
ルデータを上書きして復旧させると言う計画を立てた。そして、そ
んな計画を話し終えた時、俺の指示である物を作るためにネビーイ
ームに居たりリスとオファニスから連絡が来た。

「リリースにオファニス、どうした？頼んでいたあれは完成したか？」
と聞く俺に

「ええ、とりあえずは4機は完成したわ。そちらの方はどう？」
と答えてから逆に質問してくる。それに

「ああ、こつちも夜天の書の主を見つけて計画を話していた所だ。」
と答える俺。その答えに

「では聖王陛下、いつ作戦を決行しますか？」
とオファニスが聞いてきた。それに俺は

「明日、決行する。それと、蒐集する魔力についてはそつちにある
ジュエルシードの魔力や他の魔導生物から採った魔力を使う。だか
ら完成した4機と一緒に持ってきてくれ。」

と指示を出した。それに

「わかったわ。」

「わかりました。」

と答える2機に

「じゃあ、よろしく。」

と言って通信ウィンドウを閉じた。その後は色々質問攻めにあつた
りして大変で、説明してようやくそれから開放されたのであった。

視点終了

その後、孝平達はそれぞれの家に帰った。そして、なのははテツサ
ロツサ家にこの事を伝えてからどうするかを聞く。すると、フェイ
トとアルフはユーノと一緒に孝平のサポートでプレシアとアリシア
は管理局が来るかもしれないからとネビーイームでリリースと共に辺

りを警戒してくれる事となったのであった。そして、ユーノは不破家で居候しているのでなのはが直接話した。その時に恭也も聞いており、危険なので一緒に行くと言い出した。なので、なのは何かあった時の為に護衛を頼むと言って結局恭也も来る事となったのであった。

おまけ

八神はやて

原作と同様の設定でSランクの魔導騎士

ただ、原作と違うところは夜天の書とリインフォース・アインが消えない事である。因みに、リインフォース・ツヴァイに関しては孝平がはやてに前世の事を話したので生まれる予定。

尚、孝平についてはどう思っているのかは不明である。

ヴォルケンリッター

原作同様の設定。尚、聖王、霸王、冥王といった、歴代の王達の事は曖昧程度にしか覚えていない。その為、孝平を見ても直ぐには聖王家の血筋だとは気づかないで言われてから気づいた。

第18話「現聖王と現夜天の王」（後書き）

次回は前編と後編に分けます。前編は4機の正体についてで後編は孝平VS管制人格とのバトルになります。

第19話「4機の正体と闇の終焉」前編

孝平達のはやてと会っている間、イギリスである事件が起きていた。事件の内容は、通り魔殺人であった。殺された人物はギル・グレラム。管理局の提督でありはやてを算段の為に保護していた者である。その事件の真相は、通り魔ではなくそれに見せかけた計画犯罪である。孝平がある機体に命令を下して暗殺したのである。その機体の正体は、孝平がネビーイームを貰ってから作り始めた自動人形とは異なる完全な兵器として作られたロボットだ。その姿は、昔の日本にいたとされる忍者を模したものだ。人間サイズの諜報型の機体で、名は飛影と言う。他にも同型機として水影、土影、岩影、炎影、氷影、暗影、緑影、黒影、白影、零影が存在する。その他にも形が違いますが人間サイズのロボットが存在した。そして、孝平が作らせて先に完成し、今日受け取る4機もそのロボットなのである。

場所：ネビーイーム内部・兵器プラント

視点：孝平

俺はなのとは一緒に、4機のメカと擬似リンカーコアを受け取りにネビーイーム1号機の兵器プラントに来ていた。

「なのはに孝平、これが完成型のロボットのアシユタロン・ハーミットクラブL&Rにヴァサーゴ・チェストブレイクL&Rよ。本当はアシユタロンとヴァサーゴだったんだけど、それを改造して火力やその他の性能が向上してるわ。」

とリリースが4機を指して説明してきた。それに俺は

「そうか、有難う。それと他の機体の進行状況に、イクスとイルイのデバイスはどうだ？」

とお礼を言ってから他にも頼んでいた戦力やデバイスについて聞いた。それにはオフアニスが

「そうですね。イルイ様のナシム・ガンエデンについてはレイジングハートのAIや部品が残ってますからそちらは数日ぐらいで完成します。しかし、他の機体やイクス様のデバイスについては一からですので、後1週間から3週間程掛かります。」

と報告してくれた。それに頷き

「そうか。あ、なのはのデバイスを改造も頼みたいんだけど良いか？」

と聞く。すると

「そろそろそう言われると母様から通信で言われましたが、本当になりましたね。わかりました。では、なのは様に孝平様、デバイスを渡してください。それと、もう少し此方でお待ち下さい。」

と言った。なのははその指示に頷いて

「わかりました。」

と言つて三つのデバイスをオフアニスに渡す。そして、俺のはどうして渡すのが気になり

「どうして俺のを？」

と聞いた。すると

「それはですね。母様からお2人用の新型のデバイスを頂いたので、そちらにデータを移植したいのです。それに関しては此方に目を通して下さい。」

と言つて4枚程のの資料を渡してくれた。更には

「それと、ヴァサーゴ・チェストブレイク（以後チェストかチェストブレイク）はお二人の護衛用で、アシユタロン・ハーミットクラブ（以後はハーミットかハーミットクラブ）はお二人の支援用ですのでデバイス経由でも指示が送れるようにする事も含まれています。」

と言つて来た。それに

「「支援？」」

と復唱する俺となのは。そして、それにはリリースが

「孝平はこいつ等が人を乗せれる様に出てるって知ってるはずね

「何せ貴方が前世での記憶を元に設計したのだから。」

と言ったので俺は直ぐにその意図に気づくと

「成程、俺達の火力を上げるのが目的か。」

と言う。それに頷く2機の自動人形。それに

「って事はアレは積んであるのか？」

と聞く。そのアレという言葉になのはは

「アレ？アレって何？」

と言う様な顔をしたがそれを無視しどちらかの答えを待つ。すると、
リリースが

「そうよ。因みに、アレは2挺あって、モードでツイン・アルカン
シエルとツイン・カイザー砲と同等の威力を持ったツイン・アルテ
イメットキャノンの切り替えが可能になってるから、今日の闇の書
の戦いにも使えるはずよ。」

と説明を受けた。それに納得した俺は

「わかった。」

と言ってオフアニスにデバイスを渡した。そして、なのはもわかつたのか

「そっか！！だからこそそのチェストブレイクなんだね！？」

と言った。それに無言で頷く俺と2機。そうなのだ、俺やなのはのアルカンシエルは時間が掛かる。その為に護衛が必要で、その護衛こそがヴァサーゴ・チェストブレイクなのである。こうしてなのはが理解し、オフアニスがコンピュータで調整しようと兵器プラント内部にある調整室に向かった後、プレシアさんとテッサロッサ姉妹とアルフが兵器プラントの中に入ってきた。そして

「おはよう、孝平君になのはちゃん。アレが完成したわよ。」

と挨拶と報告をくれた。それに続き、テッサロッサ姉妹とアルフも挨拶してくれた。なので俺達もアルフを含めたテッサロッサ家に挨拶をする。そしてその後、直ぐになのははまた

「そっいえばアレって何？」

って言うような顔をしていたが、それをまた無視して

「そうですね。ではまずかとアリサにはこの件を終わらせてから渡ししょう。」

と言った。それに

「そうね。はい、これ。」

と頷くと俺に二つのデバイスを渡してくれた。なのはもそれを見た時、先ほどの会話と合わせて分かったのか

「って事は、これが魔力をもたない人達用のデバイスですか？」

とプレシアさんに聞いた。それに

「そうよ。孝平君にそれに関するデータを貰ってから頼まれたからね。」

となのはに答えた。そして、それに

「そうだったんですか。」

と言って納得するなのは。それに「ええ」と頷いたプレシアさんは「それと、この戦いにフェイトも参加することになったでしょう？けど、それは無理になってきたわ。」

と言った。それに俺は心当たりが合ったので

「ああ、そういうことですか。じゃあ、フェイト、改造するからバルディッシュを渡してくれ。」

と言った。それに

「うん」

と頷いてフェイトは俺に待機状態のバルディッシュを渡した。そして、それをリリースに

「じゃあ、改造頼む。」

と言って渡した。それに

「分かったわ。」

と言ってリリースは俺からバルディッシュを受け取った。そして、プレシアは

「じゃあ、お願いね。」

と言って俺達は挨拶をしてからテッサロツサ姉妹を連れて帰っていた。アルフは予定通りに俺のサポートをしてくれるから此方にい

るのだ。そして、そんなアルフに

「じゃあ、今日は頼むな。」

と言う。それに

「おう！サポートなら私に任せな。」

と笑いながらアルフは言ってくれた。そして、そこに

「お二人のデバイスのデータの移植が完了しました。」

と言って俺達がテッサロッサ家と話している間にデバイスやロボットの調整をしていたオファニスに戻ってきた。そして

「はい。完成度や強度はは前の物よりもかなり高いので全力で戦っても構いません。それと、新しい鎧型のデバイスには両腕にリボルバー式のカートリッジシステムを搭載しています。くれぐれも使用には気を付けて下さい。」

と説明と注意をされた。それに

「わかった。」

「わかりました。」

と頷く俺となのは。しかし、アルフだけは分かっておらず

「カートリッジシステムって何だい？」

と聞いてきたので俺が

「ああ、アルフは知らなかったんだな。カートリッジシステムって言うのは、昔にミッドチルダ式と勢力を2分していたベルカ式にあったシステムで、その殆どのデバイスはそのベルカの消滅と一緒に消滅してる。まあ、例外として俺の様な古代ベルカ人の先祖を持つ人間が生き残ってはいるからまだ幾つかはベルカの遺産が残ってるんだろうな。その証拠に管理局と同盟を組んでた聖王教会って所がベルカの遺産を集めてるみたいだしね。あ、ベルカや聖教会の事は知ってるよな？」

とアルフに説明し、質問をする。するとアルフは

「ああ、孝平やプレシアから聞いてたからな。」

と答えた。そして、そこで俺が

「そういえばジュエルシードも古代ベルカにあったかなり強力な魔

導兵器の動力原だったって教会の連中に聞いたな。元々はアルハザードから流出物だったらしいがな。」

「ええっ!!そうだったの!?!」

「そうだったのかい!?!」

となのはとアルフが驚く。俺は更に

「ああ、しかもその兵器はゆりかごによって破壊されてるらしい。」
と言う。それにはなのはとアルフの反応が違い、なのはは

「ええっ!?!」

と驚き、アルフは

「ゆりかごってのは何なんだい?」

と聞いてきた。するとなのはが

「それはですね。正式名称を聖王のゆりかごと行って、聖王の生まれた場所であり死ぬ場所だと言われています。まあ、実質的には聖王の血筋でしか動かせない当時のベルカでもロストログアと呼ばれた程の巨大なロストログア級の戦艦なんですけどね。孝平君のカイゼリオン改に平行世界のゆりかごが強化素材として使われています。そのせいで孝平君がカイゼル・ファルベを玉座の間でありブリッジでもある所で使わないと動けない仕様になってますけどね。あ、アルフさんは孝平君が聖王だって事は知ってましたよね?」

とアルフにそう説明して質問もした。それにアルフは

「知ってるよ。それと私のことはアルフで良いし、敬語じゃなくても良いよ。フェイト達を救ってくれたんだから。これは前にも言った気

がするんだけど?」

と頷いてからそんな事を言った。それに

「すいません。前世の癖だったので……うん、分かったよ、アルフ。」

と少しだけ間が開いたがそう答えた。そして、そこで俺は

「それと、平行世界についてなんだが、前になのはと俺が転生者だ

って事は知ってるよな？」

とアルフに聞く。すると

「ああ」

と頷いた。そしてそれを見た俺は

「それで、平行世界のゆりかごを改造に使ったって件なんだけだな。その平行世界っていうのがこのなのはの前世の世界なんだよ。」

と言う。それになのはも頷く。それを見たアルフは

「大丈夫かい？辛くなかったかい？」

と心配そうになのはに聞いた。それに少し寂しそうな笑顔で

「確かに辛いけど、向こうには私の居場所はないからね。それに私の居場所は这个世界だしね。」

と答える。その後、アルフは

「そうかい。本当に辛かったら言うんだよ？」

と言う。その言葉に優しさが宿っていて、それがなのはにも感じ取れた様で

「わかった。その時はお願いね。」

と言って返した。

その後、俺はなのは、アルフ、リリス、オファニスと話をしつつ、俺となのははデバイスの資料を覚えるのだった。そして、それが終わると皆を待たせると悪いので、俺となのはとアルフはハーミットのL&RとチェストのL&Rを連れて直ぐに地球に戻っていった。

視点終了

おまけ

デバイス設定

セイクリッドアイゼンMK-？

基本的にはセイクリッド・アイゼン改と同じ形状であり、同じ武装を持つが、両足には三角形の魔力刃が展開可能なブレードを、両腕にリボルバー式のカートリッジシステムが追加され、更には肩部のバインダーに円盤状で真ん中に大きな青い宝玉の様な物が付いたビットが12機追加された。その他は全ての性能が使い易さも含めて向上しており、ヴァサーゴ・チエストブレイクルとアシユタロン・ハーミットクラブLを制御できる機能が追加された。また、部分展開が可能になった事ので奇襲も出来るようになり、変則的な戦いも出来るようになった。

聖王の書

孝平の全力全開の魔力やそれ以上の魔力にも耐えられるように強化された物ではあるが初代の物とは別に用意された新品の魔導書である。セイクリッド・アイゼンMK-？やゲベル・ガンエデンとのシンクロ機能が追加された。因みに、管制人格は初代と同じでキョウスケが担当する。

ゲベル・ガンエデン？

見た目はゲベルと同じであるが全ての性能が上がっているのと、ビットが4つ追加されている。それにガンエデンシステムも搭載されている。それと聖王の書とのシンクロ機能が追加された。

ヴァイス・アイゼンMK-？

基本的にはヴァイス・アイゼンと形や武装は変わらない。しかし、両腕にはリボルバー式のカートリッジシステムを、肩部のバインダーにはツイン・アルティメットキャノンや円盤状で真ん中に大きな青い宝玉の様な物が付いたビットが6機追加されたりと武装や性能面で追加されている物が多い。また、魔王の書とのシンクロ機能が追加されている。また、ヴァサーゴ・チエストブレイクルとアシユ

タロン・ハーミットクラブRに指示が出来る様になっている。

魔王の書

初代の物とは別物の新品で、全ての性能が上がっている。管制人格は初代と同じでエクセレンが担当。

このデバイスをアインストを呼び出して操る能力の補助に使用する事によって、大型アインストであるレジセイア級を呼び出せて操作も出来る様になった。また、ヴァイス・アイゼンMK-?やレイジングハート・ハイペリオンとのシンクロ機能が追加されている。

レイジングハート・ハイペリオン

基本的にはスターゲイザーと同じ形状ではあるが、性能面が向上し、なのはの膨大な魔力にも耐えられるようになった。このデバイスだけがスターゲイザーを改造した物である。ビットが4つ追加された。

ロボット設定

ヴァサーゴ・チェストブレイクL&R

魔力：SSSS+

見た目と武装はガンダムXに登場するガンダムヴァサーゴ・チェストブレイクと同じであるが、動力が違う為、ビーム兵器が魔力兵器になっているのが特徴。色がLとRで違い、Lが青でRが暗い赤である。

アシユタロン・ハーミットクラブL&R

魔力：SSSS+

見た目と武装がガンダムXに登場するガンダムアシユタロン・ハーミットクラブと同じ。しかし、動力が違う為、ビーム兵器ではなく魔力兵器である。それと、オリジナル武装としてアルティメットキ

ヤノンの機能を持った、専用の大型ライフルを2挺持っている為、ツイン・アルティメットキャノンが撃てる。色がLとRで違い、Lが白でRが黒である。

飛影

魔力：S

偵察や暗殺等とい裏方の仕事に特化した機体で、初期に完成した内の一機である。

同時期に開発された同型機が10機存在し、それぞれに水影、土影、岩影、炎影、氷影、暗影、緑影、黒影、白影、零影と名を付けられ、それぞれが偵察や暗殺等の行動を起こしている。その為、滅多に兄弟機全てが揃う事は無い。武装として日本刀、手裏剣等の接近戦用の物しか持たない為、火力が無い。しかし、その反面、隠密に適した特殊なシステムが多数搭載されていたり、高度な幻術が使えたりする。元ネタは忍者戦士飛影の飛影。

システム説明

シンクロシステム

魔導書を出さなくても魔導書に記録されている魔法を使える様にしたシステム。

ガンエデンシステム

デバイス自体が竜型の兵器となつて戦闘を行うシステムで、その他にも豹、鯨、鷲の形をしたクストースシステムと言う兵器を呼び出せる機能がある。しかし、起動などにはサイコドライバーの意思と力が必要。

クストース

半生体兵器で、それぞれが豹、鯨、鷲の形をしている。それぞれが雷、水、炎の属性を持っている。

ただ、ゲームとは違い、量産型が存在しない。因みに、ナシムとゲベルの両方にこのシステムがある為、見分ける為にカラーリングが違う。ナシムのは白で、ゲベルのが黒である。

第19話「4機の正体と闇の終焉」前編（後書き）

追加武装の設定は次回となります。そして、いよいよ戦いです。

第20話「4機の正体と闇の終焉〜後編〜」

孝平となのはとアルフが4機を連れて地球に戻り、孝平がヴォルケンリッターやはやての所へ行き、なのはとアルフが恭也とユーノ所に行つて、それぞれ臨海公園の所まで連れて行つてメンバーを集合させた。

そして、知らない人物がいたので互いに自己紹介した後、各自所定の位置に向かつていった。なのはと恭也と4機は宇宙に行き、後のメンバーはそのまま残つて作戦の確認をする。それも終わると、はやては先ずヴォルケンリッターを蒐集し、それから孝平が持つていた擬似リンカーコアを蒐集した。その時にアルフ、ユーノで結界を張つた。それを確認すると孝平ははやてに闇の書の起動させる様に促した。それに

「闇の書、起動!!!」

と言つてそれに答えた。そして、闇の書を起動させた後、管制人格に乗つ取られたはやては管制人格の姿と声で

「では、主が目覚めるまでの間、お相手願おうか、聖王陛下。」
と言つて孝平のいる海上に向かつてスレイプニルを羽ばたかせて空を飛ぶのであつた。こうして、聖王対夜天の王は戦い始めるのであつた。

場所：海上

視点：孝平

俺と管制人格は海上でも沖合いを離れて睨み合つた。そして

「はあああああ!!!」

と叫びながら俺は管制人格に小太刀で切りかかった。それをかわして今度は管制人格が俺に魔力で強化した右ストレートを放つてきた。

それをもう一方の小太刀でガードすつが、それは読んでいたかのよう
に今度は左足で蹴って来た。しかし、それは俺の聖王の鎧と頑丈
なデバイスの装甲によって俺にダメージを与える事は無かった。そ
して、俺は一旦管制人格から離れて両腕の五連チェーンガンと三連
砲を発射した。しかし、それは管制人格のシールドによって防がれ
る。そのお返しのように今度は管制人格がブラッディダガーを使っ
て俺に攻撃しようとした。しかし、それも聖王の鎧で防ぐ。それか
ら砲撃戦へとなって互いの砲撃をぶつけ合いになり、最終的には俺
の砲撃が上回っており、管制人格にダメージを与えた。そして、そ
れらが幾度と無く続き、10分が経過したその時、管制人格の動き
が鈍くなり、はやてから目覚めたとの念話が来た。それを聞いた俺は
「了解だ！！今すぐ出してやる。」

と言って俺は、管制人格もとい防衛プログラムに向かってツイン・
ハウリングランチャーを構えてからバインダーにある円盤状のビツ
トを射出してビツトからバインドを使って防衛プログラムを動けな
いようにした。そして、その間にMモードで発射した。そして、そ
の2つの虹色をした極太の光線は、防衛プログラムを吹っ飛ばした。
そして、その後には海に浮かんだ状態の大きくて半球型の黒い塊と
空に浮かぶ白い球体があった。そして、直ぐに白い光の柱が白い球
体の周りに現れてそこからヴォルケンリッターが現れてアニメ同様
の台詞を口にした。

そして、はやても白い球体から現れて騎士甲冑を装着し、ヴォルケ
ンリッターと一緒に俺の方に向かってきた。それを見た俺は直ぐに
ユーノとアルフにはやてが覚醒したと連絡して此方に呼び寄せた。
それから、ユーノとアルフが現れて数分後、闇の書の闇も姿を現わ
した。そのグロテスクな姿を生で見ると少し嫌な気分であったが俺
は直ぐにツイン・ハウリングランチャーをBモードにして撃った。
そして、2つの弾丸がバリアに当たって爆発すると、一層目の物理
バリアが割れた。それを見計らって、今度はMモードの最大出力で
撃って2層目の魔力バリアも割った。それを後もう一回続けて、魔

力と物理の複合バリアを全て割った。そして、最後の仕上げとして、俺は胸部の赤い宝玉部分に魔力を溜めつつ両腕に持っているツイン・ハウリングランチャーをXモードにしてから発射体制をとった。その時に、闇の書の闇から攻撃を受けそうになったが、それははやて達によって防がれた。そして、胸部に溜めていた魔力がスターライトブレイカーの3倍にまで膨れ上がったので俺は直ぐに「ツイン・ハウリングランチャーXモードとブレストアルティメットキヤノン発射!!」

と叫ぶ。すると、3つの超極太の光が一つになって闇の書の闇を撃ち抜いた。そこでシャマルの出番となり、旅の扉でコアを捕らえるのと、直ぐにユーノとアルフがなのはがいる宇宙に向けてコアを転送させた。そして、コアを予めチャージしていたなのはのツイン・アルカンシエルとハーミットRのツイン・アルカンシエルの合体技であるフォース・アルカンシエルで消滅させて、この戦いは終わりを迎えたのであった。戦いが終わった後、はやてはアニメ通りに慣れない魔法を使ったのが原因で倒れた。直ぐにははやてはヴォルケンリッターによって、八神家に運び込まれた。そして、俺達も宇宙からハーミットL&Rの背中に乗って降りてきた不破兄妹とチェストL&Rと合流してから八神家に行くのであった。その後、俺は直ぐになのはと一緒にアニメ通りの名を貰ったリインフォースとヴォルケンリッターを連れて、アニメでははやてとリインフォース・アインが分かれた場所に行き、直ぐに修復の準備に入るのであった。

俺となのはは先ずそれぞれが持つ魔導書を起動させ、次にキョウスケとエクセレンも呼び出して、ユニゾンをしてから修復の儀式を開始した。

結果、夜天の書は本来の姿を取り戻し、ヴォルケンリッターをまた守護騎士システムとして復活し、計画は成功したのであった。しかし、その瞬間、俺の体に力が入らなくなり、意識も遠退いていき、俺は

ドサッ！！

と言う自分が倒れる音と、仲間の驚く声を聞きながら眠りに落ちたのであった。

視点終了

孝平が目を覚ますと、そこは八神家のベッドであった。そして、横には、寝ているのははやての姿があった。すると、そこにリンフォースとシグナムが部屋の扉から現れたのであった。そして、目を覚ました孝平に

「目覚めたか。」

とリンフォースが言った。その後、孝平は自分が倒れた後の事を聞いた。すると、なのはによって八神家に運ばれた後にベッドに寝かされたとの事で、はやてが孝平の寝ているのは、夜中にははやてが起きてそこから孝平の看病をなのはと一緒にしていたからであった。因みに、孝平が倒れた時に学校に行かせていた偏在も消えてしまったが、学校が終わった後だったので、支倉家で消えたのでなんら問題なかった。

その数時間後、はやてとなのはが起きて、はやてはヴォルケンリッターとリンフォースを孝平が寝ていた部屋に呼び出した。そして、はやて、ヴォルケンリッター、リンフォースが孝平となのはに向かってお礼を言った。それに孝平となのはは気にしないで良いと言った後、此方こそ家に泊めてくれて有難うとお礼を言った。それから少しして、はやてはなのはとヴォルケンリッターとリンフォースを孝平君と話があるからと言って部屋から追い出した。そして、孝平に

「私、孝平君が好きになったみたいや。」

と告白してキスをした。それに驚きながらも孝平はある計画を話してから

「それでも良いのなら構わないよ。」

と言う。するとははやては

「そつやね、答えはこれや!!..んん」

と言ってからもう一度孝平の唇を奪ったのだった。それをOKと感じ取った孝平は、はやての唇から一度離れて、今度は孝平からキスをしたのであった。その後、孝平とはやては婚約し、その事をまた呼び出したヴォルケンリッターとリインフォース、そして、同じく婚約者の一人であるなのはにその事を伝えたのであった。その時の表情は、驚き見満ちた顔が5で、またかと言う様な表情をしたのが1であった。

それから、数日後、はやては病院で見て貰ったが、症状が治まりつつある事を主治医である石田先生によって知らされた。そして、その事については、急に直り始めたので驚いたが、素直に喜んだ石田先生だった。

こうして、はやては原作よりも早く立って歩けるようになったのであった。しかし、はやても石田先生も、その早く直り始めたのが、ある一人の少年の能力のお陰でもあるという事は知らなかった。

おまけ

兵器・武装設定

スラッシャービット

円盤状のビット

円盤状の薄い円に、真ん中に大きな青い宝石が埋め込まれたような形状をしている。接近時には魔力刃を円盤部分から展開しながら回転しながら体当たりし、遠距離時には宝石部分から砲撃が発射できる。その他にも、防御シールドを展開したり、バインドが使用でき

たりと万能型のビットである。

ブレストアルティメットキャノン

胸部にある赤い宝石に魔力を溜めて発射できる。威力はハウリングゲランチャーXモードのフルパワーと同等。

脚部ブレード

三角形をした突起物で、魔力刃を展開する事が出来る。また、SRXと同じ部分にある為、ブレードキックの様に使用できる。

尚、この装備はセイクリッドアイゼンMK-?にしか追加されていない。

第20話「4機の正体と闇の終焉」後編（後書き）

今回は少し短めでした。はやても婚約者にしました。後は何人か増やしてハーレム計画は完成となります。次回はアジトで実験台にされていた人達が少しだけ登場する予定です。

第21話「元実験体達の決意」

孝平が、はやてと婚約して2日後、ウーノが孝平に

「全ての人の救出が完了しました。しかし、その人達は如何致しますか？」

と通信で聞いた。その問いに孝平は

「そうだね、とりあえず会ってみるから待ってて。」

と返した。こうして、孝平は、今は亡きスカリエッティの元アジトに行くのであった。

場所：スカリエッティの元アジト

視点：孝平

俺は今、アジトの洞窟内にいる。そして、目の前にはウーノと救出されたであろう少女や女性達が9人いた。

「彼女達がそうなのか？」

と俺はその9人に顔を向けつつウーノに聞いた。

「はい。」

と彼女達を見渡してウーノは言った。俺もその彼女達の顔を良く見る。すると、2人程アニメ等で知ってる顔や似ている顔が見られた。それは後回しにして、なぜそんなことを話し出したのかを考えた。そして、その中で思いついた1つが

「もしかして、9人全員が管理局と戦うと言ったのか？それで俺の許可を貰いたいって事か？」

と言う仮説である。それに驚くウーノを含めた10人。それを見た時、凶星だと分かってしまったので

「凶星か・・・良いよ。だけど、その為には強くないといけな
いから修行しないとイケないよ？」

と9人に聞く。すると、その一人で9人のリーダー格のような金髪でアメジストの瞳を持ったかなりの美少女が

「分かってるわ。それにウーノさんから聞いた話だと、今の管理局とミッド政府はだいぶ腐ってるね。だから変えたいのよ。」

と言った。それに他の8人もコクつと頷いた。それを見た俺は「分かった。だけど、無理と無茶だけはするなよ?」

と言って9人に許可を出したのであった。そして、俺はさっきの金髪の子の言葉が気になったので

「なあ、ウーノ。管理局が腐ってるのは知ってたけど、ミッドの政府も同じなのか?」

とウーノに聞いた。すると

「はい。しかも、管理局から多額の賄賂を受け取っているようです。」

と思ひもしなかった事がウーノの口から飛び出してきた。それを聞いて俺は直ぐにその意図を理解し

「ああ、成程ね。その代わりに管理局が犯している犯罪行為を黙認して欲しいって所かな?」

と言った。それには金髪の美少女が

「貴方もそう思った?」

と聞いてきたので

「ああ、そういう君もそう思ってるみたいだね?」

と答えてから聞き返した。それに

「ええ。あ、そういうえば自己紹介してなかったね。私はシホ・アヤカミ、ミッド人の母親と第97管理外世界出身の父親を持つハーフだよ。両親は管理局員だったけど仕事中に亡くなったんだ。」

と自己紹介してきた。俺はあることに気づきつつも

「そうか・・・俺は支倉孝平、君の父親と同じ世界で同じ国の出身だ。」

と自己紹介すると

「名前の響きが似てたからそうだと思ってたよ。あ、因みに貴方っ

て言うのはアレだから孝平君で良い？」

と聞いてきた。俺は少し不振に思い

「ああ。それよりも、なんか俺の名前の事を知ってるみたいなの口ぶりじゃなかった？それに、さっきのご両親の話んですけど、管理局が殺したって事は考えられないかな？」

と聞いた。すると

「それならウーノさんから教えてもらったよ。それはこの8人も一緒だよ。」

と答えた後に

「それと、孝平君も私の両親が管理局に殺されたと思ってる？」

と聞いてきたので

「ああ、余りにも出来すぎてるからな。」

と言った後に、シホは頷いた。その後、俺はシホから両親の死因を聞いて、より一層管理局が関わっていると思うのであった。

その話が終わると、次はウーノがユークリウッド・ヘルサイズそっくりの少女の紹介を始めた。その内容はこれはゾンビですか？で狙われていた理由と名前が一緒だったので彼女がこの次元でのユークリウッド・ヘルサイズかと思いつながら

「そうか、これからよろしくな。」

と言って握手を交わした。そして、次に待っていたのは、ISに登場するセシリア・オルコットと瓜二つの少女だった。俺は、この子も貴族かと思っていたが、彼女は孤児だったらしく、管理局に買われてスカリエティの所に実験台として連れて来られたらしい。その他にも管理局や政府のせいで実験台になった人もいると他の8人が自己紹介の時に知ったので、俺は管理局は当然として、ミッド政府も潰そうと思ったのであった。他にはデバイスや魔法についての話し合いが行われ、結果は俺の多重偏在（簡単に言えばナルトに登場する多重影分身で、俺がなのは俺達の魔導書＋管制人格と多重影分身を元に造った魔法だ。）

その後、俺はミッド地上本部のレジアス中将に連絡を取り説得と交

渉を始めた。理由は、地上本部でまともな人間であり、有能かつカリスマ性のある人間だったからだ。まあ、聖王教会嫌いについては仕方ないがこのままだと碌な協力が出来なくなってしまうと思った為、それについても話した。その結果、説得は成功し、聖王教会に対する態度もある程度緩和し、原作の様にゼスト隊が死ぬ事も無くなった。そして、その説得が終了すると、シホから

「二人だけで話したいの。何処か良い所は無いですか？」
と聞かれた。その言葉に俺は
（話って何だろう？二人って事は誰にも聞かれたくないって事だよな？）

と思いつつシホに
「分かった。」
と言った後に

「じゃあ、今からそこに転移するからこつち来て。」
と促すした。すると、シホは隣にやって来て俺の腕を組んで来た。それに俺は驚きながらもシホと一緒に転移したのであった。

視点終了

おまけ

人物設定

ユークリウッド・ヘルサイズ

種族：妖怪、ネクロマンサー

魔力：測定不能（3億）

能力：世界を動かす事が出来る程度の能力（ただし、言葉や感情でも何かが変わってしまう事もあるので感情等を顔に出さないし、喋

らない。）、不老、手で傷を治すことが出来る程度の能力、死んだ人間をゾンビにして生き返らせることが出来る程度の能力
デバイス：なし

地球から研究材料として連れてこられた少女ではあるが人間ではない。その血には、不老の力があり、手には傷を癒す力が備わっている。

しかし、傷を癒した後は、そこと同じところに同じ痛みが襲う為、彼女は誰よりも命の大切さを知っている。元はやさしい少女ではあるが、感情を表に出すだけで世界に何らかの影響が出てしまう為、感情等を出したり出来ないで居る。元アジトに居る時の格好は、白くて薄いワンピースの様なスカート。

容姿は、これはゾンビですか？のユークリウッド・ヘルサイズである。

セシリア・オルコット

種族：人間

魔力：S

能力：高速処理能力、ニュータイプ能力

デバイス：なし

出身地がミッドの孤児院で、元ネタのISとは違い、孤児と生きていた。その時に管理局に孤児院から買い取られた後にスカリエツィに秘密裏に渡されて実験台にされていた。
容姿はISのセシリア・オルコットである。

第21話「元実験体達の決意」(後書き)

今回はシホの設定とシホの秘密が明らかになります。

第22話「第4の転生者は婚約者!？」

視点：シホ

私が孝平君に二人で話がしたいから何処か二人で話せる所はないかと聞いた時、彼は私に転移するからと言って私に来るように言った。そして、私は彼の言う通り近づいた。だけど、それだけではなく、彼の腕を組んだ。それには孝平君も驚いた様子だったけど、直ぐに持ち直して転移魔法を発動させて私たちは、二人きりで話せるであろう場所に転移し、着いた先は戦艦の内部のような場所だった。その戦艦の内部らしき場所を黙って歩く孝平君に私は黙って付いて行く。そこに突然、孝平君がある部屋の前で立ち止まって入って行き、私も直ぐに部屋の中に入っていった。部屋の中は、まるで何処かの高級ホテルのスイートルームのような場所であった。そして、中に入ると孝平君が私の方を向いて

「この中なら誰にも聞かれる可能性は無い。ただ、例外が一人居るけどな。」

と言って私に椅子に座るように促した。私が椅子に座ると

「で、話って何？」

と聞いてくる。それに私は

「そうね。久しぶりと言った方がいいのかしら？支倉孝平君・・・いえ、浅木正嗣さん。」

と言った。その瞬間

「!!何故それを・・・」

と驚いたが、直ぐに

「もしかして俺の前世での知り合いか？」

と私に聞いてきた。だけど、私はそう聞かれることが分かっていたので

「そうよ。貴方と同じ瞳を持った、聖王なのは様から転生させてもらったの。貴方がこの次元に居る事を聞いてね。」

と答えたけど、彼はまだ私の正体に気づいていない。なので

「これを見ても私の正体に気づかない？」

と言ってから私はある仕草をする。それを見た正嗣さんの転生者である孝平君は直ぐに私の正体に気づいて

「琴美？お前、神崎琴美なのか？」

と聞いてくる。それに私は無言で頷く。そして

「会いたかったよー！！」

と言って私は泣きながら彼に抱きついた。それには孝平君に驚かれはしたけれど、離そうとはせず、逆に私を抱きしめ返してくれた。

その後、私達はキスを交わした。なぜここまでするのかと言うと、私の前世である神崎琴美と、孝平君の前世である浅木正嗣さんは両家公認の婚約者だったからだ。その為、私達の行為は前世での時では当たり前に行っていたことだったのだ。そして、互いの唇を離すと私はどうしてこの世界に転生したのかを話した。

「私は、正嗣さんが死んだ後、悲しんで食事も水分も取らずに家の部屋に閉じこもってた。そして、当然栄養を取らなかつたから衰弱しいてそのまま死んじゃつたの。」

と話し終わると直ぐに

「その後は、分かるよね？」

と聞いた。なぜなら、正嗣さんもほぼ同じ事を経験しているのだから分かる判断したのだ。その証拠に

「ああ、聖王なのはに頼んで能力を付けられて転生させられたんだろ？俺の居る世界にか次元に転生させて欲しいってな。」

と正解を言ったのだ。それに頷いてから

「うん、そうだよ。流石だね。」

と言ってから

「所で、話は変わるけど、また私と婚約してくれる？」

と聞く。すると孝平君は

「その前に、琴美って言うのもその姿じゃ厳しいからシホで良いか？」

と聞いてきたので私は「うん」と頷いた。それを確認して孝平君は「実はな、聖王なのはから聞いてるとは思うけど、今の俺は聖王の子孫だつて事は知ってるよな？」

と聞いてきたので私はその質問と私達の婚約に何の関係があるのかと思いつながらも頷いた。それを確認した孝平君は

「それでな、俺は今、この次元の地球に住んでるんだが、そこを管理局から守る為に聖王教会とある契約を交わしたんだ。その一つとして、俺が聖王になる事が条件なんだ。そして、俺もある条件を出したんだ。俺は王家の人間で血を絶やすわけにはいかないから一夫多妻を認め

るとな。」

と言った。私に驚いて

「なっ！！」

としか声が出なかつた。そんな私を無視して孝平君は更に

「それでな。もう既に婚約してる子が何人が居るんだ。」

と言葉を続ける。そして

「でも、制限は無いから、もしシホがそれでも良かったら、俺とまた婚約して欲しい。」

と頭を下げてお願いされた。私は、少し彼を見てから

「はあ、仕方ないね。本当は私だけを見て欲しかったんだけどね。」

と言った。その言葉に

「つて事はまた俺と婚約してくれるのか？」

と聞いてきたのでコクつと頷く。すると

「ありがとう。」

と言って私を深く抱きしめてくれた。そして

「あ、そうだ。婚約したのならこれを聞かないとな。」

と言ってから

「なあ、シホは人間を捨てる気はあるか？」

と聞いてきた。それを意味するのは分からなかつたので

「え、どういうこと？」

と聞いた。すると

「俺はもう人じゃないんだ。神という存在だ。そして、そんな俺を結婚すると言う事は人間であると俺が悲しい思いをする事になるんだ。」

だからこそこの質問だ。」

と答えられた。それに驚きつつも考えてから

「わかった。孝平君と一緒に居られるのならどんな存在になっても構わない。」

と答える。すると

「わかった。じゃあ、そのままジツとしてて。神力を送って神にするから。」

と言って孝平君の手が私の頭に触れようと伸ばした時

「待って。」

と言って少し聞き覚えのある声が右から聞こえた。その声の主の方を私たちは向いた。そして、孝平君が

「な、なんで止める。シホは良いと言ったぞ？」

と言った。すると

「それはね。彼女を神にする気があるのなら第932管理外世界”ラーギア”にあるトルネル遺跡に行ってみると良いよ。それと、その場所についてのデータや座標は、もう新型のゲベルに入ってるから直に行けるよ。じゃあね。」

と言ってから、聖王なのは様は赤くて目が沢山ある不気味な空間へと消えていったのだった。

視点終了

その後、孝平とシホは聖王なのはの言葉を信じてシホを神にしないで、第932世界に向かったのだった。

おまけ
人物設定

シホ・アヤカミ

種族：人間

魔力：SS+

能力：重力を操る程度の能力、炎熱と氷結と雷の変換素質、高速処理能力、サイコロライバー

デバイス：なし

オリキャラで孝平同様に現代からの転生者であり、前世の名前は神崎琴美で、孝平の前世である浅木正嗣の婚約者であった。

日本人とミッド人のハーフで、両親が管理局での仕事に死亡した後に、管理局によって極秘裏にスリエッティの所に仮死状態で連れて来られた。尚、彼女は両親の死にも、管理局が関わっているのではないかと思っている。9歳でありながら、かなり頭が良く、統率力も高い事から9人いる元実験体の中でリーダーの様な存在で、他の8人からの信頼は厚い。

容姿は金髪にアメジストの瞳を持った美少女。実は、ある神の宿ったデバイスを持つ資格と素質がある。

神崎琴美

種族：人間

魔力：なし

能力：なし

シホ・アヤカミの前世で浅木正嗣の婚約者であった。浅木グループに並ぶほどの大企業である神崎グループの次女であったが、正嗣な

死んだ後、深い悲しみによって部屋に閉じこもり、食事も水分も摂らずに泣き続けた為、死んでしまった。そこに聖王なのはと会って、正嗣が異世界で支倉孝平として生きている事を知った彼女は、その世界に転生したいと言ってシホ・アヤカミに転生した。ただ、孝平の居る地球にはなく、ミッドに転生した事と、仮死状態にされた後に実験台にされた事は予定外の事であった。

浅木正嗣

種族：人間

魔力：EX（なぜ、現実世界の住人なのに魔力があるのかは不明である。）
能力：なし

孝平の前世で、浅木グループの嫡男。交通事故で死亡したが、聖王なのはの力によって転生した。

オタクに近い人間であったものの、東大生で成績は常にトップで、武術も嗜んでおり、その実力は全国大会で3位と言う結果を残した程。

顔も良くて財力もあつたことから女性にもててはいた。ただ、性格に少し問題があり、その名残が孝平に生まれ変わっても残っており、それが一夫多妻という事を形になっている（要は優柔不断なので、自分に好意のある人間や自分が好意を寄せる人間にはその全員と結婚すれば良いということである）。

場所設定

第932管理外世界”ラーギア”

管理局に見つかっていない世界で、ここにある遺跡には、聖王なのはの次元世界に存在したある神がデバイス化して眠っている。

その他にも、ロストロギア級の代物の眠る遺跡や豊富な自然や資源

等があり、採掘にはもってこいな場所である。他の周囲の世界にも似たような特徴があり、この世界周辺は一つの国家ではないかと言
う仮説を聖王なのは立てた。

第22話「第4の転生者は婚約者!？」（後書き）

今回はシホのデバイスが登場します。それと、ウーノから孝平の事を聞いたといっていました。それは他の元実験体の8人であり、シホは知っていたけど前世の記憶がばれたら不味いと判断して知らない振りをしていました。

第23話「シホ、上位の神と契約する」

孝平とシホは、聖王なのは言う通りに第932管理外世界”ラーギア”にあるトルネル遺跡に向かっていた。その時、魔物やドラゴンに襲われたが、孝平がそれらと戦って余裕で勝利した。しかも、その時の死体の鱗や腹の中に入っていた鉱石などを剥ぎ取ったりしていた。だが、それらは目的地までに持って行けそうに無い量だったので、聖王の書にある特殊な空間を作り出して物等を収納できるという機能を使用してそれらを空間に入れた。そして、ようやく目的のトルネル遺跡の入り口に到着した。その間に出会って襲ってきた魔物や竜の数は、魔物が大小含めて14匹、竜が大小含めて4頭であった。

場所：トルネル遺跡入り口

視点：シホ

トルネル遺跡に着いた私達は、遺跡に入ろうと、孝平君が扉に手を掛けて開けようとしたけど、押したり引っ張っても駄目だった。すると、孝平君は、何か手がかりが無いかと扉を調べ始めた。そして、孝平君が何かの文字を見つけた様で

「ん？何か書いてある。」

と言った。そして、孝平君は、その文字を読もうとしたけど

「………駄目だ。古代ベルカ文字でも地球の文字でもミッド文字でもないからわからない。」

と私の方を向いて言った。それを聞いた私も試しに見る事にして

「孝平君、私も見るよ。」

と言って退いて貰ってその文字を見る。すると、確かにその文字は見たことが無かったけど、頭の中にその文字に書かれている内容が浮かんだ。

「この文字を読みし者、我と契約をする資格が在りし者なり。されど、それは人を捨て、神となる事なり。我と契約をしたくば扉に向かい、”我、調和神ルザムノ”ラスフィットとの契約と、世界の調和を望みし者なり」と唱えよ。我との契約を拒絶するならば、このまま何も唱えずに去れ。それが汝の為である。」

と言う私に孝平君が驚いて

「読めるのか!？」

と聞いた来た。私はそれを

(聖王なのは様が言つてた事つてこの事だつたんだね。)
と思ひながら

「ん、と言うよりは頭の中に浮かんできた。」

と言う。そして、孝平君は

「で、どうするんだ? 契約するのか? 契約しないのか?」

と聞いてきた。私は

(ふふつ、そんな事は愚問だよ?)

と思ひながらも

「契約するよ。だから、少し待っててね。」

と言つた。それを

「分かつた。」

と言つて頷く孝平君。そして、私は

「じゃあ、孝平君。少し離れてて。」

と言つて孝平君を扉から少し遠ざけた。それを確認すると、私は

「我、調和神ルザムノ”ラスフィットとの契約と、世界の調和を望みし者なり!!」

と唱えた。すると、扉が光だし、私はその光に吸い込まれてしまつた。

場所：トルネル遺跡内部

遺跡の中に入った私は、幾つかの部屋を見つけた。そして、その一つからとんでもない力を感じたので、その力を感じたその扉を開けて中に入った。

そして、目の前に写った光景は、周りには何も無く奥に祭壇が有るだけだった。

私はその祭壇へと近づいた。下を見てみると祭壇には何も無く、足元には六芒星の魔法陣が描かれていた。そして、私はその魔方阵の内側に入る。すると、先ほどまで無かった祭壇の上に銀色の宝石が付いたピアスが現れ、ピアスから声が聞こえる。

「汝、我に触れよ。」

と言う声に

「えっ？何？」

と私は驚いた。しかし、その声は

「汝、我に触れよ。」

と同じ事を繰り返す。なので、私は仕方なく祭壇の上にある銀色の宝石が付いたピアスに触れた。

すると、ピアスから銀色の光が出てきて私を包み込んだ。

場所：銀色世界

銀色に包まれた空間で、私は周りを見渡して

「ここは・・・何処？」

と誰も居なくて何も無い空間に問いかけるかのように言った。すると、誰も居ないはずの空間に

「ここは、我の精神世界だ。シホ・アヤカミ」

と言う声が聞こえた。

「！！！！」

私は驚きつつもまた回りを見渡した。けれども誰も居ない。なので、空耳かと思おうとした時、また声が聞こえた。

「我は意識と力しか存在しておらぬ。ゆえに我の肉体を捜そうとしても無駄だ。」

と言う声の主に

「貴方は？それにどうして私の名前を？」

と問いかける。すると

「我が名は調和神ルザムノ〓ラスフィット。汝が契約をしたがつていた者だ。そして、汝の名は我が精神世界に招き入れた時に記憶を垣間見たのだ。」

と返ってきた。それに私は驚きながらも

「そうですか。では、不合格ですか？」

と聞く。すると、調和神ルザムノ〓ラスフィット様は

「いや、確かに動機は少々不純だが、その力と心を調和の為に使えば文句は言わん。」

と言った。なので私は

「そうですか。では、契約を行ないたいのですが、よろしいでしょうか？」

と聞いた。すると、ルザムノ〓ラスフィット様は

「ああ。直に終わるから、ジツとしておれ。」

と言った。私はそれに

「はい。」

と頷く。すると、私の体が光だし、体が作り変えられていくような痛みを覚える。けど、それも直に収まり、光も収まった。その後、ルザムノ〓ラスフィット様は私に色々な能力や力を与えてくれたり、力の使い方や色々な事を教わった。更には、ルザムノ〓ラスフィット様の名前も、長いし、同格の存在となったのだからラスフィットで構わないといってくれた。こうして私はラスフィットとの契約を済ませ、ラスフィットの精神世界から、孝平君の待つ扉の前へと戻って行くのであった。

視点終了

キャラ設定

シホ・アヤカミ（彩神 志保）

種族：元人間、神

魔力：測定不能（5億8千）

能力：人間だった時と同じ能力（重力を操る程度の能力、炎熱と氷結と雷の変換素質、高速処理能力、サイコドライバー）、自然操作（例えば、砂漠だった所を森や草原にする事が出来る。ただし、その時にはかなりの魔力が必要となる。）、高速治癒、死を見ることが出来る程度の能力（見た存在が、何時何処で壊れたり死ぬのかが分かる程度で、直死の魔眼のように壊れやすい所が見れたりはしない。尚、ON・OFFの切り替えが可能）

デバイス：ラスフィット

新米の神でありながら現在の孝平より、少し低い位の膨大な魔力を持つ。

見た目は殆ど変化はないが、身体能力や感覚が人外となっている。また、他にも能力がある。

デバイス

ラスファイトート

種類：神機

待機状態：銀色の宝石が付いたピアス

形態：鏡、イメージはエクサランクス・エターナル?????、?????

能力：自己修復能力、超高速処理、超高速治癒、自然調和、境界調和等

通称はラスファイで、契約者はシホ・アヤカミである。

調和神ルザムノ^{II}ラスファイトート

聖王なのはが生まれ育った次元でのラ・ギアスに存在した三神の一角であった。しかし、何らかの理由で聖王孝平の居る次元の第932管理外世界”ラーギア”へと辿り着いた。

第23話「シホ、上位の神と契約する」(後書き)

次はラーギアを探索して戦力が増えます。

第24話「新戦力は守護獣!？」

シホがラスフィートと契約をしてトルネル遺跡を出た後、孝平にラスフィートを紹介した。その時に孝平は内心では

(おいおい、なんでラ・ギアスの3神の1柱が此処に居るんだよ。)
と驚いていた。そして、孝平とシホは何か使いのになるか物やお土産になりそうな物を探しに行く事になった。そんな時、大きな竜同士で戦っているのを目撃したのであった。

視点：孝平

俺とシホは、トルネル遺跡から南にあるブルトルーナ遺跡へと向かっていた。理由は、そこにお土産になりそうな魔道具や宝石があるとラスフィが言ったのだ。初めにあつたときは驚いたが、ラスフィートで良いと言っていたので、上下には五月蠅くないのかと思ひ、俺は愛称としてラスフィと呼ぶ事にしたのだ。そして、トルネル遺跡とブルトルーナ遺跡の中間辺りで、ラスフィから大きな竜同士で戦っていると聞いた。それを俺は出来れば止めようと思ひ、ブランクのあるシホと一緒に速度を上げて飛ぶのであつた。しかし、8分後、俺は自分の力の無さに悔しく思うことになるとはその時は思ひもよらなかつた。

視点終了

8分後

視点：シホ

ラスフィートの報告を受けて私達は竜が戦っていたであろう場所

に着いた。しかし、そこには倒れ付した竜を2頭見つけた。どうやら相打ちらしい。それを見たとき、私は

(遅かった、止められなかった。)

と後悔した。それは孝平君も同じだったみたいで

「クソ！！間に合わなかった！！」

と膝を付いて叫んでいた。しかし、まだ生きている事を確認し、それに希望を見出したのか、孝平君は直に立ち上がり

「なあ、シホ。」

と私の名を呼ぶ。それに

「何？孝平君。」

と返事をする。すると孝平君から思いもよらない言葉が飛び出してくる。

「この竜達を俺の使守護獣にして助けたいと思うんだがどう思う？」

「なっ！！確かに助けたいとは思っけどどうして？」

と驚きながらもその理由を聞いた。すると

「俺の魔法や能力で直しても良いんだけど、それだと助けてもまた殺し合うに決まっている。だったら此処は俺の守護獣にして2頭を戦わないようにするのが良いと思うんだ。それに、強い戦力も多い方が良く決まってるしな。昔から言うだろ？戦争は量だつてな。」その言葉に私は孝平君の考えている事に気づいた。

「つまり、管理局相手だと如何しても質で勝負しないといけないからこの竜達もそれに加わらせるといふ事？」

という言葉に

「そういうこと。流石、前世からの俺の婚約者だな。俺のことを良く分かってる。で、守護獣にする件、どう思う？」

と言いながら何度も頷いてから聞いてくる。それに私は恥ずかしさで真っ赤にし、慌てながらも

「良いと思うよ！！そ、そんな事より良いの！？もうそろそろ本当に危なそうだよ！！！」

と言った。それに

「ああ、分かった。」
と頷いて2頭に近寄る。その間に2頭は威嚇しようとしていたけど体力が無い様で出来なかった。そうしている間に、人ならざる速度で孝平君は2頭に近づいて立ち止まった。そして、ベルカ式の魔方陣を展開し始め、契約内容を言った。すると、2頭の竜の下にベルカ式の虹色の魔方陣が現れ、虹色の光に包まれたのだった。その時の契約内容は
「ずっと俺と一緒に居る事。」
だった。

視点終了

守護獣となった2頭は、力と速度を持った攻撃特化のドルガン、守りや補助特化のクライスと名付けられ、それぞれに破竜のドルガン、守竜のクライスという二つ名を与えたのであった。

その後の2頭は、喧嘩というか戦い始めたが孝平に止められたので、孝平に従って戦闘を止めた。そして、2頭増えた孝平一行は、ドルガンとクライスに乗って移動を続け、10分後には目的地であるブルトルーナ遺跡へと到着し、内部へ侵入してから財宝や宝剣があったので、それらを回収してから遺跡を出た。他にも、遺跡があったので今度は手分けして探す事となった。

結果、孝平は、大剣を見つけた。しかも、それはかなりの大業物で魔力をも持っていた。しかし、それを手にした途端、孝平が懐にあったゲベル・ガンエデンやセイクリッド・アイゼンMK-?の長剣や小太刀が現れて、それを取り込んだという異変が起り、そのお陰でMK-?の接近戦武器がエネルギー系や魔力系しなくなってしまう、その剣も新たなゲベル・ガンエデンとなってしまう。その後、孝平は驚きつつも他の遺跡にも行き、鉱石や宝石、魔法を吸収する魔剣を手に入れた（見た目は錆が落ちた状態のデルフリンガー

に酷似している)。

一方、他の遺跡では、シホがオリハルコン製の青い剣と赤い槍や財宝を見つけ、ドルガンはオリハルコン製の黒と黄色を基調とした鎧と黒い大剣を手に入れ、クライスは白と赤を基調とした鎧とボウガンと財宝や魔道具を見つけからそれぞれ合流場所であるブルトルーナ遺跡へと戻り、それぞれ得た物を見せ合ったのであった。その時に、孝平は自分のデバイスや武器が吸収した事を話して皆(ラスフィートも含めて)を驚かせたのだった。そして、それぞれが説明を終わらせると、孝平は1柱と2頭を連れて地球へと帰還したのであった。

おまけ

竜の守護獣設定

ドルガン & amp; クライス

種族：竜、守護獣

魔力：EX (2頭共)

能力：炎と電気の変換素質を持つ(純魔力も使用でき、その時の魔力光は黒に近い赤。また、純魔力、電気、炎の切り替えや同時使用が任意で選択する事が出来る。)

元は縄張り争いで相打ちとなった竜達で、死に掛けていた所を孝平の守護獣となる。それぞれ能力が違っており、ドルガンが力と速度を持った攻撃特化で、クライスが守りや補助特化である。また、人間形態の容姿も違っており、ドルガンは、SHUFFLE!の土見稟に似ていて、クライスは、はびねす!の小日向雄真に似ている。

また、2頭は同じ種族であり、見た目はMHのミラボレアスではあるが、それよりも2倍程大きい。

ゲベル・ガンエデン（完全究極形態）

追加特殊能力：材質や武器を取り込む事が出来る、属性変化（水、炎、雷、氷、風の性質を持ち、任意で選択して魔力を纏う事が出来る）

ゲベル・ガンエデンやセイクリッドアイゼンMK-?の剣や小太刀と融合して出来たデバイスで、それらの力とゲベルのAIも完全に融合しているので、ゲベルの意識や記憶を持っている。上記の能力やゲベルガンエデンやMK-?の接近戦武器の能力の他にも、融合や取り込んだ物の性質も吸収する為、また能力が増える可能性がある。尚、大剣時の見た目はMHのアクアガーディアンである。

第24話「新戦力は守護獣!?」（後書き）

次は、遺跡で見つけた武装がデバイス化します。

そういえば、聖王がなのはか、なのはが現代に復活した聖王（聖王教会でも可）側の人間として活躍するSS、恭也やなのはがハルケギニアの貴族に転生して社会を大きく変えようと奮闘するSS等を探しています（お気に入り登録している物以外です）。無かつたら無いで良いのですが、どなたかご存知ありませんか？似た様なものでも構いません。

因みに、私はハルケギニアやゼロ魔については全くではないのですが殆ど知りませんので書けません。

第25話「模擬戦、孝平VSなのは」

ドルガン& amp; クライスとシホを連れて地球に帰った孝平は、シホとドルガン& amp; クライスを、珠津島の婚約者達や海鳴の婚約者達に紹介した。

そして、その後、自宅に帰って、イクスとイルイを含めた家族にも紹介したのであった。シホを紹介された時に、全員はまたかと言うような顔をした後、直に笑顔で新しい仲間を迎えたのであった。そして、シホはドルガン& amp; クライスと共に支倉家に住む事になったのであった。

それから数日後、シホは支倉家に完全に馴染んでいた。イルイやイクスとの仲も良く、孝平がドルガン& amp; クライスを連れて第932管理外世界”ラーギア”の周辺の世界に行っている間は仲良く買い物をしたり、翠屋でなのはやアリサやずずか、フェイト& amp; アリシアと話したりしていた。因みに、はやては、まだ足の調子が治っていないため、入院している。ただ、もう少しで退院できらしく、担当医の石田先生も、自分の事のように喜んでいたので、更に数日後、孝平はなのはから模擬戦の申し込みをされたのだった。

場所：ネビーイーム1号機の訓練室

視点：孝平

なのはから模擬戦しようと言われて、俺は直にOKを出した。そして、今いる場所は、ネビーイーム1号機の訓練室であった。

俺たちは、訓練室に結界をはると、互いにデバイスを起動させた。すると、俺はなのはのヴァイスアイゼンMK-?の変貌に気が付き

「お、おい。ヴァイスの姿が変わってるけど何したんだ？」
と聞いた。すると

「何もしてないよ。だけど、この姿になったのは魔神化してからだからそれが関係してると思う。」

と返ってきた。そう、今のヴァイスアイゼンMK-?の姿は、機械的なものから生物的な物に近くなっているのだ。しかも、背中の羽は、なのはの羽と同じく、片一方の羽が天使の羽になっていた。しかし、なのはの羽と違うのは数であった。なのはのが6枚なのに対し、ヴァイスの羽は8枚なのだ。その答えに

「そうか、で、何か異常は？」

と更に聞き出す。それには

「無いよ。強いて言うなら戦闘力が上がった事かな？」

と答える。なら、模擬戦に支障はなさそうだなと思いつ

「そうか。じゃあ、始めるか。」

と言う。そして

「うん!!!」

と話を止めて俺たちは互いに

「ハアアアアアア!!!」

と叫びながら切り結ぶ。

ガキン

と言う音の後に、なのはは新ゲベルを見て

「えっ？孝平君？その剣は？前に見たときは無かったと思うけど？」

と聞いてきた。それには一度距離を置いてから

「ああ、この前ラーギアに行った時に変わった剣を見つけてな。その剣が何故かセイクリッドMK-?の剣や小太刀とゲベル・ガンエデンを取り込んだんだ。それがこの剣で、新たなゲベル・ガンエデンだ。因みに、こいつは魔力も吸収するぞ。」

と説明する。それに

「そなんだ。じゃあ、その剣の能力は未知数なことだね？」

と頷いてから聞いてきた。それを俺は

「そうだな。持ち主の俺でもこいつの性能を完全に把握してるわけじゃないからな。というわけで、こいつの力を試すのに手伝ってもらうぞ。」

と肯定した後に行った。それには異存が無いらしく

「わかった。」

と頷くと俺たちはまた切り結ぶのであった。

ガキン

と言う音の後に、また少し距離を置いてから互いに

「烈風斬!!!」

「紫電一閃!!!」

と接近戦の魔法を使う。

ガキン

と言う音を立てたてからは均衡していた。なので、俺は直に左腕から3連砲を撃ちだす。すると、なのはが吹き飛ばされた。その隙には体勢整えていない内になのはに向かい切りかかる。すると、なのはは間一髪のところまでエクスカリバー似の剣でガードした。しかし、そこに問題が生じた。なんと、エクスカリバー似の剣が折れてしまったのだ。この剣は、かなり特殊な金属で出来ているのに、こうも簡単に折れてしまうとは、我ながら恐ろしい武器を持った物である。それに驚いた俺となのはであったが、俺は直に気持ち切り替えて再び切りかかる。それに気づいたなのはも折れた剣を消してから、小太刀二刀を取り出した。そして

「雷徹!!!」

となのはは、御神流の中ではかなり威力が高い部類の雷徹を使って応戦してきた。

その選択は正しく、俺は少し押し返された。その瞬間、なのはは俺から離れて小太刀をしまい、ハウリングランチャーを2挺取り出して撃ってきた。俺はそれを避け様と上昇した。しかし、なのはは既にもう2発撃っていて、俺の目の前に迫っていた。俺は少し驚いたが、避けようとはしないで、そのままなのはの方に向かいながらそ

れを聖王の鎧で無効化する。だが、ドーンという音と共に俺の姿は煙に包まれた。

しかし、なのはの追撃は終わらず、後ろと前から2つずつの魔力の塊が俺めがけて飛んで来るのを感じた。なので、俺は先ほどと同じように無効化しようと動き出した。しかし、目の前にあったのは光線ではなく、2人のなのはであった。そして

「「勝負ありだね。」」

と2人のなのはが俺の首元に小太刀を突きつけながらそう言ったのだった。そう、なのはは偏在をだしてから自分の魔力と偏在の魔力を光線の魔力の量を同一の大きさにして俺の感覚を誤らせたのだ。こうして俺は、負けたのであった。

その後、また模擬戦をしてから俺はなのはと一緒に買い物やお茶をしたりして楽しんで、帰りにはキスをしてから帰宅したのであった。そして、俺は今日の負けを教訓とする為、何時もよりハードな修行を開始するのであった。

因みに、この日の模擬戦の成績は、10戦中俺が9勝なのはが1勝であり、新ゲベルの性能を把握したのであった。

視点終了

第25話「模擬戦、孝平VSなのは」(後書き)

孝平を一度だけ負かせて見ました。それと、今回は短いです。あと、もう少しで管理局との戦争が始まります。

第26話「機械兵と特殊デバイス」

孝平となのはが模擬戦を行っていた時、ネビーイーム1号機と3号機では、リリスとオファニスがプレシアと協力して、予定していた全てのロボットとデバイスを完成させていた。

「ふふふ……やっと出来たわ。なのはや孝平が喜ぶ顔を眼に浮かぶようだわ。」

「そうね。そうそう、此方も出来たわ。もうアリシアはデバイスを起動させてフェイトと模擬戦をしてるわ。」

「そう。じゃあ後は皆様に知らせるだけですわ。」

「ふふっ!!そうね。」

と会話を交わし、笑いあう3人であった。そして、その翌日、孝平となのはとアリサとすずかはネビーイームに呼び出されたのであった。

場所：ネビーイーム1号機

視点：孝平

俺となのはが模擬戦をした翌日、俺となのはは普段は連れてこないアリサとすずかを連れてネビーイーム1号機に来ていた。二人を連れてきた理由は、二人専用のデバイス&支援機とロボットが完成したとの連絡が来たのだ。そして、その受け取りと調整の為にどうしても二人を連れてくる必要があったからだ。俺達はデバイス室に着くと、リリスに向かつて

「リリス、来たぞ。」

「やつほー、リリス。元気してた？」

「久しぶりね。」

「リリスさんお久しぶりです。」

と俺からなのは、アリサ、すずかの順で挨拶をした。それに

「ええ、久しぶりね。それはそうと……。」

と答えて、リリスが机に向かい、二人専用のデバイスを取って、こちらに戻ってきた。そして、そのデバイスを

「はい。これが貴女達専用のデバイス。バハムートとリヴァイアサ
ンよ。」

と言いながらアリサとすずかに渡した。

「「これが？」」

と聞くアリサとすずか。そこにアリシアとフェイトの二人が部屋に入ってきて

「そうだよ。因みに、私のデバイスはヴァジュラだよ。」

「因みに私はバルディッシュ・ブラストだよ。アリサ、すずか。」
と言うのだった。それに

「「ア、アリシア（ちゃん）にフェイト（ちゃん）？」」

と驚くアリサとすずか。だが、俺となのはは気配で誰だか分かっていたので慌てる事無く

「おお、アリシアにフェイト、久しぶりだな。」

「フェイトちゃん、アリシアちゃん、来たんだ。」

と言って挨拶したのだった。そして、そんな俺たちに

「「うん。」」

と返事をした。そこで俺は

「さて、早速始めるぞ？まずは起動だ。俺が大分前に渡したテキストを覚えていれば大体は出来るはずだ。」

と言った。それに

「やってやるうじじゃない。じゃあ、行くわよ？すずか。」

「うん。」

と意気込んで

「バハムート！！」

「リヴァイアサン！！」

「「セットアップ！！」」

と叫んで鎧と武器を一体化させたデバイスを起動させた。そして、俺は

「よし、じゃあ、行き成り実戦形式での訓練なんだが、2対2でやって貰う。アリシアとフェイトにも手伝ってもらうぞ。いいな？」
と言う。それに二人は頷いてから

「私達はいいいよ。私達も行くよ。フェイト。」

「うん、姉さん。」

「ヴァジユラ！」

「バルディシュ・ブラスト！！」

「セツトアップ！！」

と鎧と武器が一体化したデバイスを起動させるのだった。そして

「じゃあ、組み合わせはする？」

と俺が聞いた。すると

「そうですね。では、組み合わせはアリサ様がフェイト様と組み、
すずか様がアリシア様という組み合わせでよろしいですか？」

とオファニスが4人に聞いた。それには俺も異存はなかった。それ
になのはは

「うん、それで良いと思う。経験者と初心者の組み合わせだし、データを見る限りだとそれが一番良いかもね。」

と納得するが、アリサが

「どうしてよ。なのは、別にこの組み合わせが気に入らないわけじゃないけど、理由が欲しいわっ！」

この組み合わせになる必要性を聞いてきた。なので

「そうだな。じゃあ、分かりやすくいうと、リヴァイアサンとバルディッシュ・ブラストは接近戦もこなせるけど、真価を発揮するのは中遠距離や殲滅戦だからな。一方、バハムートとヴァジユラは中遠距離もこなせるけど接近戦がメインなんだよ。」

と説明した。それでアリサは理解したよう

「なるほどね、つまり初心者であり、接近戦主体の私と遠距離かつ経験者のフェイトが組んで、経験者であり、接近戦主体のアリシアと初心者で遠距離型のすずかだとバランスが取れるって事ね？」
と聞いてきた。そして

「そういう事。分かった？」

と頷いてからなのはが確認を取った。それに

「そういう理由ならOKよ。じゃあ、始めましょうか。」

とアリサは頷いてからそういうのだった。

「ふふふ、こういうとき恭也さんに接近戦を教えてもらった事が役にたつね。アリサちゃん。」

「本当ね。習つといて良かったわ。護身術にもなってるしね。」

「ふふ、そうだね。」

と言う会話をしてから、アリサ&mp;フェイトVSア&a
mp;アリシアが模擬戦を始めたのだった。そして、最終的には2
0回模擬戦して、9対11と言う僅差でするか&mp;アリシア
の勝ちとなった。それから、機械兵とプレシアがいる所へと移動し
て、プレシアとの挨拶をそこそこにして、機体を確認してから機体
の説明がなされた。見た目的には

ユニコーンガンダム

Hi - ガンダム

ナイチンゲール

ストライクガンダム×3（ランチャー、ソード、エールを装備した
計3機）

ガンダム試作3号機

バクウ

V2ガンダム

ダブルオークアンタ

ガンダムダブルエックス

ストライクフリーダム

インフィニットジャスティス

ミイテリア・フリーダム

ミイテリア・ジャスティス

デステイニー

レジェンド

Xアストレイ
イージス
ターンX
ターンAガンダム
ガンダムアレックス
ZZガンダム
Zガンダム
ガンダム
リオン
ガーリオン
エルアインス
アシュセイヴァー
サイコガンダム
DESTROYガンダム
ビグザム
クインマンサ
ガオガイガー
ガオファイガー
マジンガーZ
グレートマジンガー
ダンクーガ

を小型化したようなもので、全てに超小型の魔力炉を搭載しているとの事であった。これらが、管理局の敵として現れるのだ。襲われる側としてはたまったものではないだろう。そして、俺自身の偏在やセラフイムからの連絡で、元スカリエッティにいる仲間たち（時間操作で間に合わせた）や聖王教会の戦力が全て揃った事が分かった。そして、海鳴や地球にいる全ての仲間のデバイスもアリサやすずか達が模擬戦をしている時に受け取り、時間操作と高速学習装置を使って、使い方や戦い方を教え込み、間に合わせた。こうして、俺達は戦力を全て揃え終わり、次の日には必要最低限の防衛隊や機

体を地球に残し、計40機以上の機械兵や量産型自動人形達を俺達の戦艦に乗せてから、管理局本局に向けて出発させるのであった。

視点終了

第26話「機械兵と特殊デバイス」（後書き）

デバイス設定は別の機会となります。

それと、もうそろそろこの作品と聖王と魔装機神の本編が終わりに近づいてきました。本編が終わっても、外伝や、今は終わってしまった出張生徒会のような物を書こうと思っています。それと、この作品と聖王と魔装機神が書き終わったら、新作を出そうと思っています。既に、第1話は完成して、後はストックを溜め込んでいるような状態なので、途中の2作が書き終わった頃にはある程度出来上がっていると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0748q/>

FORTUNE ARTERIAL ~ 支倉孝平は転生者にして聖王 ~

2011年3月22日10時23分発行